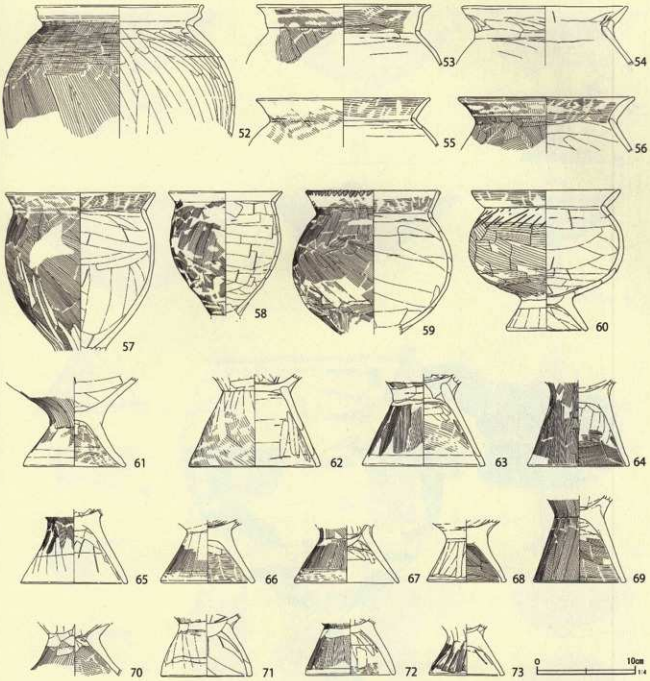
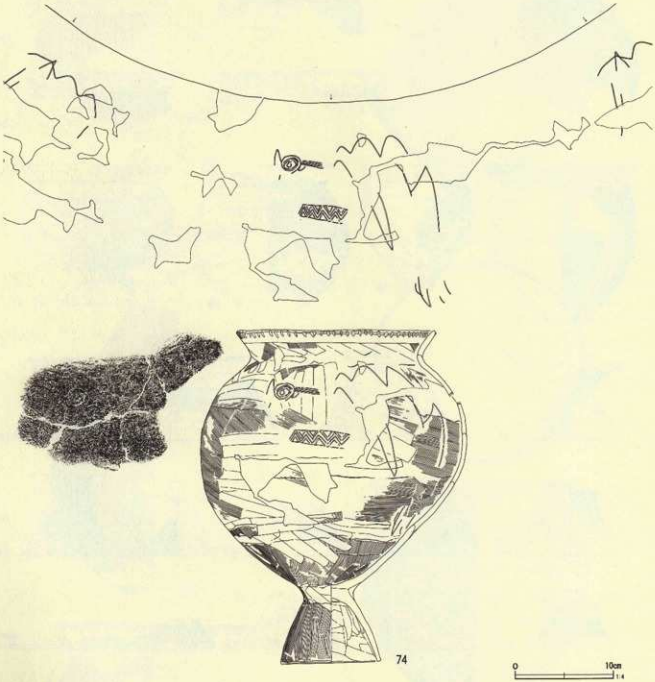


第464図　第79号溝跡４トレンチ出土遺物（６）

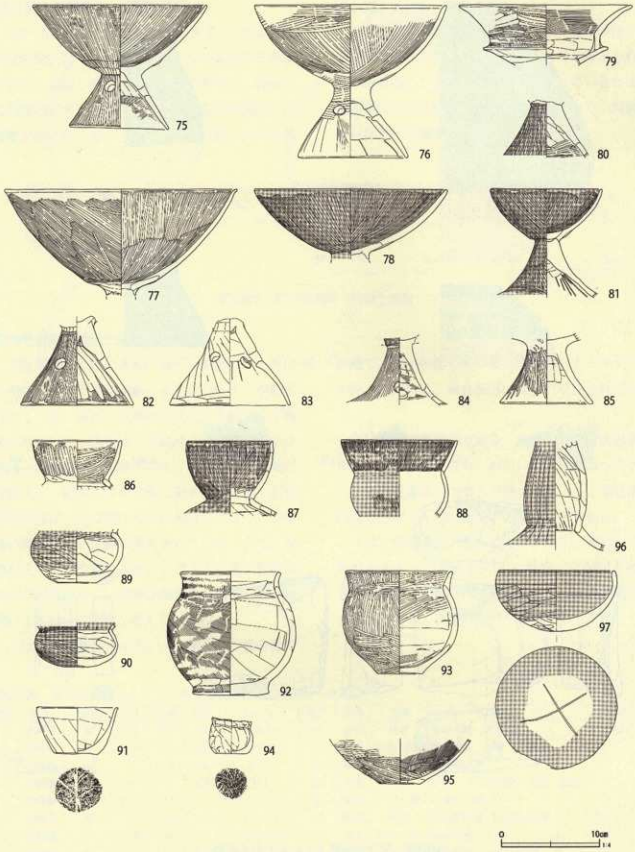
焦げ状の炭化物が、外面には前面に煤が付着する。99は球形胴で、胴部上半に単節ＲＬの文様帯が２段施文されている。文様帯以外の部分はヘラ磨きが施されている。縄文施文後にヘラ磨きが施されている。内面はヘラナデである。100は全体の器形が細長く、縄文が乱れており、101よりも一段階新しい可能性がある。101は100よりも器高に対する径が大きく、縄文も整っている。口縁端部には100は単節ＬＲの、101は単節ＲＬの縄文が施文されている。外面も口縁部同様の100は単節ＬＲの縄文が８段、101は単節ＲＬの縄文が６段施文されている。両者とも下半のヘラナデは縄文施文



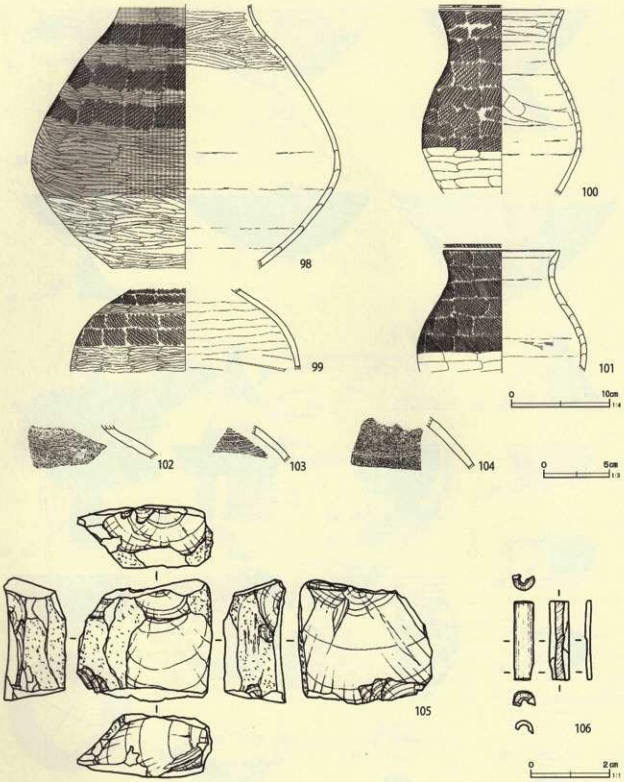
第465図　第79号溝跡４トレンチ出土遺物（７）

後に施されている。内面は粘土帯の接合痕が残り、ヘラナデが施されている。100は外面に煤が付着する。

102～104は壺の胴部の破片である。103は小型壺の可能性もある。102・104は平行沈線と波状文の組み合わせで、102が５条１単位の刷毛目工具により平行沈線、波状文とも２段を１単位として施文されている。104も同様で７条１単位の工具が使用されている。103は「ハ」の字状の櫛による刺突文と平行沈線が施される。刺突文は沈線を挟んで羽状の構成を取り綾杉状になっている。沈線の工具の方が太く、幅が広いもののようである。



第466図　第79号溝跡４トレンチ出土遺物（８）

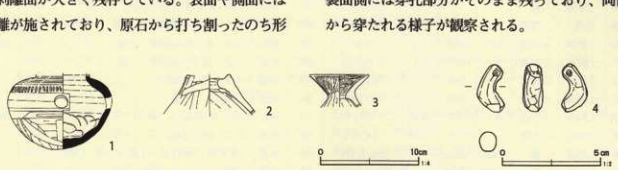


第467図　第79号溝跡４トレンチ出土遺物（９）

103は粘土が精選されている。

105・106は出土した石製品である。105は石材が緑色凝灰岩で、管玉の荒削工程の未製品と考えられる。表面と側面には原礫面が残存し、裏面には剥離面が大きく残存している。表面や側面には剥離が施されており、原石から打ち割ったのち形状を整えていると考えられる。

106は石材が緑色凝灰岩の管玉で、表面は仕上げられており、完成品が破損したものと考えられる。縦方向に二分割するように破損しているため、裏面側には穿孔部分がそのまま残っており、両側から穿たれる様子が観察される。



第468図　第79号溝跡一括出土遺物

第79号溝跡一括出土遺物

1は須恵器の甕である。扁平な胴部で、上半はロクロナデ、下半は回転ヘラケズリ後ナデが加えられている。肩部には櫛状工具による刺突文が施文されている。内面は上半はロクロナデ、下半は無文、円形の当て具痕が残る。内外面に自然釉が付着する。刺突文はやや粗く施されている。刺突文の位置は、孔の開けられた部分ではなく、やや高い肩部に近い位置に施文されている。また、沈線が孔の下の位置に巡る。このような施文位置はあまり類例がない。産地は陶邑産と見えられ、時期はＴＫ23～47段階と考えられる。

2は高坏の脚部である。ホゾ接合で、接合部で剥離し、臍が脱落している。内外面ともヘラナデが施されている。接合部分にはナデが施されている。

3は器台の器受部である。直線的で小さな器受部で、端部は丸く収められている。外面はヘラケズリ後器受部はヘラ磨きが施されている。器受部内面も同様である。脚部の内面はナデである。

4は土製勾玉で、完形である。風化が著しいが内外面ともナデ調整と考えられる。土製勾玉は、弥生時代から古墳時代前期にかけて、この地域で多く出土する。小型のものが多い。

第174表　第79号溝跡４トレンチ出土遺物観察表（第459～467図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	壺	13.4	28.8	8.4	CEHIM	95	良好	浅黄	外面黒斑　３層	92-4
2	土師器	壺	(15.2)	26.4	5.8	BCGHJ	50	普通	にぶい黄橙	外面黒斑　１層　２層	
3	土師器	壺	－	21.2	5.8	CEI	90	普通	にぶい黄橙	５層№1125	
4	土師器	壺	－	－	6.2	HI	30	普通	橙	赤彩　バレス文様　２層　L58G	
5	土師器	壺	(13.7)	17.8	－	BEHIM	60	普通	にぶい橙	６層№1128	
6	土師器	壺	－	15.6	9.5	BCEI	50	普通	淡黄	外面煤付着　２層№1086	
7	土師器	壺	(11.8)	13.0	－	CGHIM	30	普通	にぶい橙	器面風化　２層	
8	土師器	壺	－	11.0	9.2	BCHIJM	80	普通	にぶい橙	外面黒斑　３層№1097	
9	土師器	壺	11.2	18.1	6.2	CEHIM	95	普通	にぶい黄橙	外面黒斑　５層№1117	92-5
10	土師器	壺	－	17.8	5.0	CEHIJM	80	普通	にぶい橙	№11・14　M57G	92-6
11	土師器	壺	(21.2)	9.5	－	BCEHI	60	普通	にぶい橙	№10　N57G	91-4
12	土師器	壺	－	4.6	－	IJ	90	普通	浅黄	赤彩　３層№1104・1111	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
13	土師器	壺	(11.7)	4.3	—	CHIJ	25	普通	にぶい黄橙	L58G	
14	弥生	壺	20.4	5.7	—	AEIJ	5	良好	赤	赤彩　5層	
15	土師器	壺	(16.2)	7.3	—	BCHIJ	40	普通	にぶい黄橙		
16	土師器	壺	(12.0)	6.7	—	BEHIJ	25	良好	にぶい黄橙		
17	土師器	壺	(13.0)	7.6	—	BEHI	25	普通	にぶい黄橙	L58G	
18	土師器	壺	—	5.2	7.2	CHIJM	50	良好	にぶい黄橙	木葉痕　N57G　№5	
19	弥生	小型壺	9.3	14.6	5.3	EHJM	100	良好	にぶい黄橙	外面煤付着　2層	80-8
20	土師器	小型壺	11.5	14.4	5.4	IJM	95	良好	にぶい橙	外面黒斑　5層	95-7
21	土師器	小型壺	—	12.0	5.4	CGHIJ	100	普通	にぶい橙	外面黒斑　3層	
22	土師器	小型壺	—	10.6	4.1	CEHIJM	70	普通	にぶい橙	M58G	
23	土師器	小型壺	—	10.6	5.1	HIJM	50	普通	褐灰	3層	
24	土師器	小型壺	(8.7)	13.1	4.1	CHIJM	90	良好	にぶい黄橙	№19　N57G	95-8
25	土師器	小型壺	—	2.7	5.0	ACHI	80	普通	にぶい橙	L58G	
26	土師器	甕	24.0	26.5	—	BCEHI	60	普通	灰黄褐	煤付着　3層　5層　L58G	
27	土師器	甕	19.9	24.0	—	ACEHIM	90	普通	褐灰	3層　L58G	
28	土師器	甕	19.3	22.8	—	CEHIJ	90	普通	にぶい黄橙	外面黒斑　5層　L58G	115-6
29	土師器	甕	(20.7)	18.3	—	BCHIJ	30	良好	にぶい黄橙	外面煤付着　M・N57G	
30	土師器	甕	(23.6)	17.0	—	CEHI	25	普通	灰黄褐	黒斑　煤付着　5層　口縁キザミ	
31	土師器	甕	19.5	19.7	—	CEHIM	40	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　4層	
32	土師器	甕	(18.5)	18.3	—	BCIJM	25	普通	黒褐	5層	
33	土師器	甕	17.8	18.0	—	BHIJM	50	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　L58G	
34	土師器	甕	15.8	23.5	—	CEHI	75	良好	にぶい黄橙	叩き痕　外面煤付着　N57G	107-1・4
35	土師器	甕	14.1	12.5	—	CEHIJ	80	普通	にぶい黄橙	叩き痕　外面煤付着　5層	
36	土師器	甕	(14.8)	13.1	—	CEGJ	20	良好	にぶい黄橙	外面煤付着　M58G	
37	土師器	甕	(13.2)	6.1	—	EHI	25	良好	灰黄褐	叩き痕　L58G	
38	土師器	甕	16.5	8.2	—	GIJ	50	良好	褐灰	外面煤付着　N57G	
39	土師器	壺	—	14.1	7.3	ACEI	50	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　2層	
40	土師器	甕	—	16.1	(5.0)	EIJM	40	良好	灰黄	叩き痕　外面煤付着　5層　L58G	107-2
41	土師器	甕	—	16.3	(4.2)	BCHIJ	30	良好	にぶい橙	叩き痕　L57G　M57・58G	107-5
42	土師器	台付甕	(17.7)	26.5	7.3	BCEHIM	30	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　2層	
43	土師器	台付甕	18.9	26.2	10.1	CEHI	80	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　3層	100-4
44	土師器	台付甕	—	13.7	—	CEHIJM	60	普通	にぶい黄橙	内面煤付着　2層	
45	土師器	台付甕	—	12.2	11.2	ACEI	50	普通	にぶい黄橙	内面煤付着　M58G	
46	土師器	台付甕	—	18.6	—	AEHI	40	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　N57G	
47	土師器	台付甕	—	16.8	10.9	CEHIJ	80	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　M58G	
48	土師器	台付甕	—	27.0	(11.4)	CGHIJ	50	普通	にぶい橙	外面煤付着　M58G	
49	土師器	小型台付甕	18.1	21.3	—	BHIJM	90	普通	にぶい橙	内外面煤付着　2層	104-6
50	土師器	小型台付甕	(19.9)	24.5	9.4	ABCFI	60	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　2層　3層	105-2・3
51	土師器	台付甕	20.9	30.2	10.3	BCEI	100	普通	にぶい褐	内外面煤付着　5層	100-5
52	土師器	台付甕	17.0	13.1	—	CGHI	40	良好	灰黄褐	S字甕　5層　内外面煤付着	
53	土師器	甕	(17.8)	6.2	—	CEHIJ	10	良好	にぶい黄橙	№11　N57G	
54	土師器	甕	17.0	6.0	—	BCEHI	80	良好	にぶい黄橙	1層　5層№1108	
55	土師器	甕	(17.9)	5.0	—	CEHJM	40	普通	にぶい橙	4層№1102　L58G	
56	土師器	甕	(18.0)	5.7	—	CHIJ	30	良好	灰黄褐	外面煤付着	
57	土師器	小型台付甕	15.3	16.0	—	CHIJM	80	普通	褐灰	外面煤付着　L58G	105-1
58	土師器	小型台付甕	(11.7)	12.6	—	BHIJM	40	普通	にぶい橙	内外面黒斑　L58G	
59	土師器	小型台付甕	13.6	14.6	—	CEGHIJ	90	良好	にぶい黄橙	内外面煤付着　3層	105-4
60	土師器	小型台付甕	15.4	14.2	8.4	ABCEHM	50	普通	にぶい橙	内面黒斑　2層	105-5・6
61	土師器	台付甕	—	9.1	10.5	BCIM	75	普通	にぶい黄橙	L58G	
62	土師器	台付甕	—	9.9	13.5	HIJM	90	良好	にぶい黄橙	内外面煤付着　3層	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
63	土師器	台付甕	—	9.3	(12.6)	BCEHI	50	普通	にぶい黄橙	4層№1101	
64	土師器	台付甕	—	8.8	10.5	CEIJM	100	普通	にぶい黄橙	内面煤付着 №1004	
65	土師器	台付甕	—	7.5	11.0	BEHJ	100	良好	にぶい黄橙	外面黒斑 M57G	
66	土師器	台付甕	—	6.4	9.5	CEHIJM	95	良好	にぶい黄橙	内面煤付着 M57G	
67	土師器	台付甕	—	5.8	10.8	CEGHI	100	普通	にぶい黄橙	N57G	
68	土師器	台付甕	—	6.3	8.2	BEGHJ	100	良好	にぶい橙	M57G	
69	土師器	台付甕	—	8.8	9.6	CEHI	95	普通	にぶい黄橙	L58G	
70	土師器	台付甕	—	5.3	—	BGHIM	80	良好	にぶい黄橙	外面煤付着 M57G	
71	土師器	台付甕	—	6.3	9.4	CEG	95	普通	にぶい橙	内外面煤付着 N57G	
72	土師器	台付甕	—	5.6	9.1	ACEHI	95	普通	にぶい橙	L58G	
73	土師器	台付甕	—	5.2	7.8	CEHIM	95	普通	浅黄橙	3層	
74	土師器	台付甕	19.9	34.1	10.2	CEHIM	95	普通	にぶい黄褐	胴部外面縄刻 2層	101-1~5
75	土師器	高坏	18.0	12.5	(10.2)	CEI	80	普通	にぶい黄橙	三孔 L58G	132-2
76	土師器	高坏	(19.7)	15.5	(11.2)	BEIM	50	普通	にぶい黄橙	L58G 三孔	132-3
77	土師器	高坏	(23.8)	10.8	—	HIJM	30	良好	にぶい橙	3層№1095	
78	土師器	高坏	19.8	7.1	—	CHIM	40	普通	にぶい橙	赤彩 M58G 3層	
79	土師器	装飾器台	(17.5)	6.1	—	CHIJM	40	良好	にぶい黄橙	N57G №9・18	
80	土師器	高坏	—	5.9	—	CHI	100	普通	浅黄	赤彩 内面黒色 6層	
81	土師器	高坏	11.4	11.0	—	CHI	80	普通	にぶい黄橙	赤彩 3層 4層	
82	土師器	高坏	—	9.0	(11.6)	ACEHIJ	50	普通	にぶい橙	三孔 L58G	
83	土師器	高坏	—	8.7	(12.4)	ACIM	75	普通	橙	四孔 3層№1110	
84	土師器	高坏	—	6.9	—	ACHIJ	60	普通	にぶい黄橙	四孔 L58G	
85	土師器	高坏	—	7.1	9.6	BCEHIM	80	良好	にぶい橙	外面煤付着 №1134	
86	土師器	小型壺	(9.0)	5.0	—	BEHI	50	普通	にぶい黄橙	M58G №2	
87	土師器	小型壺	(8.8)	7.6	—	CEHI	20	良好	にぶい橙	赤彩 №1075	
88	土師器	坩	(12.0)	7.8	—	CIJ	30	普通	にぶい橙	赤彩 M57G 9層	
89	土師器	坩	—	5.3	3.6	BCHIJ	75	普通	灰黄褐	赤彩 木葉痕 N57G	
90	土師器	坩	—	4.5	2.3	EHI	80	普通	にぶい黄橙	赤彩 №19 M57G	
91	土師器	鉢	8.3	4.3	4.4	BCHIM	80	普通	橙	木葉痕 3層	125-5·6
92	土師器	鉢	(9.9)	12.5	7.8	BCIJM	80	普通	にぶい橙	外面黒斑 2層	125-4
93	土師器	鉢	11.0	10.4	4.7	BCEHIJ	60	普通	にぶい黄橙	5層 L58G	125-7
94	土師器	手づくね	4.0	3.6	3.3	CHI	90	良好	にぶい黄橙	木葉痕	
95	土師器	甑	—	4.6	(4.2)	HIM	40	良好	黒褐	M58G	
96	土師器	高坏	—	11.1	—	CHIJM	80	普通	にぶい黄橙	赤彩	
97	土師器	坏	11.8	6.1	—	CEHI	95	良好	にぶい黄橙	赤彩 ヘラ記号「メ」	146-3·4
98	土師器	壺	—	26.9	13.4	AEH	30	良好	にぶい橙褐	赤彩 2層 3層	83-4·5
99	土師器	壺	—	8.4	—	BGK	20	良好	赤	№1080	82-6
100	土師器	甕	(12.8)	18.7	—	CEH	20	良好	暗褐	外面煤付着 2層	83-3
101	土師器	甕	11.9	12.4	—	AEGHI	55	良好	橙褐	№2 2層 L58G	83-6
102	土師器	壺	—	2.6	—	CEGI	5	普通	にぶい黄橙	L58G	
103	土師器	壺	—	2.8	—	AI	5	普通	にぶい黄橙	赤彩 M58G	
104	土師器	壺	—	4.0	—	CEGI	5	普通	にぶい黄橙	L58G	
105	石製品	管玉未製品	長さ3.2	幅3.4	厚さ1.6	重さ19.7 石材 緑色凝灰岩				L58G 炭上 荒削	151-20
106	石製品	管玉	長さ2.0	幅0.4	厚さ0.4	重さ0.4 石材 緑色凝灰岩				第4トレンチ	151-21

第175表 第79号溝跡一括出土遺物観察表（第468図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	7.8	—	IK	95	良好	灰	内外面自然釉付着	148-7
2	土師器	高坏	—	4.2	—	BCEHI	80	普通	にぶい黄橙		
3	土師器	器台	6.1	3.4	—	CIJM	95	良好	にぶい黄橙	内外面黒斑	
4	土製品	勾玉	長さ2.4	幅1.0×0.9		EHI	100	普通	にぶい橙	重さ2.72	148-1

4．第48・79号溝跡出土木製品

(1) 農具

第469・470図は、馬鍬である。牛馬に牽かせ、水田の代掻きをする道具である。鋤や鍬などで土を掘り起こした後、田に水を張り、この道具で縦横に掻いて土塊を解消する。牛馬の頸木や鞍から延びた紐と本体を結び付ける「引棒」、使用者が握る「把手」とその「柄」、土塊を掻き砕くための「歯」、そして歯を植え込み、「引棒」、「把手」を装着する「台木」から構成される。

全体の残存状態は良くない。「台木」、「歯」、「引棒」の一部が残るだけである。そのため、馬鍬全体の復元図、部品ごとの挿図を掲載した。なお、復元図は、馬鍬を上部から観察した図、半裁した状態の図を掲載した。

台木（1－①）は、「歯」を植え込むための角孔が、等間隔に13個並んでいる。ただし、実際に存在する孔は10個である。角孔の間隔、その平均は、角孔幅334㎜、長さ367㎜である。なお、台木の3分の1ほどが欠損しているため、角孔の深さは、明らかではない。現状、台木の長さは1740㎜である。

引棒は、両端から歯の角孔2本目と3本目の間、右の引棒孔は、台木の右端から305㎜、左の引棒孔は、台木の左端から245㎜、歯と直交する方向に穿った孔に装着していたようである。この孔は、台木を貫通する長径44㎜、短径29㎜の楕円形の孔である。

引棒孔の内側には、把手の柄を装着した十字孔（角孔）があけられている。十字孔と柄の装着方法は、明らかではないが、柄は、台木に対して垂直方向とばかりは限らない。湾曲していたとすると、水平方向に装着していた可能性がある。僅かながら、左の柄穴には、柄の一部（1－⑩）が残っていた。

歯（1－②～⑨）は、8本残っていた。うち6本は装着状態で出土し、右側の2本は、台木から分離した状態で出土した。イチイガシを用いた刀形の歯である。刀形といっても図上刃部のように見える側は、幅広の面で平滑に仕上げられ、下から4分の1ほどの場所から先端に向かう部分が、細くなっている。断面は、外側にふくらみのある三角形状であり、むしろ刀の峰に当たる側が、細くなっている。

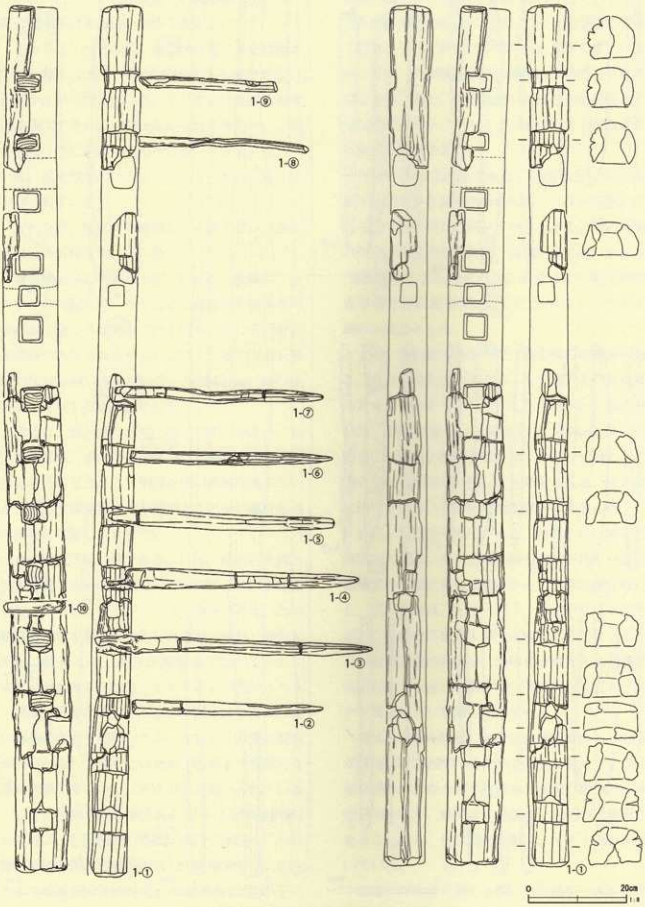
これは、歯の峰側が水田の中で土塊を砕き、掻きわけて進んでいくためである。そのため、峰側には、わずかながら「反り」が認められる。

歯は、台木の角孔に根元を装着し、上から楔を打ち込んで装着した。上部が、叩打により潰れて変形したり、欠けたりしている。歯の長さは、一覧表にみるように③が最大で563㎜、②が最小で390㎜である。⑨・⑧は、欠損している。再び復元図をみると、歯は③を最大に山形に植えつけられていたようである。

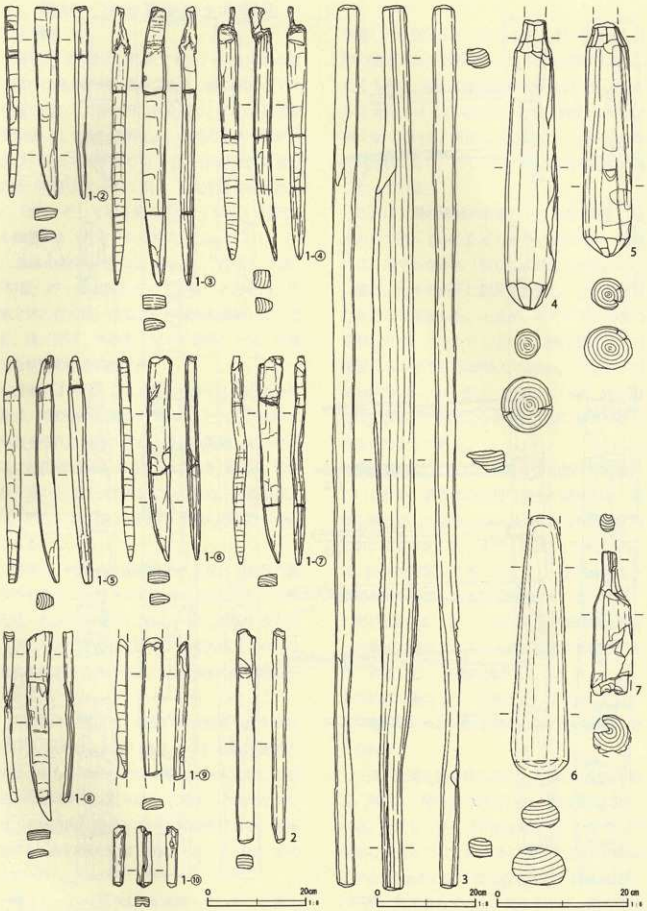
歯の長さについては、当初から山形に植えられていたのか、装着部の欠損で長さが詰められ、補修を繰り返した結果、このようになったのか、明らかにできなかった。また、歯は、（1－②～⑧）は、比較的硬質なイチイガシ、1－⑨は、コナラ属アカガシ亜属を加工して作られていた。

第470図2は、ふくらみのある四角形の断面をした棒状木製品である。上端と下端が欠損しており、あるいは、馬鍬の歯かもしれない。ただし、1の馬鍬の歯のように刀形となっていないことから、補修用に用いられた歯か、別の馬鍬の歯と考えられる。

3は、両端を把手状に加工した棒状木製品である。用途は、明らかではないが、櫓の横桟に似ている。ただし、長さが1786㎜もあり、かなり大型のものを運んだことになる。図上で上から280㎜、下から300㎜のところまでの断面は、径50㎜ほどの円形に加工されていた。把手または、他の部材に装着したと考えた。中央付近は、緩やかに幅広



第469図　第48・79号溝跡出土木製品（1）



第470図　第48・79号溝跡出土木製品（2）

となる。ただし、明確な加工の痕跡はなく、モミ属の原木を引き裂いた状態である。

4～9は、杵である。全て握り部、または搗き部で欠損しており、全体を知ることはできない。わずかながら残る握り部に上下を分ける節の有無は明確にできない。節はなかったと考えたい。搗き部は、全て先端に向かうに従って大きくなっている。搗き部端の残る4～6・8・9は、丸く仕上げられている。

6と9が、板目材を使用し、イチイガシである。他は芯持ち材を用いている。

第471図10は、横槌（砧）である。横槌は、持ち手と身（敲打部）からなる。身はやや扁平な円形だが、握り手は円形に仕上げられている。身の先端は、水平で丸みがない。コナラ属アカガシ亜属の片材が用いられていた。全長449㎜、身の径70㎜、持ち手の径35㎜である。

横槌は、渡辺誠の研究（渡辺1989）があり、10はそのE類、またはD類に近い。藁打ち用、または豆打ち用とされる。明瞭な使用痕跡は残らないが、図上右側面が、やや扁平なことから藁打ち用の横槌と判断しておきたい。

11～13・15は、鍬である。11は、直柄の平鍬か。柄を装着する孔の位置で二つに欠け、かつ上部端も欠けている。上下が、うまく接合できないため、柄穴も形状が異なるかもしれない。また、鍬先も両端は狭まるが、厚みが鋭利ではないことから、未成品とも考えられる。イチイガシが用いられる。

12は、鍬先の破片である。挿図では、残りの良い部分の断面を掲載したが、左右とも表面の剥離がみられる。上部がないため、どのような鍬となるか判断できない。イチイガシが用いられている。

13は、曲柄平鍬の身である。「ナスビ形着柄鋤」とも呼ぶ。『木器集成図録』（以下『図録』）のD類（町田分類の「膝柄鍬B」：町田1981）にあたり、そのⅢ式に相当する。すなわち、「笠の下のくびれから外湾しながら幅を増し、刃部の途中で屈曲して刃縁に至る。」型式である。

なお、刃部の両端が屈曲してから幅を狭くする一群は、すべて鉄製U字形刃先を装着するというが、13は、その装着痕跡を積極的に認めることはできない。また、柄を装着した部分の摩耗痕などは確認できない。イチイガシを用いて丁寧な加工を施した製品である。

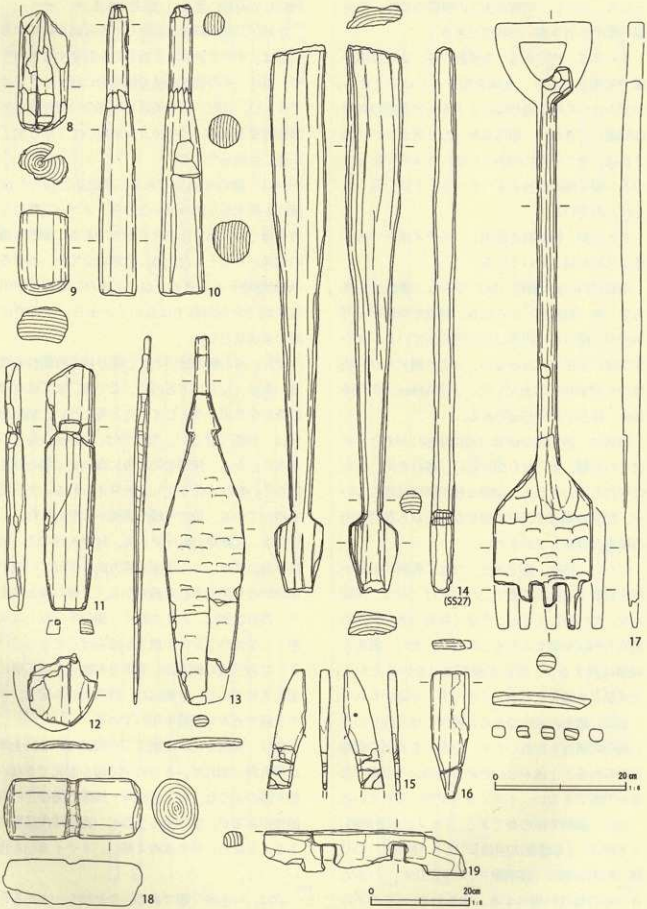
14は、鋤の未成品である。未成品としたのは、板片を原木から割り出したのち、スプーン状に左右を粗く削り出しただけだからである。第27号墳の周溝から出土したため、古墳に立てたいわゆる「埴輪樹物」とも考えたが、あまりにも加工が中途半端で左右対称ではないことから、ここでは、鋤の未成品とした。

また、身の幅が狭いので、掘り棒の可能性も残る。身は、左右に下るので、なで肩、または丸肩の身を作り出そうとしていたと考えたい。柄の形状は、判断できない。現状では、838㎜の長さがあることから、使用者の身長に合わせて柄の長さ、握り手の形状を作り出したと考えられる。モミ属を用いている。第27号墳の周溝から出土した。

15は、又鍬身の破片である。材の木目に添って縦方向に割け、また上部も横方向に折れているが、柳葉状の刃部と木目の角度から二又鍬の身と考えた。残存状態は、とても悪く、歯の半分以上は欠損し、全体の2分の1以上がばらばらになっている。なお、歯の側面は、面取りが施され、丁寧に加工されている。計測値は、残存長のみ記す。コナラ属アカガシ亜属を用いている。

16は、先端を枕状に加工した板材である。上部が横方向に割れているため全体像を復元できない。掘り棒のような土掘り具の身、馬鍬の歯などの可能性があるが、供伴する土器が、古墳時代前期であることから、後者は考え難い。イチイガシを用いている。

17は、一木多又鋤である。身と柄を一木から作り出す一木鋤（長柄鋤）である。刃先は、多又の



第471図　第48・79号溝跡出土木製品（3）

フォーク状となる。挿図では、身の右側、左側3本の歯が欠損し、唯一残る右から2本目の歯も先端を欠損する。歯は、等間隔に5本作られる。厚み、幅ともに共通し、丁寧に作られている。

柄の径は、把手から刃部にかけてほぼ一定で30㎜である。刃部の肩部は、左右に約45度の角度で下り、刃縁との境が不明瞭な「なで肩1種」(『図録』参照)である。また、刃部の断面形は、前後の区別が不明瞭な「Ⅰ式」に相当する。

把手は、欠損しているが、現在のスコップのように「V」字に立ち上がり、握り手の横木を付けた「V型」と考えられる。

現存の全長は854㎜、刃部幅154㎜(復元幅173㎜)である。イチイガシの一木、板目材が用いられている。

18は、木錘である。俵、蓆、弧などを編むための錘である。経糸(縄、紐)をからげた木錘を編み台(コモゲタ)に二個一対とし、複数個掛けて用いた。輪切りにした芯持ち材の側面中央に細い溝のめぐる形態で、木錘の3類(『図録』)にあたる。定型化した木錘とされる。なお、木製品は、常時水漬けの状態のため、使用時の重さは、明確にできない。サカキを用いている。

19は、田下駄である。幅63㎜の板材で、右上が緩いカーブを描き、二つの角孔が並ぶ。角孔の下端は破損しており、全体を復元することは難しい。田下駄ではないかと考えられる。イチイガシを用いている。

第472図20～24は、鍬である。20・21は、直柄横鍬の身である。

20は、左端や左下が欠損しているが、横方向に細長い刃部で、中央やや上にまっすぐな柄(直柄)を差し込んだ丸孔があることから、直柄横鍬とした。木目は、長方形の長手(左右の方向)に通る。柄孔が、60度の角度であけられている。平面は長方形で、その中央上に柄孔があけられている。柄孔の周囲は隆起し、明瞭な段がみられる。また、この隆起は、上がまるく下が尖った舟形であることから、A3型と考えられる。身は、左右端に向かうに従って緩やかに反っている。また上下方向の反りは見られないが、背面が丸く仕上げられている。柄孔も木目に添ってバームクーヘン状に分離し、残存状態は決して良くない。柄孔を中心とすると、身は、幅438㎜、長さ160㎜となる。身の厚さは、18㎜と薄い。イチイガシを用いている。

21は、柄孔付近が残るだけだが、木目が左右に通っていることから、直柄横鍬の身と判断した。柄孔は、周囲から隆起したA型であるが、上部が欠損しているため、細部はわからない。円形の柄孔で、45度の角度であけられていた。イチイガシを用いている。

22は、直柄鍬の未成品である。柄孔の隆起を削り出そうとして失敗し、身と分離したと考えた。表面は、荒削りした状態のままである。ヒノキを用いている。

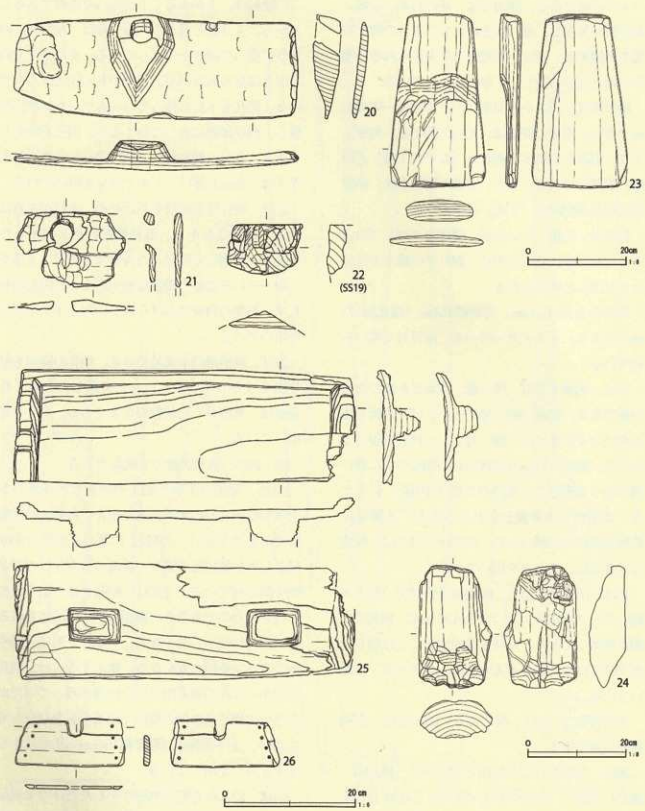
23・24は、直柄広鍬の未成品である。

23は、刃部の丁寧な加工や柄孔などは無いが、全体形状から身の幅が15cmを超え、台形状の平面形であることから、『図録』に基づき広鍬の未成品とした。縦に目が通り、後面の下方3分の2が、粗く削られている。上部は、柄孔を作り出すために残されたのであろう。前面は、平坦に作られるが、左右に向かい薄くなる。上端と下端は、緩やかなカーブを描き丸くなる。鍬とするには、柄孔に向かって左右縁を削り込む作業が残っていたが、左下の欠損やその他の要因で加工を断念したと考えたい。上下395㎜、刃部幅150㎜に復元できる。イチイガシを用いている。

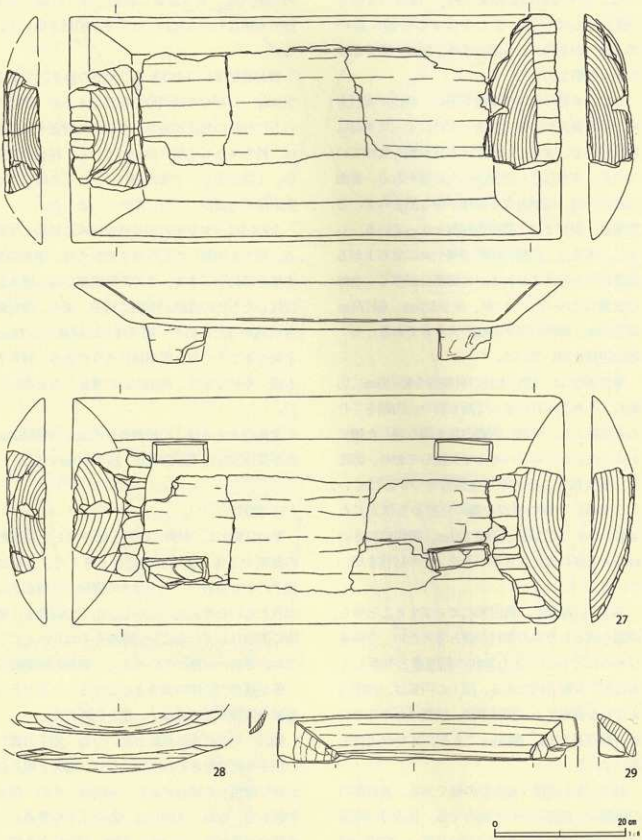
24は、23よりも粗く木取りをしただけの未成品である。広鍬を作り出そうとしたか、断定できない。スダジイを用いている。

(2)容器

第472・473図25～29は、容器である。『図録』



第472図　第48・79号溝跡出土木製品（4）



第473図　第48・79号溝跡出土木製品（5）

では、やや深めのものを「槽」、浅めのものを「盤」としている。ここではその分類に従い、25・28・29を盤、27を槽とする。26は、四方転びの箱と判断した。

25は、木目の粗い広葉樹を用い、長辺が木目方向となる長方形の盤である。木目にそって半分に割れている。また、口縁部は木目が粗く欠けているため、本来はもっと深かったと思われる。裏面に左右一対、四脚となる脚部が削り出されている。脚部は、現状では、截頭角錘形となっている。しかし、本来は、内側の傾斜が緩やかに立ち上がる脚部だったと考えられる。欠損部分が多く、全体の法量はわかりにくいが、全長523㎜、幅174㎜、高さ69㎜、脚部の高さ58㎜の大きさである。モミ属の辺材を用いている。

第473図27は、粗い木目の針葉樹を幅740㎜に切断し、それを木目にそって断ち割り、内側をくりぬき容器とし、外側に四脚の足を削り残した槽である。左右が、木目にそって欠損しており、脚部も二脚欠損することから全体像をつかみにくい。ここでは、年輪の状況や脚の位置から復元した。全長740㎜、幅234㎜、高さ120㎜、脚部の高さ54㎜の大きさに復元できる。トチノキの辺材を用いている。

28は、口縁部が、楕円形にカーブすることから、両端を落とした木の葉状の盤と考えたい。全体をつかみにくいが、木の葉状の側面部と判断した。木目が、長軸方向に走る。図上の円弧は、内面のえぐりを表現した。脚は不詳。法量はわからないが、残存長315㎜、幅30㎜である。スギの辺材を用いている。

29は、25と同様、長方形の盤である。長辺部の口縁部から底部にかけて残存する。長辺の口縁部は、4㎜と薄いが、短辺は23㎜と厚い。短辺の厚みは、口辺部から底部まで同一である。このつくりは、25・27とも一致する。破損しているため、全体の大きさは明らかにできないが、全長463㎜、残存幅70㎜、高さ57㎜、容器の深さ41㎜である。脚の有無はわからない。ヒノキの辺材を用いている。

第474図30は、臼である。大型の搗き臼である。全体は、いびつな楕円形の柱状であるが、胴部の六方に柱状の意匠があり、そのうち対面する二方は、持ち手として刳り抜かれている。柱状の意匠は、上部が太く、下部が細い。出土した時点では、完形品だったが、三点に割れてしまった。

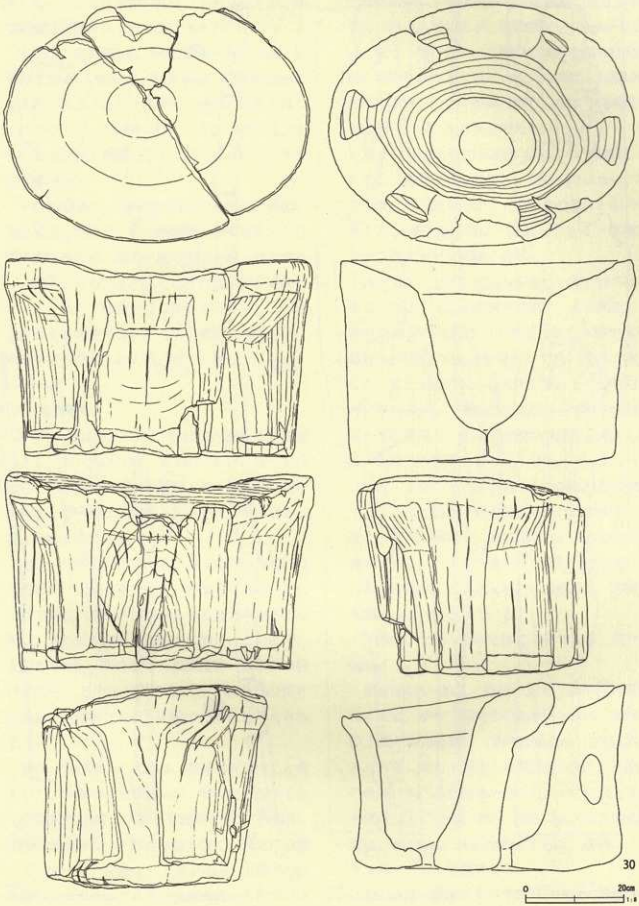
この臼は、ケヤキの切り株を巧みに利用して作る。根方を切断した切り株を逆転させ、根方の洞を搗き部に加工する。そのため底部には、樹木を伐採したときの痕跡が明瞭に残る。また、使用頻度が高かったためか、搗き部が口縁部から336㎜と深くまでえぐれ、底が抜けそうである。持ち手も細くやせており、使用のため摩耗したと考えたい。

全体の大きさは、口縁部長径615㎜、短径490㎜、底部長径542㎜、短径380㎜、高さ400㎜である。

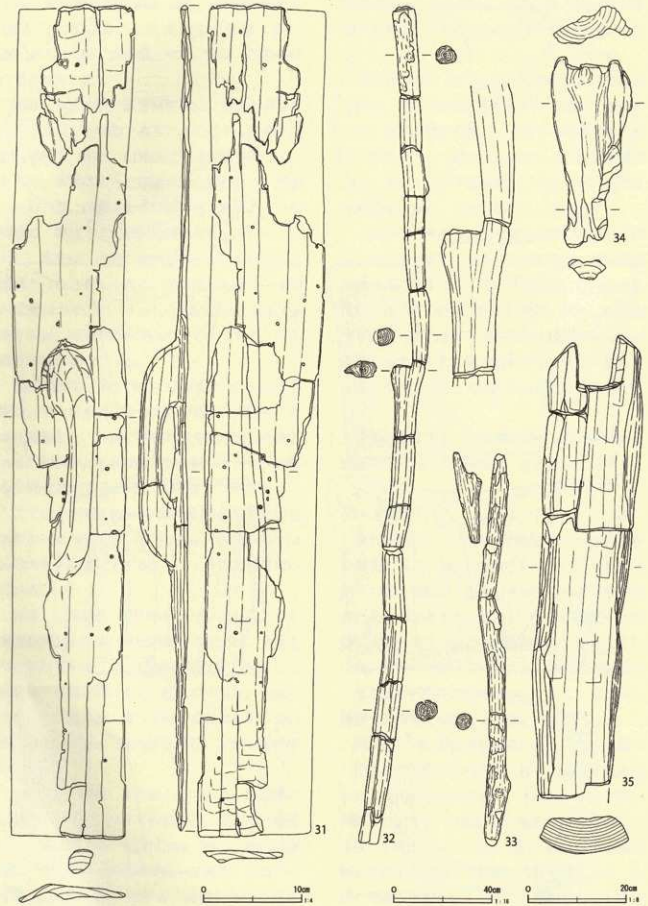
(3) 武器

第475図31は、中央に把手を彫り出した長方形の薄板である。楯の装着把手と考えた。当初は、把手のある蓋板か、把手付きの扉板から薄板がはがれたものと考えた。しかし、上下の両端を、明瞭に面取りしていること、厚板からはがれたにしては、きれいに割けていること、薄板の両側面の一部が残り、全体の大きさが分かることなどから蓋板や扉板などではなく、楯と判断した。

楯は、弓矢による損耗が高いため、加工の難しい把手や把手付きの板を別に作り、楯板と組み合わせて使用した場合があり、本例は、その一例と判断した。なお、本例には、板の上下を貫通して多数の小孔があいている。当初、弓矢による板の割れを防ぐため施した紐綴じの孔と考えたが、孔径や間隔が不揃いなことから、紐綴じの孔ではなく、虫食いや樹木の根によってあけられた孔と判



第474図　第48・79号溝跡出土木製品（6）



第475図　第48・79号溝跡出土木製品（7）

断した。ちなみに本例の孔は、1～3㎜だが、楯の紐綴じの孔は、4～6㎜である。

本例は、全長843㎜、板幅112㎜、板厚16㎜、把手長さ230㎜、幅52㎜、高さ48㎜、握り幅22㎜の大きさである。なお、把手は、薄板の中央ではなく、やや下がった位置に付く。また、把手は、土圧による変形も考慮しなくてはならないが、やや右に傾斜する。

手持ちの楯は、弓矢戦で飛来する矢が、頭部に受けることを防ぐ、また接近戦で刀や槍などから頭部を守るため、胸の位置で把手を握ったとすると、把手よりも上部が広くなければ目的を達成しないことから、挿図では、把手を下方とした。把手の傾きを考慮すると、右手に盾を持ち、左手に武器を持つ左利きの人物と考えられる。

（4）建築部材

第475～481図32～79は、建物にかかわる木製品である。32～35は柱材、36～39は桁材、40・41は梁材、42は礎板か槽の未製品、43～66は壁板材か床板材、67～69は母屋材、70～76は、垂木である。77～79は梯子である。

32は、分枝式の柱である。通し柱の中央部に枝を残して、大引きを受けたいわゆる「分枝式」の柱材である。木材の枝が分かれる部分を水平に切断し、また枝の側面も縦方向に削る。この部分に大引きを渡し、床を張った高床建物（倉庫）の柱材である。とすると、ここから下端までの長さ1930㎜が、柱掘り方から床までの高さと考えられる。

また、分枝部から上部は、壁材が取り付くと考えると、少なくとも1455㎜が、壁の高さといえよう。なお、上端、下端とも腐敗が進んで欠損し、全体は分からない。残存状態が悪く、14点に分離してしまった。柱径は、下部で78㎜、上部で93㎜と細い。コナラ属アカガシ亜属が用いられている。

ところで、分枝式の柱は、静岡県山木遺跡（弥生時代中期）や福岡県那珂久平遺跡（弥生後期）などで出土しているが、柱の径が、100㎜から150㎜と細く、桁行き一、二間の小規模な掘立柱建物跡に用いられたとされている。本例は、古墳時代前期であるが、78～93㎜と細く、やはり同規模の高床建物に用いられたと考えたい。

33も分枝式の柱の可能性があるので掲載した。ただし、枝部上位は欠損し、明らかではない。枝分かれした一部を切断し、大引きの受けとしたと考えた。残存長1575㎜、径68㎜である。樹種は、コナラ属アカガシ亜属である。

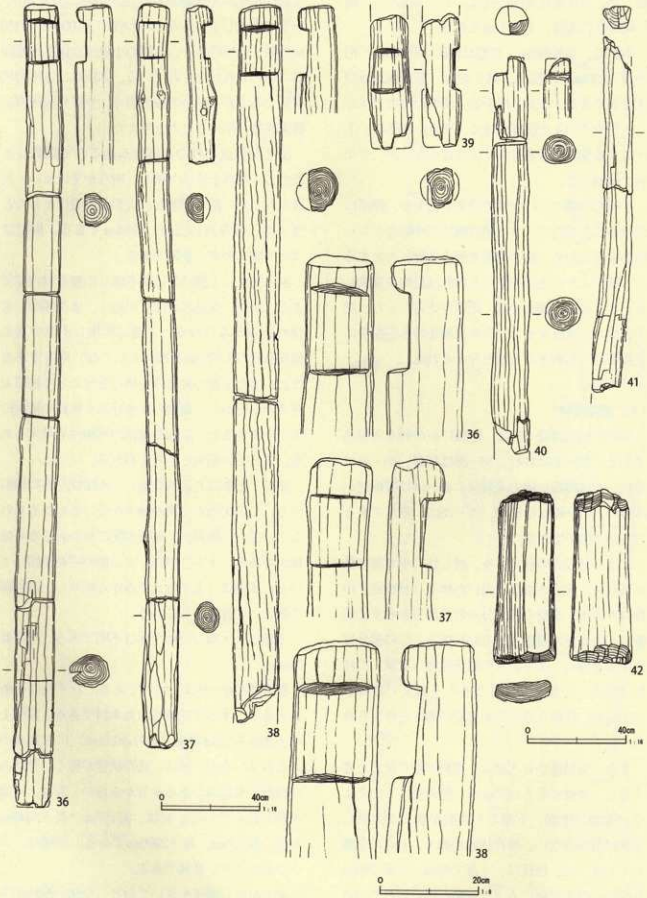
34・35は、上部に欠込みを施した割り材の柱である。34は、欠込みの深さが短く、また側面にも抉り込みがみられる。下部は欠損し不明である。幅163㎜で厚さ70㎜と板材としては、厚手であること、また上部の欠込みを桁の受けとして柱材と考えた。しかし、側面の抉り込みを柱材や桁材のあたりとすると、床板や壁板の可能性も考えられる。またその転用とも考えられる。

35は、上部に欠込みを施し、両端は左右に傾斜する。この欠込みで桁か棟木を受けたのかもしれない。左右の傾斜が、屋根勾配にかかわるならば棟木である。トネリコ属シオジ節の辺材を用いている。本例は、まず丸太をみかん割りし、芯材部を割とって柱材としている。

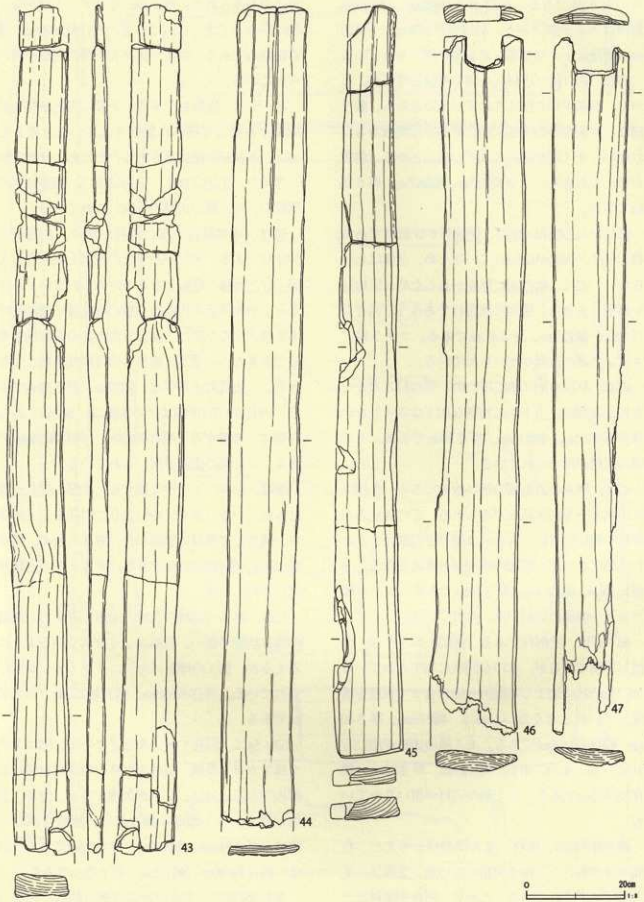
下部は、欠損のため全体は不明である。残存長948㎜。

第476図36～39は、桁材である。互平柱の可能性もある。すべて芯持ちの丸木材である。挿図上の上端から78㎜前後（39のみ144㎜）に欠込みがみられる。なお、39は、残存状態が悪く、欠込みの後面に欠込みがあるか分からない。37は、下端を削り込んでいる。36は、幅157㎜、長さ3240㎜、37は、幅120㎜、長さ2990㎜である。樹種は、コナラ属アカガシ亜属である。

40、41は、端部を欠いており、全体の形状が分からないが、互平材、または梁材と考えた。芯持



第476図　第48・79号溝跡出土木製品（8）



第477図　第48・79号溝跡出土木製品（9）

ちの丸木材である。40は長さ1605㎜、径153㎜、樹種はカエデ属である。41は長さ1430㎜、径120㎜、樹種はトネリコ属シオジ節が用いられている。

42は、割り材（辺材）を用いた柱と考えた。しかし、両端が荒く加工されていることから、盤や槽など木製容器の未加工品、あるいは礎板かもしれない。モミ属が用いられていることから、前者と考えておきたい。全長700㎜、幅247㎜、厚さ85㎜である。

第477～479図43～66は、壁板材か床板材である。43・44は、両端が途切れているため、全体はわからない。43は、幅の割に厚みがあるため、床板材か貫板、または、建物の構造材であろう。残存長1710㎜、幅120㎜、厚さ47㎜である。コナラ属アカガシ亜属の辺材が用いられている。

44は、厚みの割に幅広のため、壁板材と考えた。なお、両側面、上下端に特別な加工はみられない。残存長1654㎜、幅145㎜、厚さ20㎜である。モミ属の辺材が用いられている。

45は、厚みのある幅の狭い板材である。左側面に中央と下方に欠込みがみられる。この欠込みが、柱材や間仕切り柱、あるいは壁材との結合にかかわる加工ならば、床端の床板材と考えられる。全長1520㎜、幅140㎜、厚さ40㎜である。コナラ属アカガシ亜属の辺材が用いられている。

46・47は、壁板材である。挿図上の下半は、欠損し不明であるが、木口が凹状に加工されている。木口を凸状に加工した板材と組み合せて板壁を構成していたと考えたい。46は、幅175㎜、厚さ40㎜、残存長1420㎜である。モミ属の辺材が用いられている。また、47は、幅145㎜、厚さ35㎜、残存長1410㎜である。モミ属の辺材が用いられている。

第478図48は、床材、または壁材と考えた。右側半分が割れ、下端も欠損している。上端は、半円形に加工されていることから、円柱や梁材などと接していたと考えた。下端に「コ」の字状の抉り込みがみられる。厚さが一定せず、上端から下端に向かって太くなっている。残存長2070㎜、残存幅98㎜である。コナラ属クヌギ節の辺材が用いられている。

49～51は、壁板材である。上部に円孔が穿たれ、縄などを通して桟木に緊結されていたと考えた。49は、左右が明確に落されていたため、ほぼ完形と考えた。上辺は狭く、下辺は広い。樋膨矧ぎの壁板か。モミ属の辺材が、用いられている。

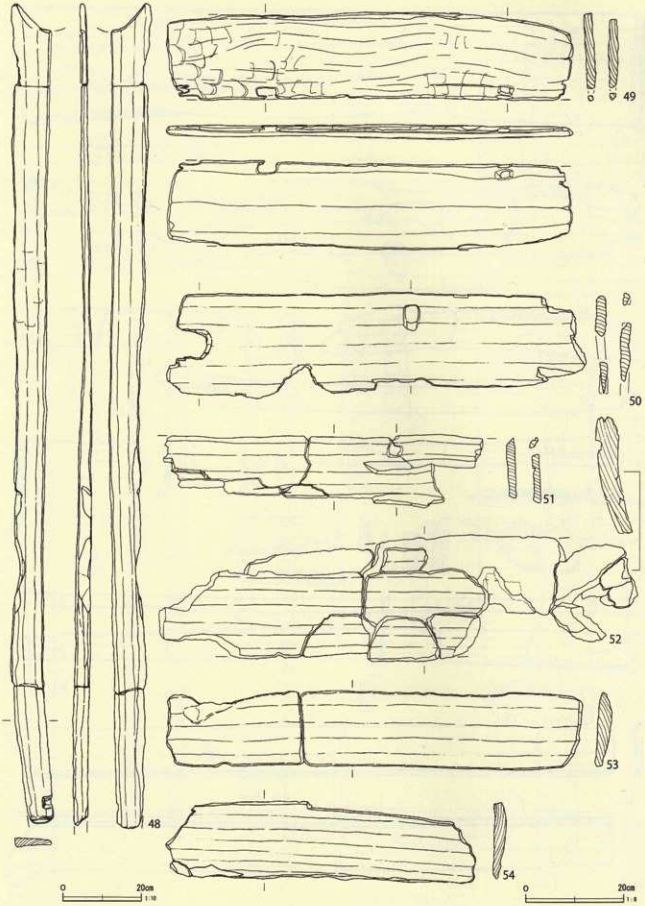
50は、中央付近上部に円孔を穿つ。左端部が、凹字状である。木口が凸字状の板材と組み合って、46・47と同様、壁板となるのかもしれない。とすると、中央付近の円孔は、壁に取り付く棚の受け木を挿入するために、開けられた孔の可能性を考えておきたい。また、蹴放しの可能性も残しておきたい。円孔の大きさは、幅27㎜、長さ35㎜である。円孔から凹字部までの距離は、407㎜である。右端は、欠損する。残存長850㎜、残存幅208㎜である。モミ属の辺材が用いられている。

51は、左右、下半が欠損する。上部に円孔が開けられている。本来、49のように円孔を二ヵ所穿ち、縄などで部材に緊結したと考えられる。残存長643㎜、残存幅147㎜である。クスノキの辺材が用いられている。

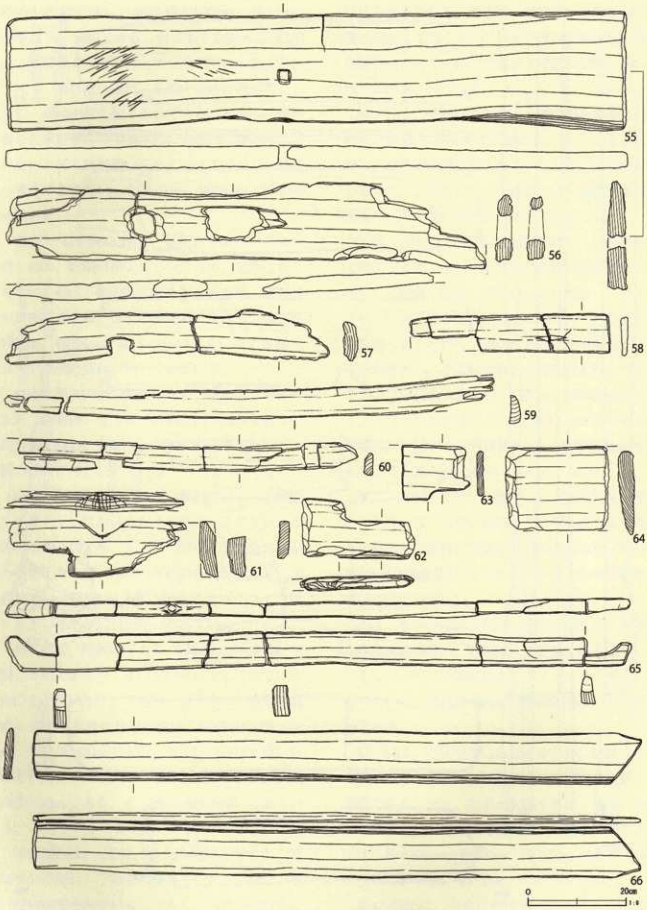
52は、厚手の辺材のため、床板と考えた。両面の残存状態が悪い。右端は、くびれているようにみえるが、加工の確証はない。イチイガシが用いられている。残存長838㎜、残存幅255㎜、厚さ40㎜である。

53・54は、円孔や欠込みなどないが、53はコナラ属アカガシ亜属、54はムクロジの辺材を用いた壁板である。54は、左半が欠損するが、53は、全体が残る。上下端面に溝などは、認められない。53は、長さ842㎜、幅150㎜、厚さ30㎜である。54は、残存長630㎜、幅155㎜、厚さ23㎜である。

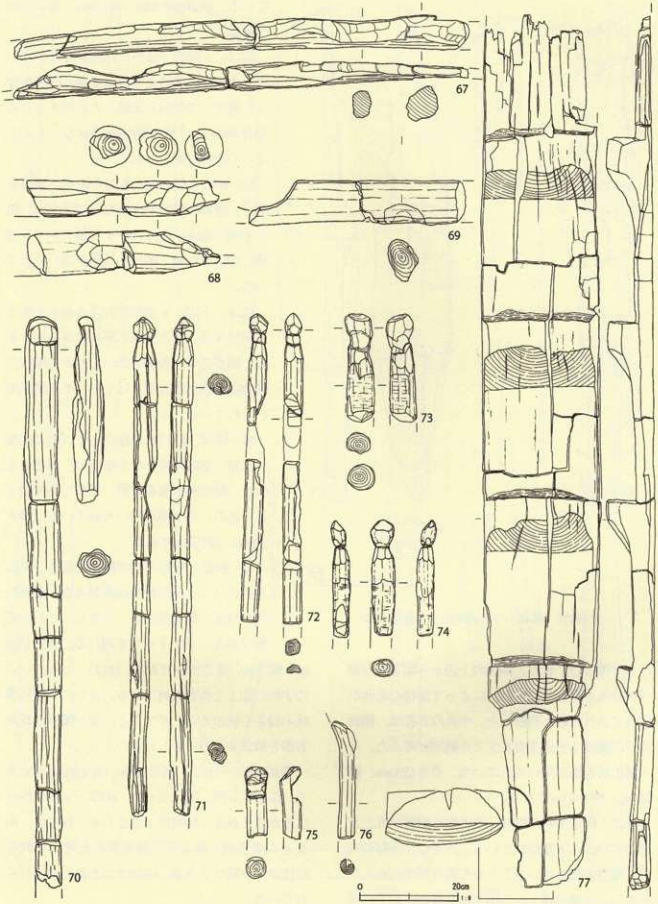
第479図55は、中央付近に方孔（枘穴）を穿つ床板である。厚みのある板材であり、片面が日焼



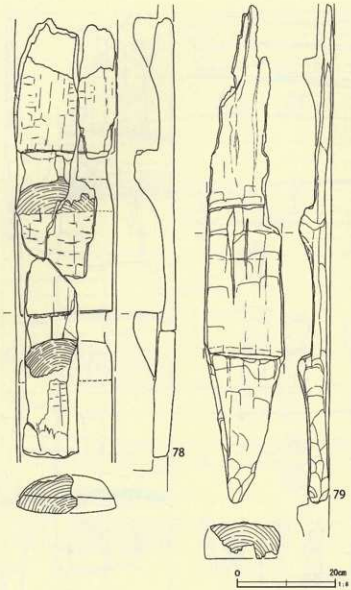
第478図　第48・79号溝跡出土木製品（10）



第479図　第48・79号溝跡出土木製品（11）



第480図　第48・79号溝跡出土木製品（12）



第481図　第48・79号溝跡出土木製品（13）

けして黒ずむ。また、挿図の上辺から幅70㎜の部分が白みを帯びる。別の材によって部材の表面が隠れていたためと判断した。中央の方孔は、棚板などの調度を支える束を立てた枘穴と考えた。モミ属の板目板が用いられている。長さ1260㎜、幅241㎜、厚さ40㎜である。

56は、用途不明の板材。中央部に細長い穴と方形の穴が並んで穿たれている。ただし、方形の穴は、部材が割れていることから長方形の穴かもしれない。上部が緩やかに削ぎ取られる。右下に緩やかな抉り込みがみられる。スダジイが用いられている。残存長971㎜、幅155㎜、厚さ35㎜である。

57は、上部の一箇所に円孔が穿たれている。本来は、49のように二ヵ所に円孔を穿ち、縄などで部材と緊結したと考えられる。残存長650㎜、残存幅95㎜である。オニグルミの辺材が用いられている。

58～60は、幅の狭い板材である。厚みも薄く、建物の壁材や床材などではない。用途不明である。58は、コナラ属アカガシ亜属、59はクワ属、60はモミ属が用いられている。

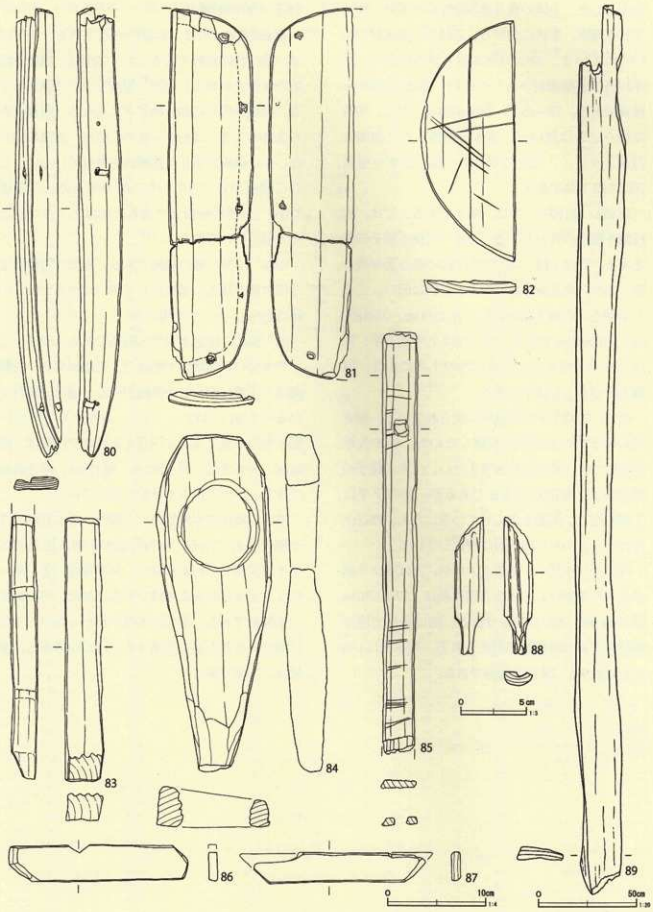
61は、上辺にV字型の欠込みがみられる板材である。厚さ34㎜と厚みはあるが、年輪の幅が広く、強度の弱いことから床板や建物の構造材とは考えにくい。モミ属が用いられている。

62～64は、壁材の一部である。62は端部が凸状、63は凹状となる壁板の一部である。64は、壁板か床板を方形に切断した未加工品である。モミ属が用いられている。長さ208㎜、幅167㎜である。

65・66は、用途不明の板材である。65は、左右にフック状の抉り込みが入る。また左右の厚み、幅も異なる。ただし、これで完形である。イチイガシを用いる。長さ1266㎜、幅74㎜、厚さ33㎜である。66は、一端が「へ」の字状に加工された板材である。また、一辺に溝状の段差を認めることができる。別の部材と組み容器を構成するのかもしれない。

第480図67～69は、抉り込みのある丸木材である。67は二ヵ所、68は三ヶ所、69は一ヵ所の抉り込みがみられる。特定はできないが、柱や梁、桁などの構造材と組み合う建築部材と考えられる。67はコナラ属コナラ節、68はオニグルミが用いられている。

70～76は、垂木である。挿図では、垂木の先端



第482図　第48・79号溝跡出土木製品（14）

を上とした。全体の残る垂木はない。また、すべて軒先部が、掌状に曲がる。芯持ちの丸木材が用いられている。70のみ径650㎜と厚みがあり、垂木以外の建築部材かもしれない。他は、径440㎜前後である。72～75は、樹皮が残る。76は、明確な抉り込みは無いが、垂木と判断した。樹種は、71がスダジイ、72～75がコナラ属アカガシ亜属、76はニワトコである。

第480・481図77～79は、梯子である。77は、樹皮側を梯子の背とし、78・79は、芯側を梯子の背とする。77は4段、78・79は2段の踏み面が残る。77・78は、踏み面を高く作るが、79は低い。三者とも蹴上げの高さは一定し、77は930㎜、78は820㎜、79は670㎜である。77・78は上半と下半、79は上半が欠損する。とくに79の上半にもう一段、蹴上げがあったはずである。

また、79の下半は、杭状に削られている。固定式の梯子のため地面に設置したのか。杭や矢板、その他で二次利用したと考えたい。三本の梯子の踏み面は、粗削りのままであるが、79の下半は、丁寧に削り、先端を尖らせている。なお、78は火災にあったのか、部分的に炭化している。

77はツブラジイ、78はムクロジ、79はサクラ属の丸木を半割りして作る。残存長は、77が1757㎜、78が900㎜、79が1000㎜である。89は長尺で建築部材の床材の可能性が考えられる。残存長は4.54m、幅20.9cm、厚さは5.2cmである。

(5) 中世の木器

第482図80～82は、容器の底板である。80・81は、曲げ物の底板である。とくに80は、側板を留めた桜の皮が残る。周囲に側板をはめる溝がめぐる。細長い円形の曲げ物と考えられる。残存部から全体の大きさはわからない。81は、周囲に溝がないが、破線で示した範囲は色あせていない。ここに側板がめぐっていたためと考えたい。長径376㎜、短径87㎜以上である。80はヒノキ、81はモミ属が用いられた。

82は、小型の桶の底板である。表面に刃物による切り傷が残る。俎板として用いたかもしれない。径は181㎜、ヒノキを用いた。

83～88は、用途不明の木製品である。83は、ヒノキを用いた棒状の木製品で、先端が尖る。右側面は、丁寧に削られた痕跡が残る。他は、割れているのか加工は粗い。84は、自在かもしれない。茄子形の中央に大きく円孔をあける。円孔は、径84㎜。大きさは、長さ341㎜、幅115㎜、厚さ41㎜である。コナラ属コナラ節を用いている。

85は、板状の木製品で、上部の一部に方形の穴が開けられている。左右両端が丁寧に加工され、下半は欠損してわからない。スギを用いる。86・87は、面取りのある板材である。88は、弓の弭状の木製品である。末弭か本弭かわからない。半分に割れ、また上部も欠損する。径20㎜である。樹種は、不明である。

第176表　反町遺跡第３次出土木製品等観察表　(第426～428・430～436・469～482図)

遺構	分類	図版	挿図	器種	加工型式	プレパレート	樹種	SR	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考	備考
ＳＤ79	木製品	469	1	馬歯		1505	ツブラジイ	S	1475	116	560	流路	本体と歯 年代測定 ホゾ２カ所
ＳＤ79	木製品	469	1	馬歯		1506	ツブラジイ	S					
ＳＤ79	木製品	470	1-②1	馬鍬（畑）		2139	イチイガシ	S	390	50	25		割材
ＳＤ79	木製品	470	1-③1	馬鍬（畑）		2144	イチイガシ	S	563	46	27		みかん割り　芯去
ＳＤ79	木製品	470	1-④1	馬鍬（畑）		2141	イチイガシ	S	513	37	35		割材
ＳＤ79	木製品	470	1-⑤1	馬鍬（畑）		2140	イチイガシ	S	458	35	31		割材
ＳＤ79	木製品	470	1-⑥1	馬鍬（畑）		2142	イチイガシ	S	413	45	24		割材
ＳＤ79	木製品	470	1-⑦1	馬鍬（畑）		2143	イチイガシ	S	417	49	22		割材
ＳＤ79	木製品	470	1-⑧1	馬鍬（畑）		1488	イチイガシ	S	388	48	20		板目
ＳＤ79	木製品	470	1-⑨1	馬鍬（畑）		1489	コナラ属アカガシ亜属	S	279	41	23	流路	板目
ＳＤ79	木製品	470	1-⑩1	馬鍬（新）		2146	コナラ属アカガシ亜属	S	124	29	20		芯持丸木（面取り）
ＳＤ79	木製品	470		馬鍬（畑）		2145	ツブラジイ	S					みかん割り
ＳＤ79	木製品	470	2	神状木製品		1499	コナラ属コナラ節	S	435	35	30	流路	割材　角材
ＳＤ48	木製品	470	3	神状木製品		2169	モミ属	S	1786	80	45	ＳＤ79合流部	割材（板転用）
ＳＤ79	木製品	470	4	製杵		1453	ツバキ属	S	444	76	82	流路	芯持丸木
ＳＤ79	木製品	470	5	製杵		1467	ツバキ属	S	361	75	66	流路	芯持丸木
ＳＤ79	木製品	470	6	製杵		1451	イチイガシ	S	406	89	57	流路	板目　芯なし割り出し
ＳＤ79	木製品	470	7	製杵		1485	ツバキ属	S	220	60	60	流路	芯持丸木
ＳＤ79	木製品	471	8	製杵		1479	ツバキ属	S	86	75	66	流路	芯持丸木
ＳＤ48	木製品	471	9	製杵		1480	イチイガシ	S	130	77	54	ＳＤ79合流部	板目　芯なし割りなし
ＳＤ48	木製品	471	10	樹幹		1490	コナラ属アカガシ亜属	S	449	55	63	ＳＤ79合流部	芯なし丸木
ＳＤ79	木製品	471	11	鍬		1456	イチイガシ	S	379	78	28	流路	舟型変転
ＳＤ79	木製品	471	12	鍬		1454	イチイガシ	S	111	105	10	合流部	板目
ＳＤ48	木製品	471	13	曲柄平鍬		1465	イチイガシ	S	565	123	16	流路	板目
ＳＳ27	木製品	471	14	鋤		1503	モミ属	S	838	85先端75	36	流路	板目
ＳＤ79	木製品	471	15	鍬		1484	コナラ属アカガシ亜属	S	195	57	15	第4トレンチ	柾目　みかん割り　板状
ＳＤ48	木製品	471	16	板材		1471	イチイガシ	S	190	41	15	ＳＤ79合流部	柾目　みかん割り
ＳＤ48	木製品	471	17	多又鍬		1516	イチイガシ	S	854	最広部130	30	流路	板目
ＳＤ48	木製品	471	18	本摺		1493	サカキ	S	214	94	69	堰	芯持丸木
ＳＤ79	木製品	471	19	田下駄		1462	イチイガシ	S	309	63	28	流路	板目
ＳＤ79	木製品	472	20	鍬		1481	イチイガシ	S	438	60	42	流路	板目
ＳＤ79	木製品	472	21	鍬		1496	イチイガシ	S	165	110	15	第2トレンチ	板目
ＳＳ19	木製品	472	22	鍬		1460	ヒノキ	S	149	102	37	流路	板目
ＳＤ79	木製品	472	23	鍬		1477	イチイガシ	S	395	210	48	第4トレンチ	板目　みかん割り
ＳＤ48	木製品	472	24	鍬		1468	スダジイ	S	279	168	86	流路	半割　芯持丸木
ＳＤ79	木製品	472	25	盤		1486	モミ属	S	523	174	15脚部68	流路	板目
ＳＤ48	木製品	472	26	箱		1491			168	72	8	流路	追柾目
ＳＤ79	木製品	473	27	樽		1487	トチノキ	S	740	234	120	流路	横木取り　側付　板目
ＳＤ79	木製品	473	28	盤		1447	スギ	S	315	30	25	第4トレンチ	板目　横木取り
ＳＤ79	木製品	473	29	盤		1474	ヒノキ	S	463	70	18	第2トレンチ	横木取り　板目
ＳＤ48	木製品	474	30	臼		2188	ケヤキ	S	615	490	400	流路	
ＳＤ79	木製品	475	31	杵		1721			843	112	50	第4トレンチ	板目
ＳＤ79	木製品	475	32	柱材		2180	コナラ属アカガシ亜属	S	3075	135	80	流路	芯持丸木（皮付）
ＳＤ79	木製品	475	33	柱材		1482	コナラ属アカガシ亜属	S	1575	95	68	流路	芯持丸木（皮付）
ＳＤ79	木製品	475	34	柱材		1495	コナラ属コナラ節	S	386	163	70	流路	半割　伐採痕
ＳＤ48	木製品	475	35	柱材		1507	トネリコ属シオジ節	S	948	194	70	流路	板目　みかん割り　芯去
ＳＤ48	木製品	476	36	桁材		2170	コナラ属アカガシ亜属	S	3240	157	130	流路	芯持丸木　えぐり
ＳＤ48	木製品	476	37	桁材		2185	コナラ属アカガシ亜属	S	2990	120	100	流路	下部加工表面焦痕　芯持丸木
ＳＤ48	木製品	476	38	桁材		2178	サカキ	S	2915	185	170	流路	ホゾ　芯持丸木
ＳＤ48	木製品	476	39	桁材		1445			270	85	80	ＳＤ79合流部	芯持丸木　両側ホゾ　表面炭化
ＳＤ79	木製品	476	40	梁材		2173	カエデ属	S	1600	153	130	第4トレンチ	受け　面取り　芯持丸木　炭化
ＳＤ48	木製品	476	41	梁材		2174	トネリコ属シオジ節	S	1430	120	90	流路	みかん割り　芯去
ＳＤ48	木製品	476	42	柱材		1501	モミ属	S	700	247	85	流路	
ＳＤ79	木製品	477	43	構造部材		2186	コナラ属アカガシ亜属	S	1710	120	47	流路	柾目
ＳＤ48	木製品	477	44	壁板材		2184	モミ属	S	1654	145	20	流路	
ＳＤ79	木製品	477	45	板材		2172	コナラ属アカガシ亜属	S	1520	140	40	流路	
ＳＤ48	木製品	477	46	壁板材		2187	モミ属	S	1420	175	40	流路	板目
ＳＤ48	木製品	477	47	壁板材		2177	モミ属	S	1410	145	35	流路	ホゾ穴　板目
ＳＤ79	木製品	478	48	構造部材		2167	コナラ属クヌギ節	S	2070	98	22	第4トレンチ	
ＳＤ48	木製品	478	49	壁板材		1518	モミ属	S	823	175	20	流路	樹際金属　板目
ＳＤ48	木製品	478	50	壁板材		1508	モミ属	S	850	208	20	流路	追柾目
ＳＤ79	木製品	478	51	壁板材		1455	クスノキ	S	643	147	18	流路	板目
ＳＤ48	木製品	478	52	座材		1476	イチイガシ	S	638	256	40	流路	柾目　みかん割り
ＳＤ79	木製品	478	53	壁板材		1500	コナラ属アカガシ亜属	S	842	150	30	流路	柾目　みかん割り

遺構	分類	図版	図版	器種	加工製式	プレパラート	樹種	SR	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考	備考
S D48	本製品	478	54	敲棒材		1511	ムクロジ	S	630	155	23	流路	板目
S D48	本製品	479	55	床材		1510	モミ属	S	1260	241	40	流路	板目
S D48	本製品	479	56	板材		1514	スギ|ジイ	S	971	155	35	流路	柾目
S D79	本製品	479	57	構造部材		1475	オニグルミ	S	650	95	30	流路	板目
S D79	本製品	479	58	板材		1442	コナラ属アカガシ亜属	S	408	78	15	流路	板　みかん割り
S D48	本製品	479	59	板材		1512	クワ属	S	995	60	20	流路	半割　面出し
S D48	本製品	479	60	板材		1513	モミ属	S	685	50	18	流路	板　追柾目　割り材
S D79	本製品	479	61	板材		1448	モミ属	S	360	114	34	流路	板目　えぐり
S D79	本製品	479	62	壁材		1464	ヒノキ		229	117	21	流路	板目
S D79	本製品	479	63	壁材		1450	ヒノキ	S	138	110	13	流路	板目
S D79	本製品	479	64	壁材		1459	モミ属	S	208	167	30	流路	板目
S D79	本製品	479	65	板材		1449	イヂイジイ	S	1266	74	33	流路	柾目
S D48	本製品	479	66	板材		1519	クワ属	S	1232	103	15	流路	板目
S D79	本製品	480	67	建築部材		1473	コナラ属コナラ節	S	914	69	62	流路	みかん割り
S D48	本製品	480	68	建築部材		1461	オニグルミ	S	385	67	70	流路	芯持丸木　えぐり
S D48	本製品	480	69	建築部材		1444			440	85	55	S D79合流部	芯持丸木　両側ホゾ　表面炭化
S D79	本製品	480	70	垂木		1446			1145	65	55	流路	芯持丸木
S D79	本製品	480	71	垂木		1457	スギ|ジイ	S	1010	41	46	流路	芯持丸木
S D48	本製品	480	72	垂木		1463	コナラ属アカガシ亜属	S	556	36	33	S D79合流部	芯持丸木（皮付）
S D48	本製品	480	73	垂木		1472	コナラ属アカガシ亜属	S	219	55	51	流路	芯持丸木（皮付）
S D48	本製品	480	74	垂木		1452	コナラ属アカガシ亜属	S	233	47	34	流路	芯持丸木（皮付）
S D83	本製品	480	75	垂木		1496	コナラ属アカガシ亜属	S	143	42	38	流路	芯持丸木（皮付）
S D48	本製品	480	76	垂木		1458	ニワトコ	S	239	37	28	流路	芯持丸木
S D79	本製品	480	77	梯子		2166	ツブラジイ	S	1757	238	110	流路	板目
S D59	本製品	481	78	梯子		1466	ムクロジ	S	900	210	80	流路	半割
S D79	本製品	481	79	梯子		1523	サクラ属	S	1000	160	65	流路	板目
S D79	本製品	482	80	曲物底板		1443	ヒノキ	S	453	44	11	流路	板目
S D48	本製品	482	81	曲物底板		1469	モミ属	S	376	87	13	流路	板目
表土	本製品	482	82	底板		1478	ヒノキ	S	長径181	-	9	流路	板目
S D79	本製品	482	83	不明木製品		1497	ヒノキ	S	199	28	19	合流部	角材
S D48遺石	本製品	482	84	不明木製品		1494	コナラ属コナラ節	S	341	115	41	流路	柾目　自在？
S D48	本製品	482	85	不明木製品		1492	スギ	S	425	36	8	流路	板目　ホゾ穴
S D79	本製品	482	86	不明木製品		1483	スギ	S	132	28	6	流路	板目
S D79	本製品	482	87	不明木製品		1441	スギ	S	130	22	7	流路	板目
S D79	本製品	482	88	不明木製品		1470			165	20	10	流路	みかん割り　芯去
S D48	堰	426	4	支保工	堰構造材	2165	コウゾ属	S	1760	205	145	堰	
S D48	堰	426	5	支保工	堰構造材	2182	カエデ属	S	2075	110	83	堰	芯持丸木　分子部
S D48	堰	426	6	樋	幅広矢板	1522	ムクロジ	S	1478	127	60	堰	みかん割り
S D48	堰	426	7	樋	幅広矢板	1537	ムクロジ	S	1025	145	85	堰	みかん割り（皮付）
S D48	堰	426	9	樋木	堰構造材	2181	コウゾ属	S	798	90	177	堰　長野県木工所	芯持丸木　分子部
S D48	堰	426	10	枕木	三面・四面とり矢板	1567	キハダ	S	1428	82	50	堰　後列	割材
S D48	堰	426	11	杭	幅広矢板	1504	ムクロジ	S	1117	126	60	堰	みかん割り
S D48	堰	426	12	杭	幅広矢板	1709	コナラ属コナラ節	S	1172	90	45	堰	みかん割り
S D48	堰	426	13	杭	幅広矢板	1672	キハダ	S	600	123	47	堰	みかん割り（柱転用）
S D48	堰	427	21	矢板	幅広矢板	1549	ムクロジ	S	706	102	68	堰　後列	えぐり　割材
S D48	堰	427	22	矢板	幅狭矢板	1547	ムクロジ	S	500	67	80	堰　後列	割材
S D48	堰	427	23	矢板	幅広矢板	1574	ムクロジ	S	823	128	65	堰　後列	みかん割り
S D48	堰	427	24	矢板	幅狭矢板	1569	ムクロジ	S	930	60	49	堰　後列	みかん割り
S D48	堰	427	25	矢板	幅狭矢板	1572	ムクロジ	S	905	70	65	堰　後列	みかん割り
S D48	堰	427	26	矢板	幅広矢板	1582	ムクロジ	S	696	105	40	堰　後列	みかん割り　芯去（板転用）
S D48	堰	427	27	矢板	幅広矢板	1573	ムクロジ	S	940	110	70	堰　後列	みかん割り（柱転用）
S D48	堰	427	28	矢板	幅狭矢板	1571	ヤドリノキ	S	830	79	56	堰　後列	芯持丸木
S D48	堰	427	29	矢板	幅広矢板	1556	キハダ	S	962	103	55	堰　後列	みかん割り（柱転用）
S D48	堰	427	30	矢板	幅広矢板	1560	ムクロジ	S	1060	135	62	堰　後列	みかん割り
S D48	堰	427	31	矢板	幅広矢板	1570	ムクロジ	S	1067	106	50	堰　後列	みかん割り
S D48	堰	427	32	矢板	幅広矢板	1566	ムクロジ	S	1180	156	50	堰　後列	板　柾目　芯去
S D48	堰	427	33	矢板	幅広矢板	1581	ムクロジ	S	845	119	60	堰　後列	みかん割り
S D48	堰	427	34	矢板	三面・四面とり矢板	1557	ムクロジ	S	1065	73	36	堰　後列	割材
S D48	堰	427	35	矢板	幅狭矢板	1580	コナラ属クヌギ節	S	1166	80	62	堰　後列	みかん割り（柱転用）
S D48	堰	427	36	矢板	三面・四面とり矢板	1576	ムクロジ	S	1016	64	46	堰　後列	みかん割り
S D48	堰	427	37	矢板	幅狭矢板	1588	ムクロジ	S	1068	90	54	堰　後列	みかん割り　芯去
S D48	堰	427	38	矢板	幅広矢板	1577	ムクロジ	S	1013	135	58	堰　後列	みかん割り
S D48	堰	427	39	矢板	幅広矢板	1524	ムクロジ	S	1077	150	60	堰　後列	みかん割り
S D48	堰	427	40	矢板	三面・四面とり矢板	1528	ムクロジ	S	1017	118	52	堰　後列	割材
S D48	堰	427	41	矢板	幅広矢板	1583	ムクロジ	S	1010	94	65	堰　後列	みかん割り　芯去（柱転用）

遺構	分類	図版	№図	器種	加工型式	プレパラート	樹種	SR	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	横考	備考
SD48	堆	427	42	矢板	三面・四面とり矢板	1525	コナラ属アカガシ亜属	S	1180	59	42	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	427	43	矢板	幅広矢板	1579	ムクロジ	S	663	75	55	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	427	44	矢板	三面・四面とり矢板	1527	コナラ属コナラ節	S	500	86	32	堆 検判	柾目 みかん割り 表面炭化
SD48	堆	427	45	矢板	幅狭矢板	1515	コナラ属クヌギ節	S	1174	75	70	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	427	46	矢板	幅広矢板	1591	ムクロジ	S	1220	126	48	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	427	47	矢板	幅狭矢板	1590	ムクロジ	S	912	70	50	堆 検判	みかん割り 角材 芯去
SD48	堆	427	48	矢板	幅狭矢板	1521	コナラ属クヌギ節	S	835	75	62	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	427	49	矢板	三面・四面とり矢板	1569	コナラ属クヌギ節	S	1130	80	35	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	427	50	矢板	三面・四面とり矢板	1578	コナラ属クヌギ節	S	765	56	46	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	427	51	矢板	幅広矢板	1526	ムクロジ	S	1036	138	38	堆 検判	板・柾目
SD48	堆	427	52	矢板	幅狭矢板	1558	コナラ属クヌギ節	S	1496	78	47	堆 検判	みかん割り 芯去
SD48	堆	428	53	矢板	幅狭矢板	1535	コナラ属クヌギ節	S	1300	65	50	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	428	54	矢板	幅狭矢板	1562	ムクロジ	S	706	75	35	堆 検判	板目 みかん割り (皮付)
SD48	堆	428	55	矢板	三面・四面とり矢板	1539	ハンノキ属ハンノキ節	S	1452	55	36	堆 検判	みかん割り 芯去 角材
SD48	堆	428	56	矢板	幅狭矢板	1564	ハンノキ属ハンノキ節	S	1650	64	55	堆 検判	割材
SD48	堆	428	57	矢板	幅狭矢板	1575	コナラ属アカガシ亜属	S	690	70	53	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	428	58	矢板	幅狭矢板	1586	コナラ属アカガシ亜属	S	572	60	42	堆 検判	割材
SD48	堆	428	59	矢板	三面・四面とり矢板	1565	ハンノキ属ハンノキ節	S	1295	75	46	堆 検判	割材
SD48	堆	428	60	矢板	幅狭矢板	1561	コナラ属クヌギ節	S	1290	78	42	堆 検判	みかん割り 芯去 角材
SD48	堆	428	61	矢板	幅狭矢板	1531	ハンノキ属ハンノキ節	S	1036	70	50	堆 検判	割材 (皮付)
SD48	堆	428	62	矢板	幅狭矢板	1566	コナラ属クヌギ節	S	1186	86	65	堆 検判	割材
SD48	堆	428	63	矢板	三面・四面とり矢板	1540	ハンノキ属ハンノキ節	S	1300	85	50	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	428	64	矢板	三面・四面とり矢板	1534	コナラ属アカガシ亜属	S	1334	60	55	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	428	65	矢板	三面・四面とり矢板	1589	コナラ属アカガシ亜属	S	1280	61	25	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	428	66	矢板	幅狭矢板	1563	ムクロジ	S	1195	75	75	堆 検判	みかん割り (往転用) 割材
SD48	堆	428	67	矢板	幅狭矢板	1587	ムクロジ	S	1013	70	65	堆 検判	みかん割り 芯去 角材
SD48	堆	428	68	矢板	幅広矢板	1584	コナラ属クヌギ節	S	940	105	40	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	428	69	杭	丸本材	1536	コナラ属アカガシ亜属	S	1284	50	48	堆 検判	芯持丸木 (皮付)
SD48	堆	428	70	杭	三面・四面とり矢板	1541	コナラ属アカガシ亜属	S	1215	67	33	堆	みかん割り
SD48	堆	428	71	杭	丸本材	1600	コナラ属アカガシ亜属	S	942	55	42	堆 検判	芯持丸木 (皮付)
SD48	堆	428	72	杭	丸本材	1545	コナラ属アカガシ亜属	S	1207	55	42	堆 検判	芯持丸木 (皮付)
SD48	堆	428	73	杭	三面・四面とり矢板	1699	コナラ属クヌギ節	S	1200	70	40	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	428	74	杭	幅狭矢板	1548	コナラ属クヌギ節	S	1037	75	74	堆 検判	割材
SD48	堆	428	75	杭	三面・四面とり矢板	1585	カエデ属	S	655	84	43	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	428	76	杭	三面・四面とり矢板	1546	コナラ属クヌギ節	S	605	56	27	堆 検判	割材
SD48	堆	428	77	杭	丸本材	1700	コナラ属アカガシ亜属	S	1051	37	38	堆 検判	芯持丸木 (皮付)
SD48	堆	428	78	杭	幅狭矢板	1712	コナラ属クヌギ節	S	1100	69	35	堆 検判	割材
SD48	堆	428	81	杭	丸本材	1706	コナラ属アカガシ亜属	S	794	50	50	堆 検判	芯持丸木 (皮付)
SD48	堆	428	82	杭	幅狭矢板	1693	コナラ属クヌギ節	S	850	70	55	堆 検判	矢板 みかん割り
SD48	堆	428	83	杭	丸本材	1686	コナラ属アカガシ亜属	S	685	40	40	堆 検判	芯持丸木
SD48	堆	428	84	杭	幅狭矢板	1677	コナラ属クヌギ節	S	908	81	90	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	428	85	杭	丸本材	1713	コナラ属アカガシ亜属	S	806	45	34	堆 検判	芯持丸木 (皮付)
SD48	堆	428	86	杭	丸本材	1708	コナラ属アカガシ亜属	S	529	50	45	堆 検判	芯持丸木 (皮付)
SD48	堆	428	87	杭	丸本材	1715	コナラ属アカガシ亜属	S	735	45	43	堆 検判	芯持丸木 (皮付)
SD48	堆	428	88	杭	丸本材	1678	コナラ属アカガシ亜属	S	460	45	45	堆 検判	芯持丸木 (皮付)
SD48	堆	428	89	杭	幅狭矢板	1686	コナラ属クヌギ節	S	465	80	65	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	428	91	杭	丸本材	1687	コナラ属アカガシ亜属	S	402	50	50	堆 検判	芯持丸木
SD48	堆	428	92	杭	丸本材	1686	コナラ属アカガシ亜属	S	760	45	50	堆 検判	芯持丸木
SD48	堆	428	93	杭	三面・四面とり矢板	1695	コナラ属アカガシ亜属	S	421	75	35	堆 検判	みかん割り
SD48	堆	428	94	杭	丸本材	1710	コナラ属アカガシ亜属	S	546	53	43	堆 検判	芯持丸木 (皮付)
SD48	堆	428	99	杭	丸本材	1696	コナラ属アカガシ亜属	S	275	54	40	堆 検判	芯持丸木 (皮付) 枝はつり
SD48	堆	428	102	杭	丸本材	1552	コナラ属アカガシ亜属	S	358	50	45	堆 検判	芯持丸木 (皮付)
SD48	堆	428	103	杭	丸本材	1682	コナラ属アカガシ亜属	S	421	54	43	堆 検判	芯持丸木 (皮付)
SD48	堆	430	110	自然木		2171	クワ属	S	564	252	205	堆	芯持丸木 (皮付)
SD48	堆	430	111	支柱工		2183	キハダ	S	3618	195	190	堆 1/2	芯持丸木 (皮付) 加工なし
SD48	堆	430	112	樋	幅広矢板	1530	オニグルミ	S	833	129	65	堆	みかん割り
SD48	堆	430	115	梯木		2179	エノキ属	S	2024	130	110	堆 3/3	芯持丸木 叉木 受け柱
SD48	堆	430	116	杭	三面・四面とり矢板	1705	トネリコ属シオジ節	S	847	72	25	堆 続き	みかん割り 芯去
SD48	堆	430	117	堰構造材		1704	クワ属	S	480	133	86	堆	芯持丸木 大きい
SD48	堆	430	118	堰構造材		2168	クワ属	S	1320	110	95	堆	芯持丸木
SD48	堆	430	119	堰構造材		2164	トチノキ	S	959	300	220	堆	芯持丸木(皮付)
SD48	堆	430	127	梯木		1656	オニグルミ	S	1240	90	80	堆	芯持丸木
SD48	堆	430	129	梯木		1658	クワ属	S	2840	60	90	堆	№658続き 芯持丸木
SD48	堆	430	129	梯木		1670	クワ属	S	2845	62	75	堆	№658続き 芯持丸木
SD48	堆	430	130	支柱工	幅広矢板	1617	コナラ属コナラ節	S	1559	98	45	堆	№298続き みかん割り

遺構	分類	図版	挿図	器種	加工型式	プレパラート	樹種	SR	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	出土	備考
S D48	堰	431	133	矢板	幅狭矢板	1652	オニグルミ	S	193	60	48	堰	みかん割り
S D48	堰	431	136	矢板	幅狭矢板	1637	コナラ属コナラ節	S	568	68	47	堰	みかん割り　芯去
S D48	堰	431	137	矢板	幅狭矢板	1646	オニグルミ	S	254	53	30	堰	杭目
S D48	堰	431	138	矢板	三面・四面とり矢板	1631	コナラ属コナラ節	S	416	86	40	堰	みかん割り
S D48	堰	431	139	矢板	三面・四面とり矢板	1643	オニグルミ	S	378	90	30	堰	矢板　杭目　みかん割り
S D48	堰	431	141	矢板	二面・四面とり矢板	1633	コナラ属コナラ節	S	420	74	40	堰	矢板　みかん割り
S D48	堰	431	143	矢板	幅狭矢板	1614	コナラ属コナラ節	S	445	60	45	堰	みかん割り
S D48	堰	431	144	矢板	幅狭矢板	1615	コナラ属コナラ節	S	473	48	32	堰	割材
S D48	堰	431	145	矢板	幅狭矢板	1685	コナラ属コナラ節	S	1026	75	55	堰	割材
S D48	堰	431	145	矢板	三面・四面とり矢板	―			350	80	40	堰	みかん割り
S D48	堰	431	146	矢板	幅狭矢板	1634	キハダ	S	720	70	32	堰	みかん割り材
S D48	堰	431	147	矢板	幅狭矢板	1647	コナラ属クヌギ節	S	547	67	36	堰	みかん割り　芯去
S D48	堰	431	148	矢板	幅広矢板	1638	キハダ	S	590	105	40	堰	矢板　割材
S D48	堰	431	150	矢板	幅狭矢板	1635	コナラ属コナラ節	S	656	65	40	堰	矢板　割材（皮付）
S D48	堰	431	151	矢板	三面・四面とり矢板	1654	コナラ属クヌギ節	S	560	65	20	堰	みかん割り
S D48	堰	431	152	矢板	幅狭矢板	1666	ムクロジ	S	465	55	30	堰	みかん割り　芯去　角材
S D48	堰	431	153	矢板	幅狭矢板	1661	キハダ	S	625	62	55	堰	みかん割り（柱転用）
S D48	堰	432	154	矢板	三面・四面とり矢板	1707	オニグルミ	S	940	75	35	堰	みかん割り
S D48	堰	432	155	矢板	幅狭矢板	1681	コナラ属コナラ節	S	629	83	62	堰	割材
S D48	堰	432	156	矢板	二面・四面とり矢板	1702	キハダ	S	1086	74	45	堰	みかん割り（柱転用）
S D48	堰	432	157	矢板	幅広矢板	1711	コナラ属コナラ節	S	1320	110	57	堰	みかん割り
S D48	堰	432	158	矢板	幅広矢板	1755	コナラ属クヌギ節	S	1992	108	70	堰	みかん割り
S D48	堰	432	159	矢板	二面・四面とり矢板	1587	コナラ属クヌギ節	S	975	78	47	堰	みかん割り
S D48	堰	432	160	矢板	幅狭矢板	1599	コナラ属コナラ節	S	946	70	35	堰	みかん割り
S D48	堰	432	161	矢板		1869	コナラ属アカガシ亜属	S	1370	80	50		芯持丸木　柱はつり
S D48	堰	432	162	矢板		1600	キハダ	S	1145	142	48	堰	みかん割り
S D48	堰	432	163	矢板		1553	コナラ属コナラ節	S	1143	80	55	堰	みかん割り
S D48	堰	432	164	矢板		1673	コナラ属コナラ節	S	1982	72	70	堰	みかん割り
S D48	堰	432	165	矢板		1701	コナラ属コナラ節	S	1299	56	56	堰	みかん割り　芯持丸木
S D48	堰	432	166	矢板		1555	コナラ属コナラ節	S	1581	65	40	堰	みかん割り
S D48	堰	432	167	矢板	幅広矢板	1679	コナラ属コナラ節	S	2114	155	55	堰	板目　みかん割り（皮付）
S D48	堰	432	168	矢板		1689	コナラ属コナラ節	S	1287	71	40	堰	半割
S D48	堰	432	169	矢板		1694	コナラ属コナラ節	S	1865	65	32	堰	みかん割り
S D48	堰	432	170	矢板		1550	キハダ	S	1154	128	35	堰	矢板　みかん割り
S D79	堰	432	171	矢板		1676	コナラ属コナラ節	S	1035	60	43	堰	みかん割り
S D48	堰	432	172	矢板		1594	コナラ属コナラ節	S	1226	105	85	堰	みかん割り
S D48	堰	432	173	矢板		1697	キハダ	S	665	116	32	堰	みかん割り
S D48	堰	432	174	矢板		1596	コナラ属コナラ節	S	1005	55	43	堰	みかん割り材
S D48	堰	432	175	矢板		1595	キハダ	S	670	75	57	堰	みかん割り材　芯去
S D48	堰	432	176	矢板		1682	キハダ	S	935	133	33	堰	みかん割り
S D48	堰	432	177	矢板	矢板	1551	キハダ	S	1090	105	60	堰	割材
S D48	堰	432	178	矢板		1716	コナラ属コナラ節	S	805	85	60	堰	みかん割り（皮付）　芯去
S D48	堰	432	179	矢板		1674	キハダ	S	540	66	48	堰	芯持割材
S D48	堰	432	180	矢板		1554	コナラ属コナラ節	S	970	50	35	堰	割材
S D48	堰	432	181	矢板		1684	ムクロジ	S	410	70	42	堰	割材
S D48	堰	432	182	矢板		1680	コナラ属クヌギ節	S	965	84	50	堰	みかん割り　角材
S D48	堰	432	183	矢板		1598	コナラ属コナラ節	S	880	70	50	堰	みかん割り
S D48	堰	432	184	矢板		1718	コナラ属コナラ節	S	800	70	50	堰	芯持丸木（皮付）
S D48	堰	432	185	矢板		1714	キハダ	S	765	80	50	堰	みかん割り
S D48	堰	432	186	矢板		1671	コナラ属クヌギ節	S	905	85	35	堰	割材
S D48	堰	432	187	矢板		1717	クワ属	S	444	95	40	堰	半割（表面炭化）
S D48	堰	432	188	矢板		1683	コナラ属クヌギ節	S	486	70	40	堰	みかん割り
S D48	堰	432	280	樽木		2113	コナラ属コナラ節	S	1480	75	56	堰	芯持丸木
S D48	堰	433	193	支保工		1653	オニグルミ	S	1934	128	85	堰	芯持丸木
S D48	堰	433	194	梁		1703	ムクロジ	S	1310	85	65	堰	桃きあり　みかん割り　芯去
S D48	堰	433	195	矢板	柵	1595	オニグルミ	SR	577	90	45	堰	芯持丸木　半割　叉木
S D48	堰	433	200	矢板	三面・四面とり矢板	1663	キハダ	S	675	82	47	堰	みかん割り
S D48	堰	433	201	矢板	丸木材	1509	イヌザキ	S	1020	55	50	堰	芯持丸木（皮付）
S D48	堰	433	202	矢板		1644	コナラ属コナラ節	S	923	50	35	堰	みかん割り
S D48	堰	433	208	矢板	三面・四面とり矢板	1650	コナラ属コナラ節	S	2175	100	35	堰	みかん割り
S D48	堰	433	209	矢板	幅広矢板	1605	オニグルミ	S	976	104	55	堰	みかん材
S D48	堰	433	210	矢板	幅狭矢板	1632	ムクロジ	S	490	65	35	堰	矢板　みかん割り　芯去
S D48	堰	433	211	矢板		1641	オニグルミ	S	858	55	40	堰	芯持丸木
S D48	堰	433	212	矢板		1662	オニグルミ	S	950	45	25	堰	芯持丸木
S D48	堰	433	213	矢板	三面・四面とり矢板	1664	ムクロジ	S	460	58	35	堰	みかん割り

遺構	分類	図版	挿図	器種	加工型式	プレパラート	樹種	SR	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考	備考
SD48	堰	433	214	矢板	鋸状矢板	1645	ムクロジ	S	624	72	72	堰	みかん割り
SD48	堰	433	215	矢板	鋸状矢板	1655	ムクロジ	S	735	95	55	堰	みかん割り
SD48	堰	433	216	矢板	鋸状矢板	1642	オニグルミ	S	908	86	45	堰	芯持丸木　芯あり
SD48	堰	433	235	矢板		1668	オニグルミ	S	190	80	40	堰	芯木　芯持丸木
SD48	堰	434	217	矢板	鋸広矢板	1667	キハダ	S	702	97	30	堰	みかん割り
SD48	堰	434	218	矢板	鋸広矢板	1660	ムクロジ	S	1172	104	33	堰	みかん割り　芯去
SD48	堰	434	219	矢板	鋸広矢板	1651	ムクロジ	S	1154	105	45	堰	みかん割り
SD48	堰	434	220	矢板	鋸状矢板	1657	トネリコ属シオジ節	S	975	95	65	堰	みかん割り（皮付）　芯去
SD48	堰	434	221	矢板	鋸状矢板	1669	トネリコ属シオジ節	S	1100	70	55	堰	みかん割り　芯去
SD48	堰	434	222	矢板	鋸状矢板	1659	トネリコ属	S	930	60	55	堰	みかん割り　芯去　角材
SD48	堰	434	223	矢板	鋸状矢板	1640	ムクロジ	S	1105	95	75	堰	みかん割り（柱転用）
SD48	堰	434	224	矢板	鋸広矢板	1649	トネリコ属シオジ節	S	1160	90	57	堰	みかん割り　芯去
SD48	堰	434	225	矢板	鋸広矢板	1613	トネリコ属シオジ節	S	1308	92	45	堰	みかん割り　芯去
SD48	堰	434	226	杭	丸木材	1602	オニグルミ	S	1195	45	35	堰	芯持丸木（皮付）
SD48	堰	434	227	杭	丸木材	1603	オニグルミ	S	840	55	30	堰	芯持丸木（皮付）　枝はつり
SD48	堰	434	228	杭	丸木材	1622	オニグルミ	S	810	40	25	堰	芯持丸木（皮付）
SD48	堰	434	229	杭	丸木材	1604	オニグルミ	S	802	52	50	堰	芯持丸木（皮付）
SD48	堰	434	230	杭	丸木材	1639	オニグルミ	S	907	45	35	堰	芯持丸木（皮付）表面炭化
SD48	堰	434	231	杭	丸木材	1601	オニグルミ	S	670	65	45	堰	丸木材　芯持丸木（皮付）
SD48	堰	434	232	杭	丸木材	1607	コナラ属クヌギ節	S	990	45	50	堰	みかん割り
SD48	堰	434	233	杭	丸木材	1612	オニグルミ	S	565	46	25	堰	芯持丸木（皮付）
SD48	堰	434	234	杭	丸木材	1606	オニグルミ	S	455	27	24	堰	芯持丸木（皮付）　枝はつり
SD48	堰	435	236	杭		1502	クワ属	S	1138	160	118	堰	芯持丸木
SD48	堰	435	237	杭	丸木材	1611	コナラ属アカガシ亜属	S	740	65	45	堰	芯持丸木（皮付）
SD48	堰	435	238	杭	丸木材	1619	コナラ属アカガシ亜属	S	1186	60	50	堰	芯持丸木（皮付）ホゾ
SD48	堰	435	239	杭	丸木材	－			－	－	－	堰	
SD48	堰	435	240	杭		1623			520	115	94	堰	芯持丸木（皮付）大型
SD48	堰	435	241	杭	鋸状矢板	1626	トネリコ属シオジ節	S	288	55	35	堰	みかん割り材
SD48	堰	435	242	杭	丸木材	1627	ニワトコ	S	716	18	14	堰	芯持丸木（皮付）
SD48	堰	435	243	杭	丸木材	1610	ヤナギ属	S	454	66	65	堰	芯持丸木（皮付）
SD48	堰	435	244	杭	丸木材	1621	クワ属	S	600	87	70	堰	芯持丸木
SD48	堰	435	245	杭	丸木材	1629	クワ属	S	980	80	70	堰	芯持丸木
SD48	堰	435	246	杭	丸木材	1628	ヤナギ属	S	417	33	30	堰	芯持丸木（皮付）
SD48	堰	435	247	杭		－			700	247	85	流路	床材（転用）
SD48	堰	435	248	杭	丸木材	1616	クワ属	S	613	66	63	堰	芯持丸木
SD48	堰	435	249	杭	丸木材	1608			352	30	27	堰	芯持丸木（皮付）
SD48	堰	435	250	杭		1520	クワ属	S	1118	116	95	堰	芯持丸木
SD48	堰	435	251	杭	丸木材	1630	クワ属	S	520	70	52	堰	芯持丸木
SD48	堰	435	259	杭		2095	ヤナギ属	S	305	27	24	堰	芯持丸木（皮付）
SD48	堰	435	260	杭		2102	ヤナギ属	S	330	20	20	堰	芯持丸木（皮付）
SD48	堰	435	261	杭		2105	コナラ属コナラ節	S	390	50	30	堰	みかん割り
SD48	堰	435	262	杭		2111	トネリコ属シオジ節	S	276	70	43	堰	みかん割り　芯去
SD48	堰	435	263	杭		2110	トネリコ属	S	238	53	45	堰	みかん割り　芯去　角材
SD48	堰	435	264	杭		1648	クワ属	S	345	57	50	堰	芯持丸木
SD48	堰	435	265	杭		2009	オニグルミ	S	386	55	27	堰	芯持丸木
SD48	堰	436	266	杭	鋸状矢板	1625	カエデ属	S	770	37	40	堰	板面　みかん割り　芯去
SD48	堰	436	267	杭	丸木材	1618	カエデ属	S	635	54	38	堰	芯持丸木
SD48	堰	436	268	杭	丸木材	1609	ニワトコ	S	475	45	29	堰	芯持丸木（皮付）
SD48	堰	436	269	杭	鋸広矢板	1529	ムクロジ	S	686	117	45	堰	板目　みかん割り（皮付）
SD48	堰	436	270	杭	三面・四面とり矢板	1538	コナラ属クヌギ節	S	875	93	35	堰	みかん割り
SD48	堰	436	271	杭	三面・四面とり矢板	1543	ムクロジ	S	930	70	50	堰	みかん割り
SD48	堰	436	272	杭	三面・四面とり矢板	1542	ムクロジ	S	463	92	42	堰	みかん割り　割材
SD48	堰	436	273	杭	鋸状矢板	1532	コナラ属コナラ節	S	768	70	50	堰	みかん割り
SD48	堰	436	274	杭	鋸状矢板	1533	トネリコ属シオジ節	S	535	64	45	堰	みかん割り　割材
SD48	堰	436	275	杭	鋸状矢板	1624	カエデ属	S	570	68	50	堰	割材
SD48	堰	436	276	杭	丸木材	1544	クワ属	S	924	44	44	堰	芯持丸木
SD48	堰	436	277	杭		1691	コナラ属アカガシ亜属	S	170	36	36	堰　破列	芯持丸木（皮付）
SD48	堰	436	278	杭	丸木材	1636	ムクロジ	S	576	43	35	堰	芯持丸木（皮付）
SD48	堰	436	279	杭	丸木材	1620	カエデ属	S	348	55	45	堰	続きあり　芯持丸木（皮付）
SD48				杭		1567						堰	№278続き　割材
SD48				杭		1567						堰	割材
SD48				杭	丸木材	1592	ムクロジ	S	966	92	74	堰	みかん割り　割材
SD48				杭		1617						堰	みかん割り
SD48				杭		1629	クワ属	S	967	80	65	堰	№6続き②　芯持丸木
SD48				杭		1655	オニグルミ	S				堰	№135続き　芯持丸木（皮付）

遺構	分類	図版	神図	器種	加工型式	プレパレート	樹種	SR	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考	備考
SD48				杭		1727	ムクロジ	S	898	100	70	堰	みかん割り
SD48				杭		1757	コナラ属コナラ節	S				堰	みかん割り　割材
SD48				へら状木製品		1758	ムクロジ	S				堰	割材
SD48				不明		1761	ニワトコ	S				堰	芯持丸木（皮付）　小枝
SD48				不明		1762	カエデ属	S				堰	柾目
SD48				自然木		1763	ニワトコ	S				堰	芯持丸木　枝はつり？
SD48				杭		1764	カエデ属	S				堰	みかん割り
SD48				自然木		1765	アサダ	S				堰	芯持丸木（皮付）
SD48				杭		1766	ムクロジ	S				堰	みかん割り　芯去
SD48				不明		1767	カエデ属	S				堰	芯持　割材
SD48				自然木		1768						堰	芯持丸木
SD48				杭		1769	ニワトコ	S				堰	芯持丸木
SD48				木簡		1771	イヌガヤ	S				堰	みかん割り　表面全体剥がれ　割材
SD48				杭		1772	クワ属	S				堰	芯持丸木（皮付）
SD48				堰構造材		1773	ツバキ属	S				堰	伐採材　芯持丸木（皮付）
SD48				樹皮		1774	アサダ	KP				堰	樹皮
SD48				杭		1775	コナラ属クヌギ節	S				堰	みかん割り
SD48				杭		1777	コナラ属アカガシ亜属	S				堰	芯持丸木（皮付）
SD48				杭		1779	コナラ属コナラ節	S				堰	みかん割り
SD48				自然木		1780	クワ属	S				堰	芯持丸木
SD48				杭		1781	ムクロジ	S				堰	みかん割り　割材
SD48				棒状木製品		1782	クワ属	S				堰	芯持丸木
SD48				堰構造材		1783	モミ属	S				堰	芯持丸木
SD48				自然木		1784	オニグルミ	S				堰	芯持丸木（皮付）
SD48				自然木		1786	オニグルミ	S				堰	割れ
SD48				杭		1787	クリ	S				堰	みかん割り
SD48				杭		1788	クリ	S				堰	みかん割り（皮付）
SD48				自然木		1789	キハダ	S				堰	
SD48				自然木		1791	カエデ属	S				堰	
SD48				杭		1792	コナラ属アカガシ亜属	S				堰	芯持丸木
SD48				杭		1793	キハダ	S				堰	みかん割り
SD48				自然木		1794						堰	芯持丸木　割れ
SD48				杭		1795	コナラ属コナラ節	S				堰	板目
SD48				棒状木製品		1796	オニグルミ	R				堰	芯持丸木
SD48				杭		1797	サカキ	S				堰	みかん割り　割材　角材
SD48				杭		1798	ムクロジ	S				堰	みかん割り　割材
SD48				自然木		1799	クワ属	S				堰	芯持丸木
SD48				杭		1800	ニワトコ	S				堰	板目
SD48				杭		1801	コナラ属クヌギ節	S				堰	みかん割り　芯去
SD48				自然木		1802	クワ属	S				堰	芯持丸木
SD48				不明		1803	コナラ属コナラ節	S				堰	板目
SD48				杭		1804	オニグルミ	S				堰	芯持丸木（皮付）
SD48				加工材		1805	オニグルミ	S				堰	芯持丸木
SD48				割材		1807	オニグルミ	S				堰	板目
SD48				割材		1808	コナラ属コナラ節	S				堰	割材
SD48				杭		1810	トネリコ属	S				堰	みかん割り　割材
SD48				自然木		1811	キハダ	SR				堰	割れ
SD48				杭		1812	コナラ属コナラ節	S				堰	みかん割り
SD48				杭		1813	ムクロジ	S				堰	みかん割り
SD48				杭		1814	コナラ属コナラ節	S				堰	みかん割り
SD48				不明		1815	コナラ属コナラ節	S				堰	割材
SD48				杭		1816	コナラ属クヌギ節	S				堰	割材　みかん割り
SD48				杭		1820	オニグルミ	S				堰	芯持丸木
SD48				杭		1821	コナラ属コナラ節	S				堰	みかん割り
SD48				割材		1822	ムクロジ	S				堰	割材
SD48				杭		1823	クワ属	S				堰	芯持丸木　みかん割り
SD48				杭		1826	コナラ属コナラ節	S				堰	みかん割り　割材
SD48				割材		1827	キハダ	S				堰	みかん割り
SD48				自然木		1881	オニグルミ	S				堰	割れ
SD48				板材		1883	カエデ属	S				堰	柾目
SD48				板材		1885	キハダ	S				堰	柾目
SD48				杭		1886	コナラ属コナラ節	S				堰	割材
SD48				板材		1888	キハダ	S				堰	柾目
SD48				杭		1890	オニグルミ	S				堰	柾目　みかん割り
SD48				板材		1891	キハダ	S				堰	柾目

遺構	分類	図版	掲図	器種	加工型式	プレパラート	樹種	SR	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考	備考
S D48				杭		1895	コナラ属クヌギ節	S				堰	みかん割り
S D48				板材		1898	カエデ属	S				堰	※204続き 柾目
S D48				杭 矢板		1909	ムクロジ	S				堰	柾目 みかん割り
S D48				堰構造材		1910						堰	板目 伐採痕
S D48				不明		1911	オニグルミ	S				堰	みかん割り
S D48				杭		1912	ムクロジ	S				堰	みかん割り 芯去
S D48				杭		1913	ムクロジ	S				堰	みかん割り
S D48				杭		1914	コナラ属コナラ節	S				堰	みかん割り
S D48				杭		1915	カエデ属	S				堰	芯持丸木
S D48				堰構造材		1918	クワ属	S				堰	続きあり 芯持丸木
S D48				杭		1920	ムクロジ	S				堰	みかん割り
S D48						1925						堰	割材
S D48				杭		1984	コナラ属コナラ節	S				堰	みかん割り
S D48				杭		2040	ムクロジ	S	730	130	70	堰	みかん割り
S D48				杭		2043	ムクロジ	S	390	80	40	堰	割材
S D48				白然木		2045			400	110		堰	芯持丸木（皮付）
S D48				杭 矢板		2046	キハダ	S	140	40		堰	みかん割り
S D48				杭		2047	コナラ属アカガシ亜属	S	670	90		堰	芯持丸木
S D48				杭		2048	カエデ属	S	1400	90		堰	みかん割り 芯去
S D48				杭		2054	エノキ属	S	1260	90		堰	芯持丸木
S D48				矢板		2056	カエデ属	S				堰	
S D48				加工木		2058	エノキ属	S	360	30	30	堰	芯持丸木
S D48				杭		2059	コウゾ属	S	60	80	50	堰	みかん割り
S D48				不明		2061	コウゾ属	S	280	60		堰	板目 半割
S D48				白然木		2072	カエデ属	S				堰	芯持丸木
S D48						2073	ムクロジ	S	630以上	40	30	堰	割材
S D48				白然木		2078	オニグルミ	S	630	80	80	堰	芯持丸木（皮付）
S D48				板材		2079	モミ属	S	730	60	20	堰	追柾目
S D48				丸木		2081	クワ属	S	130	70	50	堰	芯持丸木（皮付） 加工痕
S D48				板		2082	コナラ属コナラ節	S	460	70	60	堰	割材
S D48				杭		2085	コナラ属クヌギ節	S	450	100	50	堰	みかん割り
S D48				加工木？		2090	ケヤキ属	S				堰	芯持丸木（皮付）
S D48				杭		2107	コナラ属クヌギ節	S	1340	85	46	堰	みかん割り
S D48				杭		2108	ムクロジ	S	1157	80	30	堰	みかん割り 芯去
S D48				堰構造材		2118	クワ属	S	930	80	70	堰	芯持丸木
S D48				板		2147	イヌガヤ	S				堰	芯持丸木
S D48				柱材		2152	ムクノキ	S				堰	半割 叉木（くさびブ）
S D48				柱材		2163	ムクノキ	S	3200	295	140	堰	半割
S D48				そだサンプル		2189						堰	芯持丸木（皮付）
S D48				そだサンプル		2190	オニグルミ	S				堰	芯持丸木（皮付）
S D48				そだサンプル		2191	オニグルミ	S				堰	芯持丸木（皮付）
S D48				サンプル		2192						堰	しがらみ敷物状
S D48				サンプル		2193						堰	しがらみ敷物状
S D48				サンプル		2194						堰	しがらみ敷物状
S D48				白然木		2196	ケヤキ属					堰	芯持ち丸木
S D48				白然木		2197	オニグルミ					堰	芯持ち丸木
S D48				河川堆積物		—						堰	白然堆積物 木くず砂等
S D48				種子		—						堰	鬼ぐるみの核 赤堀のかじり痕
S D48				種子		—						堰	鬼ぐるみ核
S D48				種子		—						堰	鬼ぐるみ核 桃核
S D48				種子		—						堰	アカカシアブラ・かし・どんぐり木・とちの木 果実・鬼ぐるみ核
S D48				種子		—						堰	鬼ぐるみ核 桃核・とち果実核
S D48				白然木		2195	モミ属					堰①	（御神木）芯持ち丸木
S D48				堰構造材		1899	トチノキ	S				堰 1/2	芯持丸木
S D48				堰構造材		1517	クワ属	S	670	130	145	堰 1/3	芯持丸木
S D48				堰構造材		1745	クワ属	S	1023	100		堰 2/3	芯持丸木
S D48				板材		2053	コナラ属アカガシ亜属	S	120	80	10	堰 下層	板目
S D48				割材		2060	エノキ属	R	120	80	60	堰 下層	割材
S D48				河川堆積物		—						堰 下層	木 葉
S D48				河川堆積物		—						堰 下層	木 葉 種実
S D48				河川堆積物		—						堰 下層	木 葉 種実
S D48				河川堆積物		—						堰 下層	木 葉 種実
S D48				河川堆積物		—						堰 下層	木 葉 種実
S D48				板材		1875	コナラ属クヌギ節	S				堰 後列	柾目

遺構	分類	図版	柳図	器種	加工型式	プレパレート	樹種	SR	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考	備考
SD48				杭		1876	コナラ属アカガシ亜属	S				堀 後列	芯持丸木
SD48				杭		1877	コナラ属アカガシ亜属	S				堀 後列	割材（皮付）
SD48				杭		1878	ヤハダ	S				堀 後列	芯持丸木
SD48				棒状木製品		1879	コナラ属アカガシ亜属	S				堀 後列	芯持丸木（皮付）
SD48				杭		1884	ムクロジ	S				堀 後列	縦目
SD48				杭		1889	コナラ属アカガシ亜属	S				堀 後列	芯持丸木
SD48				杭		1892	コナラ属アカガシ亜属	S				堀 後列	芯持丸木
SD48				杭		1893	コナラ属クヌギ節	S				堀 後列	みかん割り 芯去 角材
SD48				自然木		1894	コナラ属アカガシ亜属	S				堀 後列	みかん割り
SD48				杭		1896	ムクロジ	S				堀 後列	みかん割り 芯去
SD48				杭		1901	コナラ属アカガシ亜属	S				堀 後列	芯持丸木（皮付）
SD48				堰構造材		1902	ムクロジ	S				堀 後列	みかん割り 角材
SD48				杭		1903	コナラ属クヌギ節	S				堀 後列	みかん割り
SD48				杭		1905	コナラ属アカガシ亜属	S				堀 後列	芯持丸木
SD48				加工木		1906	ムクロジ	S				堀 後列	割材
SD48				杭		1907	ムクロジ	S				堀 後列	みかん割り（皮付）
SD48				自然木		1908	コナラ属アカガシ亜属	S				堀 後列	芯持丸木
SD48				杭		1917	ハンノキ属ハンノキ節	S				堀 後列	みかん割り
SD48				棒状木製品		1973	コナラ属アカガシ亜属	S				堀 後列	丸木（皮付）
SD48				杭		2106	コナラ属クヌギ節	S	332	77	68	堀 後列	みかん割り
SD48				堰構造材		2154	コウゾ属	S	870	130		堀 後列	横木 芯持丸木
SD48				杭		1882	ハンノキ属ハンノキ節	S				堀 後列	みかん割り 芯去
SD48				杭		1916	ムクロジ	S				堀 後列横木	みかん割り
SD48				杭		1919	コウゾ属	S				堀 B列横木2/3	芯持丸木（皮付）
SD48				曲物底板		1922	モミ属	S				SD79合流部	板目
SD48				杭		2012	コナラ属アカガシ亜属	S				SD79合流部	芯持丸木
SD48				杭		2013	ヤナギ属	S				SD79合流部	芯持丸木（皮付）
SD48				杭		2014	スダジイ	S				SD79合流部	みかん割り
SD48				板材		2015	モミ属	S				SD79合流部	板目
SD48				杭		2016	コナラ属アカガシ亜属	S				SD79合流部	芯持丸木
SD48				棒状木製品		2018	コナラ属アカガシ亜属	S				SD79合流部	芯持丸木（皮付）
SD48				杭		2019	ムクロジ	S				SD79合流部	みかん割り 芯去
SD48				堰構造材		2020	コナラ属アカガシ亜属	S				SD79合流部	みかん割り 側板（板周）
SD48				板		2022	モミ属	S				SD79合流部	板目板
SD48				杭		2027	モミ属	S				SD79合流部	みかん割り 芯去
SD48				不明		2062	モミ属	S	70	30		SD79合流部	板目
SD48				杭 角材		2064	トネリコ属シオジ節	S	230	60	50	SD79合流部	みかん割り 芯去 角材
SD48				加工木		2065	モクレン属	S	650	40	40	SD79合流部	芯持丸木
SD48				杭		2067	エノキ属	S	610	40	30	SD79合流部	芯持丸木
SD48				杭		2068	コナラ属アカガシ亜属	S	560	50	40	SD79合流部	みかん割り 芯去
SD48				板材		2069	モミ属	S	330	50	10	SD79合流部	板目
SD48				杭		2070	トネリコ属シオジ節	S	510	60	80	SD79合流部	みかん割り 芯去 角材
SD48				板材		2074	モミ属	S	460	40	20	SD79合流部	板目
SD48				杭		2080	ムクロジ	S	1020	60	60	SD79合流部	みかん割り
SD48				杭		2083	ツバキ属	S	410	100	70	SD79合流部	芯持丸木
SD48				堰構造材		2100	カエデ属	S	2028	85	47	SD79合流部	芯持丸木 叉木
SD48				杭		2101	コウゾ属	S	565	66	77	SD79合流部	
SD48				杭		2103	クワ属	S	918	77	65	SD79合流部	芯持丸木
SD48				杭		2104	クワ属	S	1721	72	60	SD79合流部	芯持丸木（皮付）
SD48				杭		2112	クワ属	S	659	78	50	SD79合流部	芯持丸木（皮付）
SD48				杭		2117	コナラ属アカガシ亜属	S				SD79合流部	芯持丸木（皮付）
SD48				矢板		2124	モミ属	S				SD79合流部	板目
SD48				杭		2125	モミ属	S				SD79合流部	板目
SD48				杭		2134	クワ属	S	1005	88	80	SD79合流部	芯持丸木
SD48				杭		2137			1005	85	70	SD79合流部	芯持丸木
SD48				板材		2148	モミ属	S				SD79合流部	板目
SD48				杭		2149	ニワトコ	S				SD79合流部	芯持丸木
SD48				堰構造材		2150	コナラ属アカガシ亜属	S				SD79合流部	芯持丸木
SD48				杭		2151	コナラ属アカガシ亜属	S				SD79合流部	みかん割
SD48				板材（厚板）		2156	コナラ属アカガシ亜属	S				SD79合流部B列2/2	板目
SD79				板材		1937	モミ属	S	290	80	20	合流部	追柾目
SD48				杭		2011	クワ属	S				合流部	芯持丸木
SD48				種子		—						柵列付近	見てるよ核 動物食跡
SD48				加工木		2063	ツブラジイ	S	640	50	50	白川辺未片	芯持丸木
SD48						1675	ヤハダ	S					板目

遺構	分類	図版	挿図	器種	加工型式	プレパレート	樹種	SR	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	備考
SD48				割材		1736	モミ属	S					みかん割り　芯去
SD48				枝		1739	ニワトコ	S					芯持丸木
SD48				柱材		1753	コナラ属アカガシ亜属	S	2900	110	90		芯持丸木
SD48						1754	コナラ属アカガシ亜属	S					板目
SD48				枝		1756	ムクノキ	S					みかん割り　へつり
SD48				枝		1760	トネリコ属シオジ節	S					みかん割り
SD48				枝		1776	オニグルミ	S					芯持丸木（皮付）枝
SD48				枝		1778	カエデ属	S					みかん割り　芯去
SD48				枝		1790	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木
SD48				棒状木製品		1806	クワ属	SR					芯持丸木　加工痕
SD48				割材		1809	コナラ属クヌギ節	S					割材
SD48				割材		1817	コナラ属コナラ節	S					割材
SD48				自然木		1818	コナラ属コナラ節	S					みかん割り
SD48				枝		1819	オニグルミ	S					芯持丸木
SD48				枝		1824	ニワトコ	SR					板目
SD48				板材		1825	オニグルミ	S					板目
SD48				棒状木製品		1828	ツブラジイ	S					芯持丸木
SD48				棒状木製品		1829	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木
SD48				割材		1830	コナラ属コナラ節	S					割材
SD48				自然木		1831	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木　枝
SD48				枝		1832	コナラ属アカガシ亜属	S					割材
SD48				棒状木製品		1833	スダジイ	S					芯持丸木
SD48				加工木		1835							割材　角柱状　みかん割り
SD48				板材		1837	モミ属	S					割材
SD48				枝		1838	クワ属	S					芯持丸木
SD48				重木		1839	スダジイ	S					芯持丸木（ホゾ）
SD48				枝		1840	クワ属	S					芯持丸木
SD48				棒状木製品		1841	スダジイ	S					芯持丸木（皮付）枝はつり
SD48				自然木		1842	エノキ属	S					芯持丸木（皮付）
SD48				柱材		1843	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木（皮付）
SD48				堰構造材		1844	スダジイ	S					板目　みかん割り
SD48				枝		1845							板目
SD48				枝		1846							芯持丸木　みかん割り　板状　半割
SD48				自然木		1847	スダジイ	S					芯持丸木（皮付）　小さい
SD48				棒状木製品		1850	モミ属	S					芯持丸木（皮付）
SD48				板材		1851	モミ属	S					板目
SD48				枝状		1852	モミ属	S					みかん割り　割材
SD48				不明部材		1853	エノキ属	S					みかん割り　（加工痕）
SD48				割材		1854	ウコギ属	S					割材
SD48				棒状木製品		1855	コナラ属アカガシ亜属	S					半割
SD48				枝		1856	コナラ属アカガシ亜属	S					現状割れ　芯持丸木
SD48				枝		1857	クマシデ属イヌシデ節	S					芯持丸木
SD48				自然木		1858	ムクロジ	S					半割
SD48				枝		1859	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木
SD48				加工木		1860	ニワトコ	S					芯持丸木
SD48				自然木		1861	ウコギ属	S					芯持丸木
SD48				棒状木製品		1862	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木
SD48				枝		1863	コナラ属クヌギ節	S					芯持丸木
SD48				樹皮		1864							
SD48				枝		1865	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木
SD48				堰構造材		1866	コナラ属アカガシ亜属	S					みかん割り　小片
SD48				農具		1867	イチイガシ	S					板目
SD48				枝		1868							芯持丸木（皮付）
SD48				加工木		1870	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木（皮付）　一部炭化
SD48				枝		1871	コナラ属コナラ節	S					みかん割り
SD48				枝		1872	コナラ属アカガシ亜属	S					半割
SD48				枝		1873	コナラ属アカガシ亜属	S					
SD48				自然木		1874							みかん割り
SD48				自然木		1880	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木
SD48				枝		1897	ハンノキ属ハンノキ節	S					みかん割り（皮付）
SD48				枝		1900	コナラ属クヌギ節	S					割材　みかん割り
SD48				枝		1904	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木
SD48				枝		1947	ニワトコ	S					芯持丸木
SD48				枝		1958	カエデ属	S					芯持丸木
SD48				枝		1959	ヌルデ	S					芯持丸木

遺構	分類	図版	挿図	器種	加工型式	プレパレート	樹種	SR	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考	備考
SD48				板		1968	カヤ	S					追柾目
SD48				杭		1970	ウコギ属	S					芯持丸木
SD48				杭		1988	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木（皮付）
SD48				柾目板		1989	スギ	S					柾目
SD48				板材		1990	ツブラジイ	S					柾目
SD48				杭		1991	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木
SD48				杭		1992	ムクノキ	S					板目
SD48				杭		1993	ニワトコ	S					芯持丸木（皮付）
SD48				板材		1994	スギ	S					板目
SD48				自然木		1995	コナラ属コナラ節	S					芯持丸木（皮付）　枝はつり
SD48				加工木		1996	ウルシ	S					板目
SD48				加工木		1997	ニワトコ	S					芯持丸木
SD48				棒状木製品		1998	コナラ属アカガシ亜属	S	652	153	92		芯持丸木
SD48				杭		1999	スダジイ	S					芯持丸木
SD48				杭		2000	ムクノキ	S					芯持丸木（皮付）
SD48				杭		2001	ムクロジ	S					半割
SD48				棒状木製品		2002	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木
SD48				杭		2003	ヒノキ	S					みかん割り　割材
SD48				杭		2004	クワ属	S					芯持丸木
SD48				杭		2005	ニワトコ	S					芯持丸木
SD48				棒状木製品		2006							芯持丸木（嘴部えぐり）
SD48				自然木		2007							芯持丸木（皮付）
SD48				自然木		2008	コナラ属コナラ節	S					
SD48				杭		2009	トネリコ属トネリコ節	S					芯持丸木
SD48				杭		2010	スダジイ	S					芯持丸木
SD48						2017	ブナ属	S					
SD48				杭		2021	サカキ	S					芯持丸木
SD48				杭		2023	ムクロジ	S					割材
SD48				杭		2024	カエデ属	S					芯持丸木
SD48				杭		2025	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木（皮付）　小さい
SD48				杭		2026	スダジイ	S					芯持丸木（えぐり）
SD48				杭		2028	モミ属	S					板目
SD48				加工材		2029	エゴノキ属	S					芯持丸木　枝
SD48				杭		2031	コナラ属アカガシ亜属	S					枝はつり
SD48				杭		2032							芯持丸木
SD48				杭		2033	オニグルミ	S					割材
SD48				杭		2034	ムクロジ	S					みかん割り
SD48				不明		2035	タラノキ	S					丸木
SD48				板材		2036	スダジイ	S					板目
SD48				板材		2037	モミ属	S					板目　部分的炭化
SD48				杭		2038	トネリコ属シオジ節	S					芯持丸木
SD48				杭		2039	コナラ属アカガシ亜属	S					みかん割り
SD48				板材		2041	モミ属	S					板目（皮付）
SD48				杭		2042	カエデ属	S	920	90			みかん割り　芯去
SD48				杭		2044			300	50			芯持丸木
SD48				チップ		2049	カヤ	S	110	40			板目
SD48				板材		2050	スギ	S	20	4			板目
SD48				杭		2051	エノキ属	S	320	30			芯持丸木
SD48				杭		2052	コナラ属クヌギ節	S	260	80			みかん割り
SD48						2055	ムクロジ	S					みかん割り　芯去
SD48				自然木		2057	カエデ属	S					芯持丸木
SD48				環構造材		2066	ムクロジ	S	840	60			角材　割材
SD48				棒状木製品		2071	フジ	S					またたびetふじ　芯なし割り出し
SD48				自然木		2075	カエデ属	S					芯持丸木
SD48						2076	エノキ属	S					割材
SD48				自然木		2077	エノキ属	S					芯持丸木
SD48				加工木		2087	ムクロジ	S	100	70	60		みかん割り
SD48						2088	カヤ	S			70		割材
SD48				杭		2089	カエデ属	S	190	40	30		割材
SD48				板片		2091	コナラ属コナラ節	S	190	60			みかん割り
SD48				杭		2092	トネリコ属	S	170	40			みかん割り　芯去
SD48				杭		2093	カエデ属	S	270	50	10		割材
SD48				加工木		2094	グミ属	S	360	50			芯持丸木
SD48				割材		2096	クワ属	S	190	60			割材
SD48				自然木？		2097	クマシデ属イヌシデ節	S	350	80	30		芯持丸木

遺構	分類	図版	掲図	器種	加工型式	プレパラート	樹種	SR	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考	備考
S D48				堅木？		2098	コナラ属アカガシ亜属	S	180	40			芯持丸木
S D48				丸木		2109	クワ属	S					芯持丸木
S D48				板材		2114	トネリコ属シオジ節	S	880	180			板目
S D48				板		2119	モミ属	S					板目
S D48				杭		2120	ムクロジ	S					芯持丸木
S D48				杭		2121	モミ属	S					割材
S D48				杭		2122	ウコギ属	S					芯持丸木
S D48						2123	ムクロジ	S	490	70	50		みかん割り
S D48						2126	コナラ属クヌギ節	S					みかん割り
S D48						2127	エノキ属	S					割材
S D48				加工木		2128	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木（皮付）
S D48				板		2130	スギ	S					板目
S D48				板材		2131	モミ属	S					板目
S D48				杭		2132	イヌガヤ	S					芯持丸木
S D48				柱材？		2135	モミ属	S					半割　表面炭化
S D48				建築材		2153	モミ属	S					芯持丸木
S D48				堅木		2158	モミ属	S					芯持丸木
S D48				杭		2160	モミ属	S					板目　半割　一部炭化
S D48				角材		2161	モミ属	S					割材
S D48				杭		2162	コナラ属クヌギ節	S					芯持丸木（皮付）
S D48				半割		2175	コナラ属アカガシ亜属	S					半割　（皮付）
S D48				角材		2176	トネリコ属シオジ節	S					割材
S D48配石				割材		1834	コナラ属クヌギ節	S				大溝内配石	みかん割り
S D48配石				不明		1836	ヤナギ属	S				大溝内配石	芯持丸木　小枝　側面面取り
S D48配石				木簡		1770	コナラ属クヌギ節	S				大溝内配石	割材
S D48配石				杭		1785						大溝内配石	芯持丸木（樹ふあり）　ひもかけ？
S D48配石				杭		1848	ヤナギ属	S				大溝内配石	芯持丸木
S D48配石				不明		1932	ヤナギ属	S	100			大溝内配石	芯持丸木　小枝
S D48配石				自然木		2116	コナラ属アカガシ亜属	S				大溝内配石	芯持丸木　弯化
S D79				杭		1923			260	60	20	第2トレンチ	芯持丸木
S D79				杭		1738	ヤハダ	S				第4トレンチ	芯持丸木
S D79				加工木		1744	ニワトコ	S				第4トレンチ	芯持丸木
S D79				杭		1957	スダジイ	S	410	50	50	第4トレンチ	芯持丸木（皮付）
S D79				杭		1964	コナラ属アカガシ亜属	S				第4トレンチ	割材
S D79				柵		1966						第4トレンチ	横木取り　板目
S D79				自然木		1969	ツルウメモドキ属	S	90	40	40	第4トレンチ	割
S D79				自然木		1985	トチノキ	S				第4トレンチ	
S D79				板		2129	モミ属	S				第4トレンチ	板目
S D79				杭		2157	コナラ属アカガシ亜属	S				第4トレンチ	芯持丸木
S D79				杭		2159	コナラ属アカガシ亜属	S				第4トレンチ	芯持丸木
S D79				種子		-						第4トレンチ	鬼ぐるみ核
S D79				自然木		1728							芯持丸木
S D79				棒状木製品		1719							芯持丸木（皮付）
S D79				板材		1720	サワラ	S					板目
S D79				杭		1722	トネリコ属	S					板目
S D79				杭		1723	ツブラジイ	S					芯持丸木
S D79				杭		1724							芯持丸木（皮付）
S D79				杭		1725	ツブラジイ	S					芯持丸木
S D79				杭		1726	コナラ属アカガシ亜属	S					みかん割り（えぐり）　割材
S D79				杭		1727	カエデ属	S					芯持丸木
S D79				杭		1729							芯持丸木
S D79				不明木製品		1730	カエデ属	S					割材
S D79				杭		1731	コナラ属クヌギ節	S					芯なし割りだし
S D79				杭		1732	ニガキ	S					芯持丸木
S D79				割材		1733	トネリコ属シオジ節	S					割材　一部炭化
S D79				自然木		1734	クワ属	S					芯持丸木
S D79				杭		1735	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木　片側炭化
S D79				杭		1740	コナラ属アカガシ亜属	S	330	60	60		芯持丸木
S D79				杭		1741	クワ属	S					半割
S D79						1742	カエデ属	S	190	50	60		みかん割り　芯去　先端炭化
S D79				杭		1743	クマシデ属イヌシデ節	S					芯持丸木（皮付）
S D79				板材		1746	モミ属	S					板目
S D79				杭		1747	エノキ属	S					みかん割り
S D79				自然木		1748	ニワトコ	S	900	120			割れ　一部炭化
S D79				杭		1749	モミ属	S	570	60	50		芯持丸木

遺構	分類	図版	挿図	器種	加工型式	プレパラート	樹種	SR	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考	備考
SD79				柱材		1750	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木（皮付）
SD79				杭		1751	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木（皮付）
SD79						1752	エノキ属	S	550	70	60		
SD79						1759	モミ属	S					板目（壁材転用）
SD79				杭		1849	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木（皮付）
SD79						1887	コウゾ属	S					割材　板目
SD79				木製加工木		1921	モミ属	S					板目
SD79				杭		1924	エノキ属	S					割材（キドリ）　角材
SD79				板材		1926	モミ属	S					板目
SD79				杭		1927	クリ	S					半割
SD79				不明		1928	モミ属	S					板目
SD79				杭		1929	サクラ属	S					芯持丸木
SD79				板		1933	モミ属	S	400	60	20		追柾目　みかん割り　角材
SD79				板材		1934	モミ属	S					板目（部分的に炭化）
SD79				農具？		1935	イチイガシ	S	300	40	20		割材
SD79				加工木		1936	ニレ属	S					割材　樹皮付
SD79				杭		1938	クワ属	S	5550	30	20		芯持丸木
SD79				不明木製品		1939	モミ属	S					割材
SD79				板材		1940	モミ属	S					追柾目
SD79				杭		1941	モミ属	S					柾目　角材
SD79				杭		1942	スダジイ	S					芯持丸木
SD79				杭		1943	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木
SD79				不明木製品		1944	ムクロジ	S					板目
SD79				杭		1945							芯持丸木
SD79				杭		1946	ツバキ属	S					板目
SD79				建本転用杭		1948	エノキ属	S					芯持丸木
SD79				板材		1949	トネリコ属シオジ節	S					柾目　表面炭化
SD79				杭		1951	クワ属	S	240	60	50		芯持丸木
SD79				割材		1952	コナラ属アカガシ亜属	S	530	40	50		加工木
SD79				自然木		1953	クワ属	S					丸木
SD79				不明木製品		1954	クマシデ属	S					芯持丸木
SD79				板材		1955							柾目
SD79				板材		1956	モミ属	S					追柾目
SD79				加工木		1960							芯持丸木
SD79				杭		1961	クワ属	S					半割
SD79				棒状木製品		1962	コナラ属アカガシ亜属	S					半割　加工痕
SD79				杭		1963	ツバキ属	S					芯持丸木
SD79				杭		1965			100				芯持丸木
SD79				杭		1967	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木（皮付）
SD79				杭		1971	クリ	S					半割
SD79				ツケギ		1972	モミ属	S					板目
SD79				板材		1974	コナラ属アカガシ亜属	S					みかん割り
SD79				加工木		1975	モミ属	S					板目
SD79				棒状木製品		1976	エノキ属	S					芯持丸木（皮付）
SD79				杭		1977	トネリコ属シオジ節	S					割材（片面炭化）
SD79				自然木		1978	コナラ属アカガシ亜属	S					芯持丸木
SD79				角材		1979	コナラ属クヌギ節	S					角材
SD79				杭		1980	モミ属	S					芯持丸木
SD79				杭		1981	コナラ属アカガシ亜属	S	580	60	50		芯持丸木（皮付）
SD79				割材		1982	コナラ属アカガシ亜属	S					割材
SD79				角材		1983	モミ属	S					割材
SD79				板材		1985	モミ属	S					板目
SD79				杭		1987	クマシデ属	S					みかん割り　芯去
SD79				自然木		2030	クワ属	S					割材
SD79				板材		2084	モミ属	S	840	70	20		板目
SD79						2086	モミ属	S	370	70	30		板目
SD79				矢板		2133	モミ属	S					板目
SD79				板状		2136	スギ	S					板目
SD79				堰側造材		2138	モミ属	S					割材
SD79				柱材？		2155	コナラ属アカガシ亜属	S					みかん割り　芯去
SS16				自然木		1930	カエデ属	S	170	30	20		
SS16				木葉		1931	コナラ属アカガシ亜属	S	160	10	10		割れ　小枝
SS19				杭		1950	ヒノキ	S	240	50	20		板目
SD79	木製品	482	89	板材		—			4540	209	52		板目

Ⅵ　古墳跡と遺物

1．古墳群の概要

これまでの反町遺跡の調査によって、弥生時代から奈良・平安時代にいたる遺構・遺物が多数検出されている。その中で主要な成果となっているのは、古墳時代前期の集落跡の検出と低地に展開する中小規模の古墳群の存在が明らかになったことである。

低地に立地する古墳群

都幾川によって形成された低地帯の直中、標高18m前後の微高地上に古墳群は営まれている。平成14年の県教委による試掘調査が実施されるまでは、この低地帯に埋没した古墳群が眠っていようとは予想だにできなかった。これまでの3次に亘る調査によって、前方後円墳1基、円墳27基の総数28基の古墳跡の所在が確認された。全長約35mの前方後円墳である第4号墳を盟主墳として、その他は墳丘径10～20mの円墳によって構成されている。古墳群の広がりは南側が未調査のため明らかでないが、大きく蛇行する河川跡によって囲まれた微高地を中心に、大小の古墳が周溝を接するように密集して営まれている（第9図）。

なお、本報告は第3次調査で検出された16基の古墳跡（ＳＳ13～ＳＳ28）について報告する。第1・2次調査の成果については現在整理中である。

高坂台地周辺の古墳群の様相

古墳空白地を埋めるように発見された埋没古墳群ではあるが、周辺の高坂台地上には高坂古墳群をはじめ、毛塚古墳群、諏訪山古墳群等の古墳群が分布している。

高坂古墳群は、反町遺跡を俯瞰するように台地北東縁辺部から中央部にかけて広範囲に約50基の古墳が所在する。国道407号線バイパス関連で調査された代正寺遺跡の16基の古墳跡、湖西・尾張産等の東海産須恵器（高坏・長頸壺・平瓶・甕）を出土した終末期方墳の高坂50号墳、前方後円墳の高済寺古墳、帆立貝式古墳の高坂4号墳、大型円墳の高坂神社古墳、払田神社古墳等がある。

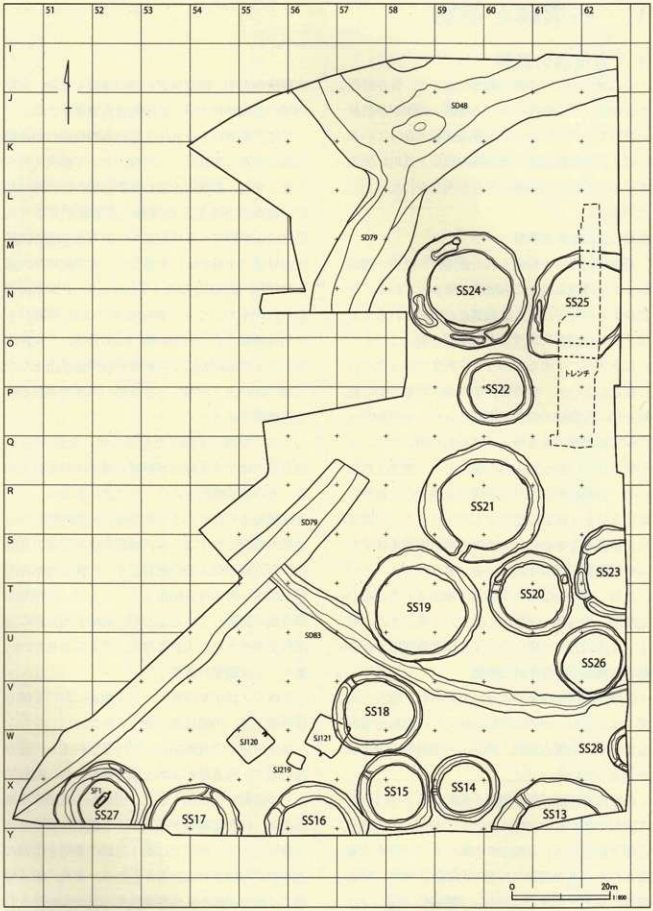
毛塚古墳群は九十九川を望む高坂台地の南西縁辺部に所在し30基以上の円墳によって構成されている。また、都幾川を望む高坂台地の北西縁辺部には総数53基を数える諏訪山古墳群が分布する。諏訪山古墳群は、4世紀前半の前方後方墳の諏訪山29号墳（全長45m）を嚆矢に、4世紀後半の前方後円墳の諏訪山古墳（全長68m）、5世紀前半の空白期をおいて、5世紀後半にはBc種横ハケの円筒埴輪をもつ円墳の諏訪山33号墳、5世紀末葉から6世紀初頭には青銅製鈴付腕輪を出土した、円墳の諏訪山1号墳へと首長墓の系譜が辿れる有力古墳群である。

さらに都幾川を隔てた対岸には、全長115mの前方後円墳である野本将軍塚古墳がその威容を誇る。その築造時期をめぐっては諸説あるが、ここでは埴輪をもたないことや墳丘の形態的特徴から前期古墳説に与する。本古墳群の成立背景の要因に、野本将軍塚古墳の被葬者を「広範な地域の開発主導者一偉大なる始祖王一」として、地域集団構成員が認識していたことが、対峙する位置に古墳群を現出させた大きな理由と考えておきたい。

第1・2次調査の概要

平成17・18年度の第1・2次調査において前方後円墳1基、円墳11基が検出された。

第4号墳は全長約35m、後円部径約22mの前方後円墳で、前方部から粘土槨が検出され、副葬品として鉄剣一振が出土した。周溝からは須恵器無蓋高坏、円筒埴輪等が出土し、5世紀後葉の築造と推定される。現状では第4号墳の築造を契機に古墳群が形成されたと考えられる。また、第3号墳では墳丘裾部から馬形埴輪や円筒埴輪が出土したほか、南西側周溝から人物埴輪が出土した。


51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
X
Y
SD48
SD79
SS24
SS25
トレンチ
SS22
SS21
SD79
SS23
SS20
SS19
SD83
SS26
SS18
SJ120
SJ121
SS28
SJ119
SS15
SS14
SS27
SS17
SS16
SS13
0
20m
1:800

第483図　古墳全体図

第３次調査の概要（第483図）

今回報告する第３次調査は、第１・２次調査で古墳跡の検出された東西方向に長く延びるＢ・Ｃ区の北側約30ｍに位置している。今回の調査成果により、古墳群の西側及び北側への広がりを明らかにすることができた。

調査された古墳跡は16基を数え、いずれも円墳である。古墳群の広がりは、旧河川の流路跡によって囲繞された微高地上に４～５基からなる単位群を形成しながら、標高の高い南側から標高の低い北側に向かって、墓域を拡大していった。古墳跡の分布状況から、調査区外にはまだ複数の古墳が存在する可能性が高く、おそらく40～50基で構成される古墳群を形成していたものと想定される。

なお、いずれの古墳も墳丘上部は削平を受けており、主体部の位置や構造等は確認できなかった。ただし、横穴式石室の存在を示すような痕跡が墳丘部には残されていないことから竪穴系の主体部であった可能性が強い。副葬品の様相こそ不明瞭であるものの、出土した土器や埴輪の特徴から、いわゆる古式群集墳の範疇で捉えることができる。築造時期を含めた古墳群の変遷過程については、第１・２次調査の成果が報告された段階で再考したいと思うが、ＴＫ23～ＴＫ47型式期の５世紀後葉から古墳群の築造が開始され、ＴＫ43型式期の６世紀後葉まで継続的に古墳群の形成が続いたものと考えている。

古墳群が築造を開始した５世紀後葉頃には、調査区南側に３軒の住居跡が存在していた。その後は住居跡がまったく造られなくなり、墓域へと大きく変わった。古墳築造開始以降の居住地としては、河川跡の西側に展開する城敷遺跡がその最有力候補である。大型掘立柱建物跡や出土遺物から見て、一般的な集落とは言えず、反町遺跡の古墳群の造営母体であった可能性が考えられる。

２．古墳跡

第13号墳（第484～487図）

第13号墳は調査区南東隅の壁沿い、Ｘ－61グリッドを中心に位置する。西側に第14号墳、北東側に第28号墳が近接している。南側は調査区域外に延びているため、今回の調査では全体の約3分の１を調査したにすぎない。

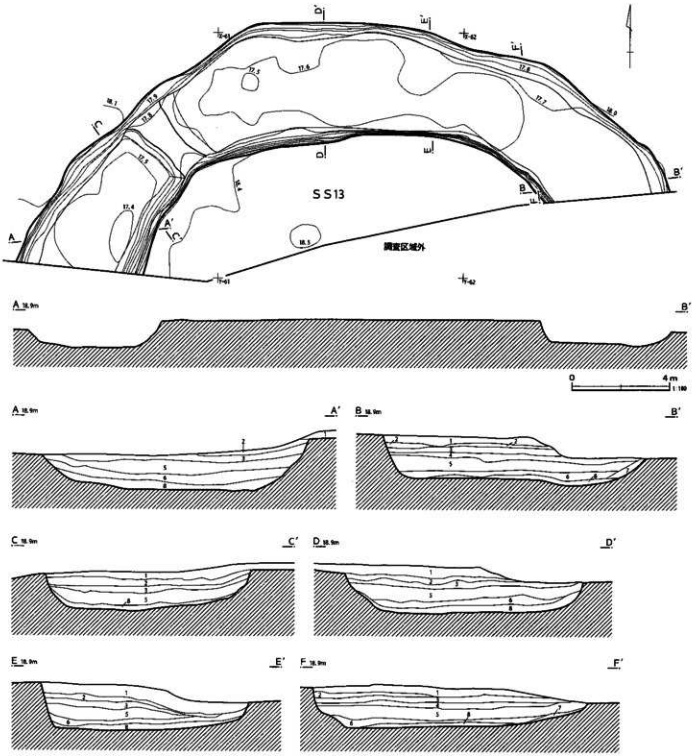
今回調査した古墳の中では最大規模の円墳で、墳丘径約19.50ｍ、周溝径約28.50ｍと推定される。墳丘盛土は既に削平されており、内部主体等は検出されなかった。

墳丘部の平面形態は、北側墳丘立ち上がり線がやや直線的となっているが、本来は比較的整った円形を呈するものと推定される。周溝は他の古墳に比べ幅広く、掘り込みも全体に深い。規模は周溝幅4.34～4.90ｍ、深さ0.76～0.94ｍを測る。周溝底面は幅広で、起伏が少ない。断面形は逆台形で、墳丘側はやや急角度に立ち上がり、周溝外縁部側は比較的緩やかである。ブリッジは北西方向を向き、ほぼ直線的に開口する。墳丘部分よりも一段低く掘り窪められ、幅約１ｍの平坦面を造り出していた。主軸方位はＮ－44°－Ｗを示す。

周溝覆土は大きく８層に区分される。最下層には灰黄褐色土が薄く堆積し、底面を被覆していた。その上には黄褐色、暗褐色、暗茶褐色、黒褐色等の土層が帯状に堆積する。

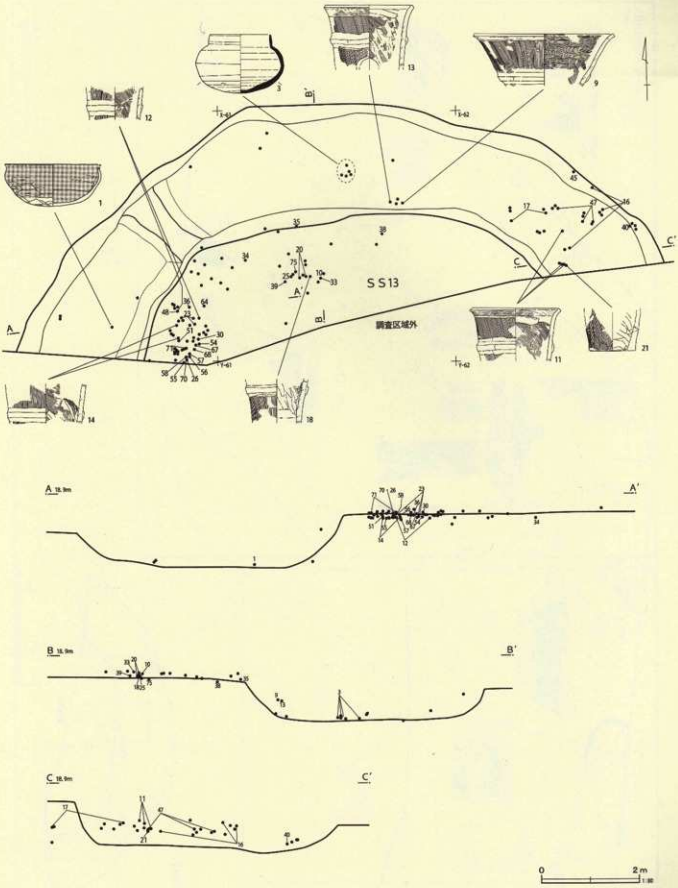
遺物は墳丘部から円筒埴輪、形象埴輪がまとまって出土した。特に形象埴輪は墳丘外側から見てブリッジの右側に馬形埴輪が樹立されていたようである。また、周溝の覆土中からも墳丘部から流れ込んだ円筒埴輪が多量に出土した。

古墳に伴う遺物は土師器坏、須恵器短頸壺・甕、円筒埴輪、形象埴輪がある。この他に古墳に伴わない遺物として周溝覆土中から古墳時代前期の土器が出土したほか、時期不明の鉄製品がある。

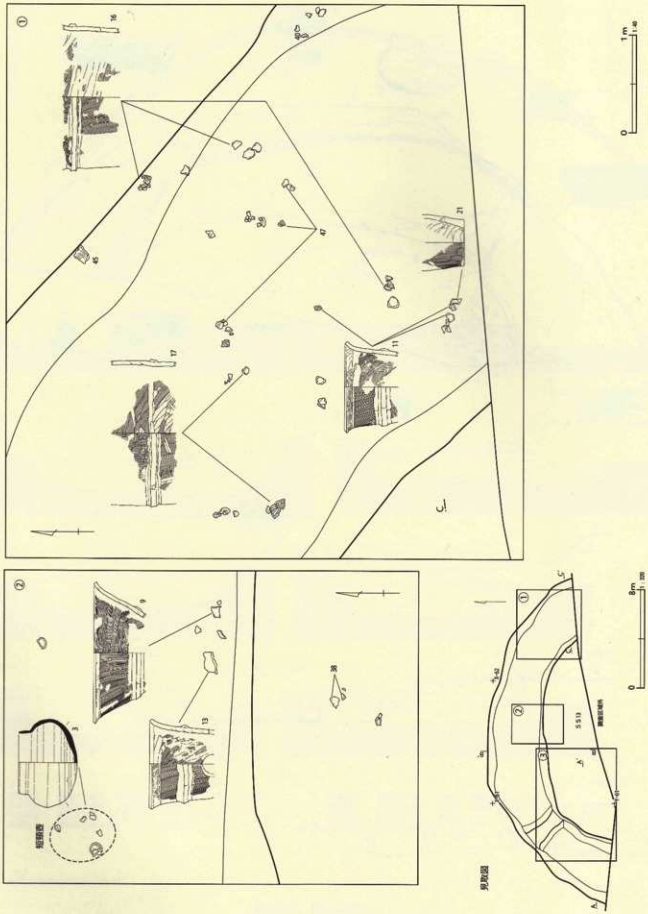


SS13
1　黒褐色土　黄褐色土粒子・炭化粒子含む　しまりややあり　粘性弱い
2　黄褐色土　黄褐色土主体　しまり・粘性あり
3　暗茶褐色土　酸化鉄多量　炭化粒子含む　しまりややあり
4　黄褐色土　黄褐色土粒子含む　しまりやや弱い
5　暗褐色土　炭化粒子含む　しまり・粘性ややあり
6　暗褐色土　黄褐色土粒子・砂粒子・炭化粒子含む　しまりあり
7　黄褐色土　黄褐色土ブロック含む
8　灰黄褐色土　しまり・粘性あり

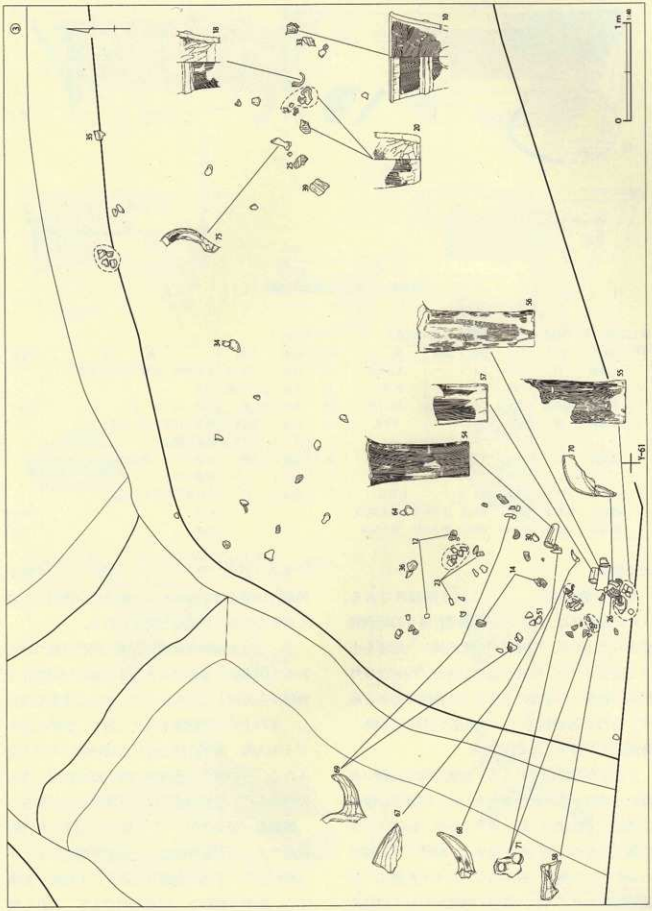
第484図　第13号墳（1）



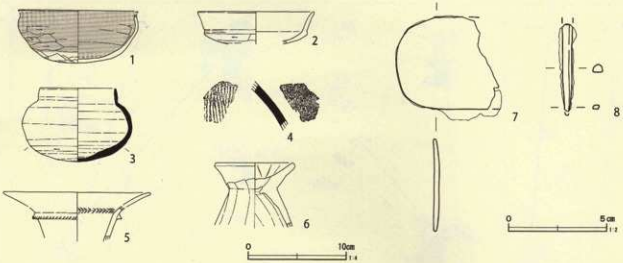
第485図　第13号墳（2）



第486図　第13号墳（3）



第487図　第13号墳（4）



第488図　第13号墳出土遺物（1）

第177表　第13号墳出土遺物観察表（第488図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	坏	(12.2)	5.4	—	EHIK	70	良好	にぶい橙	比企型坏　赤彩　№93　周溝	
2	土師器	坏	(11.8)	3.3	—	EHIJ	20	不良	にぶい褐	周溝	
3	須恵器	短頸壺	7.8	7.5	—	EGIK	80	良好	灰	№43・44・46・47	178-1
4	須恵器	甕	—	3.7	—	EIK	5	良好	灰白	外面平行叩き目　内面ナデ 降灰　墳丘	
5	土師器	壺	—	3.6	—	EHIJ	20	普通	橙	突帯キザミ　内面綾杉文 周溝　墳丘	
6	土師器	器台	7.9	6.6	—	CEHIJ	70	普通	橙	台付甕の転用か　№91	
7	鉄製品	板状品	長さ4.9	幅4.7	厚さ0.25	重さ32.33				№78	178-2
8	鉄製品	棒状品	長さ4.4	幅0.5	厚さ0.45	重さ5.08				周溝	178-3

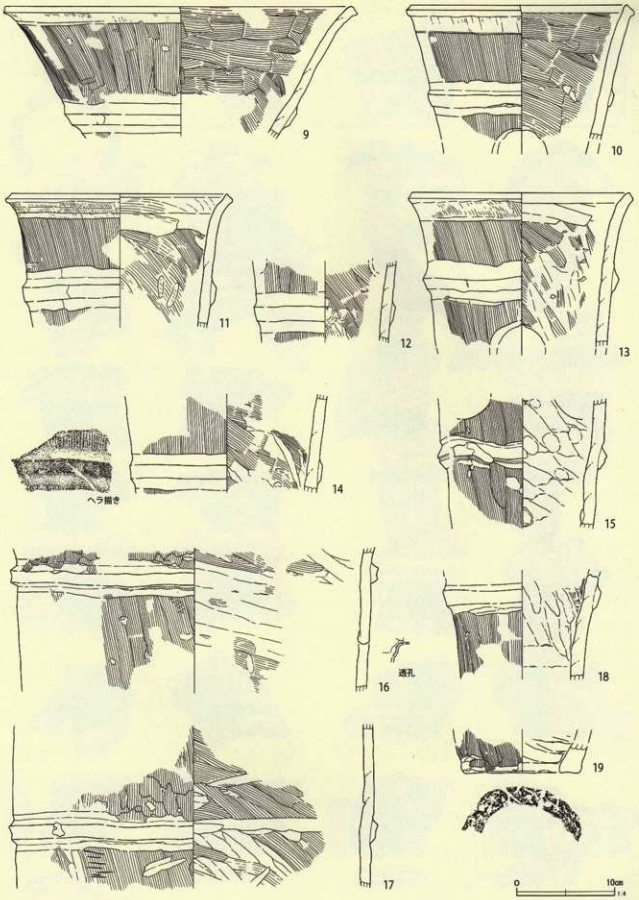
出土遺物

土器（第488図）　1・2は土師器坏である。1の比企型坏は、ブリッジ右側墳丘寄りの周溝底面から出土した。口縁部が一度内湾し、端部を小さく外反させた、腰高な器形である。内面及び外面も口縁部から体部の中程まで広範囲に赤彩を施す。2は坏蓋模倣坏で、口縁部が外反して開く。体部はやや扁平となる。

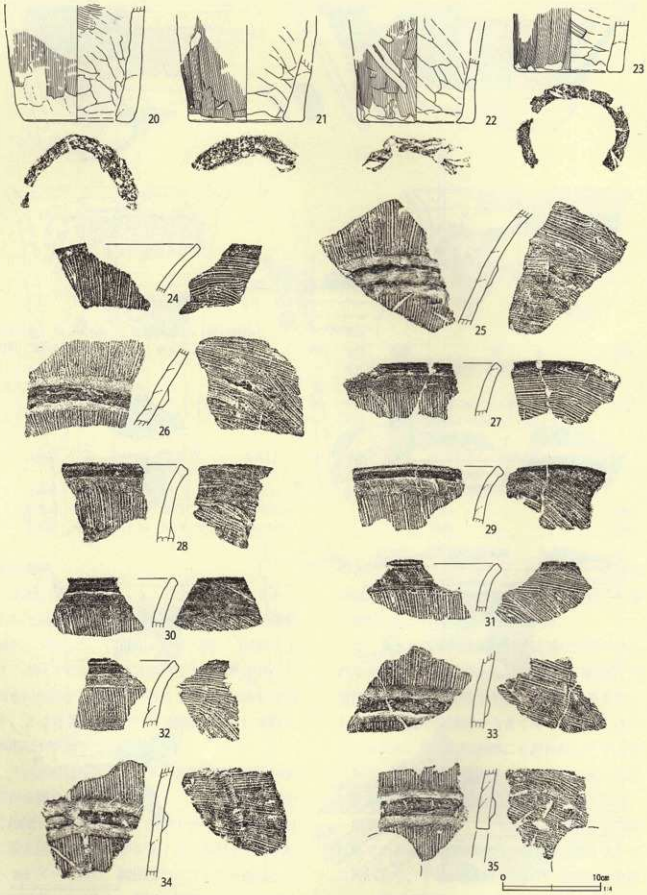
3は須恵器短頸壺である。北側周溝の底面中央部から破砕された状態で出土した。口縁部は僅かに内傾して直線的に短く立ち上がり、体部は中位に最大径をもつ扁円形を呈する。胴部下半に回転ヘラケズリを施し、肩部はロクロナデを施す。有蓋短頸壺と考えられ、器形の特徴からMT15型式併行期に位置づけられる。4は須恵器甕の胴部片である。外面に平行叩き目、内面にナデを施す。外面には薄く降灰がかかる。胎土に白色粒子を多く含むことから在地産と考えられる。

5・6は古墳時代前期の五領式期に位置づけられる土師器壺・器台である。5は壺の口縁部片で、頸部から外傾して立ち上がり、中位に突帯を巡らし、その上方で口縁部が大きく開く。突帯にはキザミを入れ、内面の屈曲部にも綾杉状にキザミを入れる。6の器台は台付甕の脚台部を転用したものであろう。受部内面にはヘラ押さえ痕が残る。

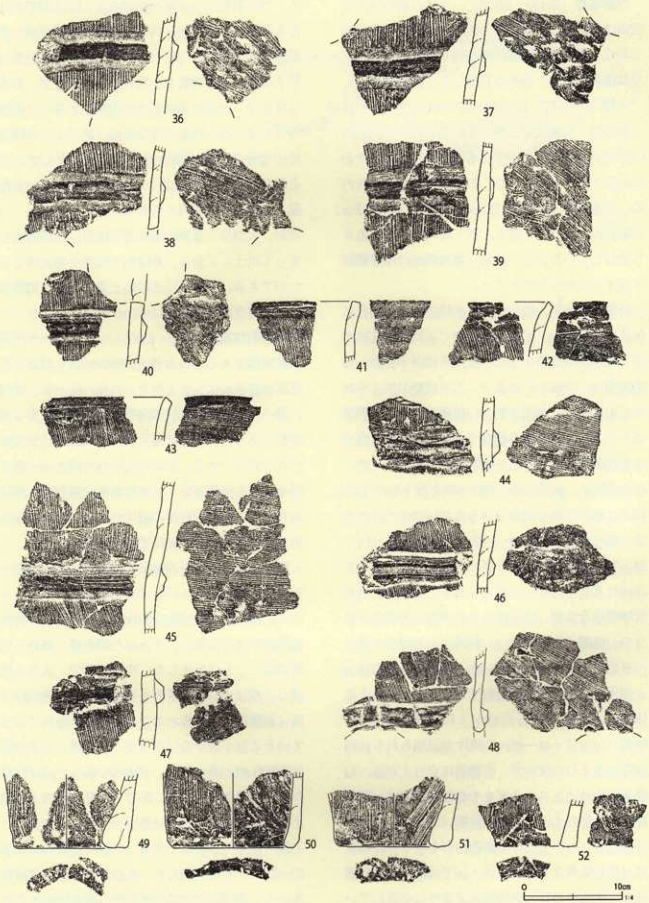
鉄製品（第488図）　7は端部に丸味をもつ板状品である。刃部等はなく、用途不明である。8は棒状品で、下端は先細りとなり、上端部を欠損する。断面不整形で、用途不明である。これらは古墳に伴うものであるかは明確でない。



第489図　第13号墳出土遺物（2）



第490図　第13号墳出土遺物（3）



第491図　第13号墳出土遺物（4）

円筒埴輪（第489～491図）　全体の形の分かる個体はないが、２条突帯３段構成品が主体を占めており、客体的に大型円筒埴輪が含まれる。ここでは前者をＡ類、後者をＢ類として記述する。

Ａ類（10～15・18～23・27～40・49～52）は、２条突帯３段構成品と考えられるものを一括した。口縁部が直線的に外傾するもの（10）と、緩やかに外反するもの（11・13）の２タイプに分けられる。法量は口径23.0～23.3cm、底径11.2～12.3cm、口縁長9.3～10.3cmを測る。第１段の伸長化があまり進行していないことから、各段間がほぼ等間隔に区分されたものであろう。

突帯は低台形、低Ｍ字形と多様である。透孔は円孔を基調とし、第２突帯のすぐ下には穿孔せず、少し離れた段間の中央に穿孔する傾向が強い。外面調整は一次縦ハケのみで、二次調整が加えられるものはない。内面調整は口縁部が斜ハケ、胴部はナデの後、斜ハケを観察する個体が多い。底部は基部幅3.1～5.1cmで、接合方法はＲ接合（20・49）を示す。基部内面に掌紋圧痕を残すもの（49）、底面に棒状圧痕の観察できるもの（22・23）がある。第２段の外面にヘラ描きをもつもの（14・34・36・39）が見られるが、いずれも断片的である。おそらく「×」と考えられる。胎土は白色針状物質を含まず、赤色粒子や白色粒子の混入が目立つ。色調は赤褐色ないし橙褐色を基調とする。

Ｂ類（16・17・41～48）は、胴部径35.6～35.8cmに復元される大型円筒埴輪である。小片が多く全体の大きさは分からないが、口縁部（41～43）、胴部（16・17・44～48）の破片が認められる。口縁部はあまり外反せず、直線的に立ち上がる。口唇部の内外面にヨコナデをやや強めに施す。胴部片には大型のものがなく、段間（突帯間）の規格は判然としない。突帯は断面台形を呈し、Ａ類とは一見して異なる。透孔は、16では透孔（方形透孔の可能性もある）を段間の下寄りに穿孔しているが、48は円形透孔を突帯に接するように穿孔する。外面調整は一次縦ハケのみで、二次調整が加えられるものはない。内面調整は口縁部が横ハケ、胴部はナデの後、斜ハケを観察する個体が多い。胎土は白色針状物質や小礫の混入が目立つ。焼成は良好で、色調は赤褐色及び橙褐色が多い。同様の大型品の出土例が毛塚32号墳、諏訪山７号周溝、桜山埴輪窯Ｇ類（城倉2010）等で出土している。それらを参考にすれば、５条突帯６段構成の大型品となる可能性も考えられる。

なお、大型品は東側周溝の調査区際に比較的まとまって出土しており、意図的な廃棄を想定することができる。しかし、その出土量から見て埴輪棺等に使用された可能性は弱い。

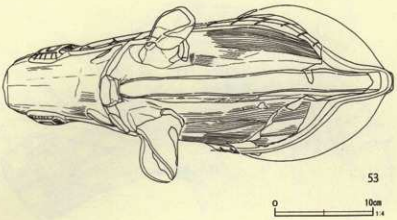
朝顔形埴輪（第489・490図）　９・24～26は朝顔形埴輪である。９は復元口径36.2cmを測る。花状部は直線的に大きく開き、外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。花状部突帯の断面形は低平なＭ字形である。24は花状部片、25・26は花状部突帯付近の破片である。25は外面にヘラ描きの一部が残る。26も突帯部分にヘラ描き様の線刻が一部認められる。頸部や肩部の破片が出土していないため、全体の形については不明である。

形象埴輪（第492～496図）　種類は人物（75・76）、馬（53～71）、不明（72～74）がある。

75・76は、人物埴輪の破片である。75は人物の右腕と考えられる。ブリッジ左側の墳丘部から円筒埴輪とともに出土した。中実成形で、大きく湾曲し、掌はオシャモジ形を呈する。掌の先端部内面に剥離痕が認められることから腰に手をあてがっていたことが分かる。指はすべて欠損し、手の甲に板押圧痕が良く残る。残存長14.6cm。76は頸飾りの一部である。頸部に貼付した粘土紐の上に粘土粒で丸玉を表現している。

53～71は馬形埴輪である。53は馬形埴輪の頭部で、耳の一部を欠損している以外は、ほぼ完存する。表土掘削の際に墳丘部西側の調査区際から出土した。出土位置を特定することはできないが、

ブリッジ右側の馬形埴輪の樹立位置に概ね重なっている。円筒閉塞式の頭部で、側板表現はない。目をアーモンド形に開け、瞼を僅かに隆起させる。円筒部の先端に口を切り込み、円形の鼻孔を丸棒状の工具の刺突によって表現する。鼻孔は右上がりの段違いに穿孔され、内部まで貫通していない。耳は頭部の両脇に穿孔された円孔の中に粘土板を丸めて成形した耳部を挿入する。立髪は撥形の前立をもつ特徴的な表現である。額に穿孔した円孔の中に前立の基部を挿入している。轡は長方形の鏡板を表現し、線刻で重四角文を描き、外側の区画を短線で埋めている。また、突帯によって面繋の革帯を表現し、手綱及び頬革と引手に挟まれた馬の頬には、斜線及び「×」が線刻されている。現存長39.8cm、現存高21.7cm。



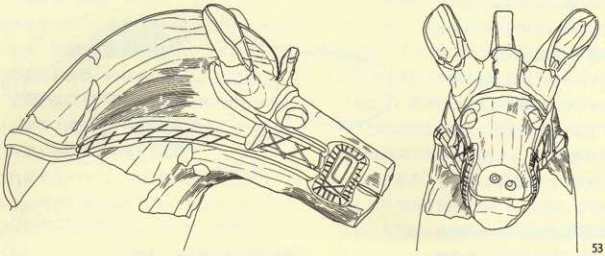
第492図　第13号墳出土遺物（5）

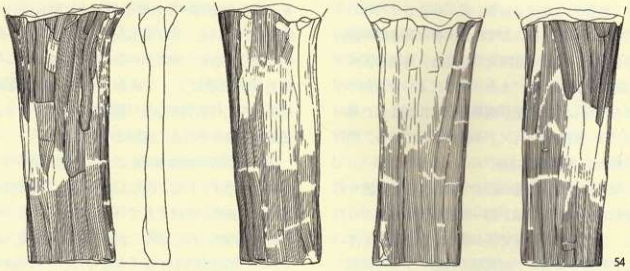
54～57は馬形埴輪の脚部である。出土位置や形態的な差異から、54と55～57は別個体と考えられる。54は蹄に向かって径が細くなり、器肉が厚いのが特徴である。切開再接合技法によって成形され、再接合部を内側に向け、その内面には丁寧な指ナデを施す。底径8.9×8.2cm、残存高26.4cm。胎土、焼成、色調等の特徴から53の馬と同一個と考えられる。

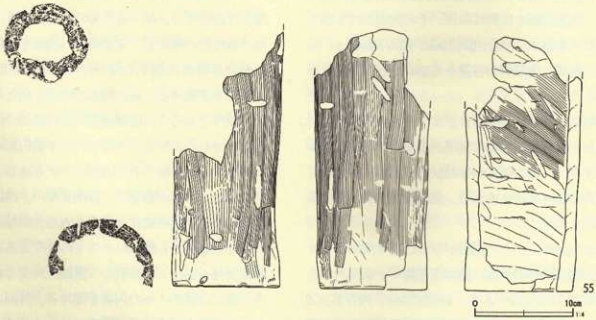
55～57の３本の脚はまとまった状態で出土した。これらに近接して68の尻尾が出土していることからすれば、南に頭を向けた状態で馬が樹立されていた可能性も考えられる。55は前脚、56・57は後脚になろう。

55は蹄部分がやや裾広がりになる寸胴形を呈する。脚部端部の外面に板押圧を施す。切開再接合技法による成形である。底径10.9cm、残存高26.9cm。基部幅6.5cm。56は断面扁円形を呈し、蹄部分が裾広がりとなる。切開再接合痕が良く観察でき、内面の切開再接合痕を指でナデ消している。底径11.2×9.3cm、残存高29.0cm。基部幅5.5cm。57は寸胴形を呈し、脚端部外面に板押圧を施す。切開再接合技法によって成形されている。底径10.0×9.5cm、残存高8.7cm。基部幅は不明であるが、基部はL接合である。底面は平坦である。

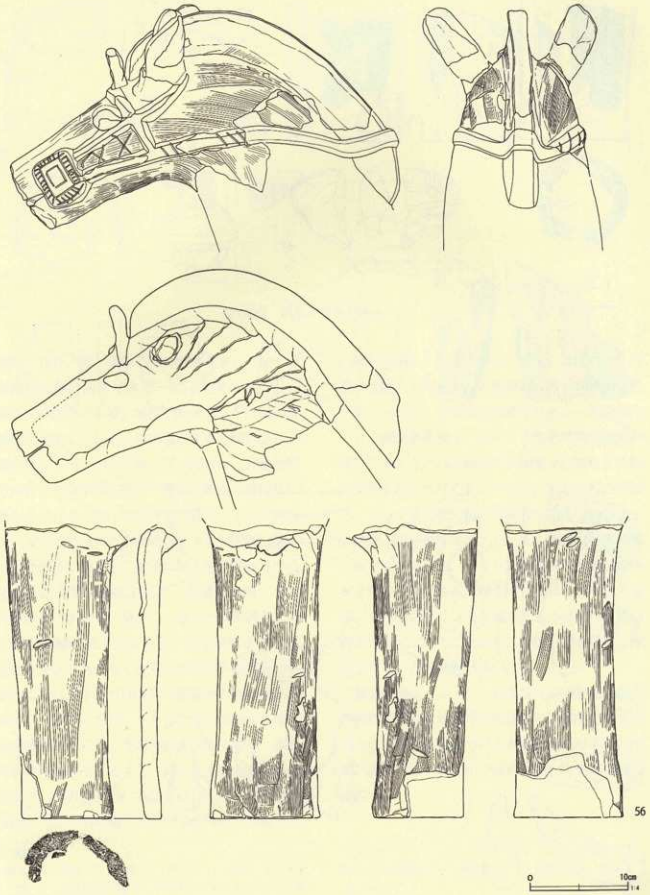
58～61は馬形埴輪の顔部である。58は轡の引手の破片と考えられる。図示した左端には剥離痕が見られ、鏡板が貼付されていたと考えられる。引手には53の馬と同じように斜めの短線が線刻されている。59は轡の引手壺と考えられる。粘土紐を環状に貼付する。60・61は馬の顔部である。顎の付け根付近の破片で、突出の弱い側板を貼付する。面繋の革帯の交差する部分には粘土粒を貼付し、辻金具を表現する。62は幅広の突帯を貼付した胸繋の破片であろう。63は後脚の付け根部分の破片と推定される。尻孔と考えられる不整円形の透孔が開く。外面に縦ハケ、内面にナデを施し、粘土紐の積み上げ痕が顕著で、器肉が厚い。64は突帯を貼付した胸繋の破片と考えられる。65は右前脚の付け根部分から胸繋にかけての破片である。胸繋は突帯を貼付して表現し、連続三角文を線刻する。胸には径約４cmの円孔を開ける。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。周溝から出土したため出土位置は特定できないが、線刻表現が53の馬に酷



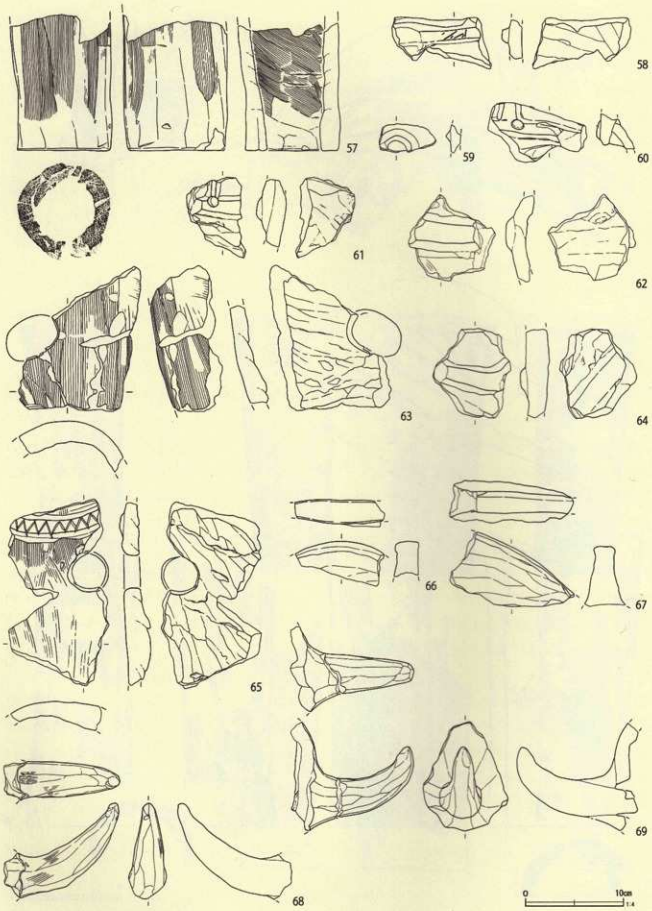




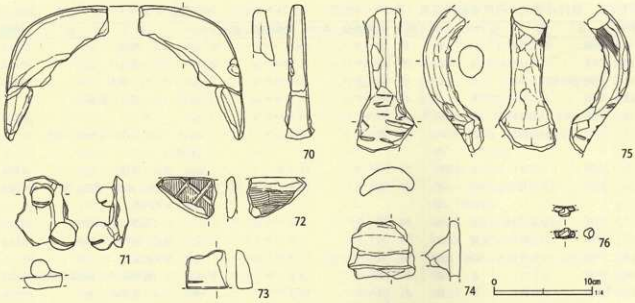
第493図　第13号墳出土遺物（6）



第494図　第13号墳出土遺物（7）



第495図　第13号墳出土遺物（8）



第496図　第13号墳出土遺物（9）

似しており、同一個体の可能性が大きい。66・67は板状立髪の破片である。66は周溝から出土し、鞍に近い部分である。端部の断面形は、片面が覆輪状に突出している。67は墳丘部から脚部54と一緒に出土した。やはり鞍に近い部分で、外面は横方向のナデを丁寧に施す。端部の断面は覆輪状に膨らんでいる。68・69は尻尾の破片である。粘土塊によって作られた中実成形である。尻部に開けられた円孔に挿入し、基部に粘土を補充している。弓なりに大きく跳ね上がり、先端部は細く尖る。外面はナデを丁寧に施し、一部ハケメが残る。70は鞍の前輪の破片であろう。逆U字形を呈する。粘土板を貼り合わせて成形されており、外面はナデを丁寧に施す。71は尻繋に装着された鈴杏葉である。二鈴のみを残しており、三鈴杏葉もしくは五鈴杏葉であろう。下端の鈴を大きく作り、側面の鈴は一回り小さくする。鈴は粘土塊成形で丸く仕上げ、横方向に鈴口を切り込む。

72～74は不明埴輪である。72は外面に斜格子状に線刻を施した破片である。外面には縦ハケ、内面には横ハケを施す。人物埴輪の被り物の可能性が考えられる。73は板状の破片である。本体部分からの剥落痕を残す。おそらく馬形埴輪の障泥の部分であろう。74は板状の本体部分に断面三角形の突帯を貼り付けたものである。家形埴輪の軒回り、もしくは人物埴輪の裾部の可能性がある。

時期　第13号墳は、ブリッジを中心に形象埴輪が樹立されていた。ブリッジの右側には馬形埴輪が2体以上樹立され、頭を南に向けた馬が立ち並ぶ。また、ブリッジの左側からも75の人物埴輪の腕が出土していることから、人物と馬を分けて樹立されていた可能性が高い。

築造時期は、出土した比企型坏や須恵器短頸壺、円筒埴輪、形象埴輪等の特徴から6世紀初頭を中心とした時期に位置づけられる。第83号溝跡の南側に展開する一群の中では最も古い古墳の一つであろう。

【埴輪凡例】
胎土　A：雲母　B：片岩　C：角閃石　D：長石　E：石英　F：軽石　G：砂粒子　H：赤色粒子　I：白色粒子　J：白色針状物質　K：黒色粒子　L：その他　M：礫
焼成　A：良好　B：普通　C：不良　A′：須恵質
色調　A：暗赤褐色　B：赤褐色　C：橙褐色　D：淡褐色　E：乳白色　F：灰褐色　G：黒褐色

第178表　第13号墳出土円筒埴輪観察表（第489～492図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考	図版
9	朝顔	DEHI	A	C	30	縦ハケ	12	横ハケ	10	№38　墳丘　周溝	181-1
10	円筒	DEHI	A	B	20	縦ハケ	11	横ハケ	10	№54　透孔一部残存	181-2
11	円筒	DEHI	A	C	40	縦ハケ	8	斜ハケ	7	№28・31・33　周溝	181-3
12	円筒	DEHI	B	C	40	縦ハケ	9	斜ハケ	11	№108・113　透孔一部残存	
13	円筒	DEHI	B	C	25	縦ハケ	9	斜ハケ	12	№39	182-1
14	円筒	DEHI	A	C	40	縦ハケ	9	斜ハケ	9	№112・133　2段目外面ヘラ描き一部残存	
15	円筒	DEHI	A	C	30	縦ハケ	14	ナデ		№29　透孔一部残存	183-1
16	円筒	CDEHIJ	A	B	20	縦ハケ	10	斜ハケ・ナデ	12	№8・18・30　周溝　透孔一部残存　大型円筒	182-2
17	円筒	CDEHIJ	A	B	40	縦ハケ	10	斜ハケ・ナデ	10	№24・35　周溝　大型円筒	182-3
18	円筒	DEHI	B	B	50	縦ハケ	9	斜ハケ・ナデ	14	№57　透孔一部残存	183-2
19	円筒	DEHI	C	C	45	縦ハケ	13	ナデ		周溝　基部幅3.1cm	
20	円筒	DEHI	B	B	45	縦ハケ	9	斜ハケ・ナデ	9	№58・59　基部幅4.8cm　基部R接合	183-3
21	円筒	DEHI	B	B	25	縦ハケ	10	ナデ		周溝　№34　基部幅5.1cm	183-4
22	円筒	CDEHI	A	E	40	縦ハケ	9	ナデ		周溝　基部幅4.6cm　底部棒状圧痕	183-5
23	円筒	DEHI	A	B	70	縦ハケ	11	斜ハケ・ナデ	11	№109・114・115　基部幅3.1cm　底部棒状圧痕	183-6
24	朝顔	DEHI	B	C	破片	縦ハケ	9	横ハケ	9	周溝　器厚薄い	
25	朝顔	CDEHI	A	C	破片	縦ハケ	10	横・斜ハケ	10	№72　花状部　外面ヘラ描き	
26	朝顔	DEHI	A	C	破片	縦ハケ	9	斜ハケ	9	№142　花状部　外面ヘラ描き	
27	円筒	DEHI	A	B	破片	縦ハケ	9	横ハケ	9	周溝	
28	円筒	EHIK	A	B	破片	縦ハケ	9	斜ハケ	10	周溝　内面横ナデ幅広	
29	円筒	DEHI	A	B	破片	縦ハケ	9	斜ハケ	10	周溝	
30	円筒	EHIK	A	B	破片	縦ハケ	11	斜ハケ	10	№123　内面横ナデ幅広	
31	円筒	EHIK	A	C	破片	縦ハケ	10	横・斜ハケ	10	周溝	
32	円筒	EHIK	A	B	破片	縦ハケ	9	横・斜ハケ	10	周溝	
33	円筒	CDEHI	A	B	破片	縦ハケ	10	斜ハケ	9	№55	
34	円筒	CDEHI	A	B	破片	縦ハケ	9	斜ハケ	9	№73　外面ヘラ描き	
35	円筒	DEHI	A	B	破片	縦ハケ	9	斜ハケ	9	№69　透孔一部残存	
36	円筒	DEHI	A	C	破片	縦ハケ	10	斜ハケ	10	№104　外面ヘラ描き　透孔一部残存	
37	円筒	DEHI	A	C	破片	縦ハケ	9	斜ハケ・ナデ	9	周溝　透孔一部残存	
38	円筒	DEHI	A	C	破片	縦ハケ	9	斜ハケ	11	№51　透孔一部残存	
39	円筒	DEHI	A	B	破片	縦ハケ	9	斜ハケ	12	№66　外面ヘラ描き	
40	円筒	CDEHI	A	C	破片	縦ハケ	12	ナデ		№6　透孔一部残存	
41	円筒	CEHI	A	B	破片	縦ハケ	11	ナデ		周溝　大型円筒	
42	円筒	CEHIJK	A	C	破片	縦ハケ	10	ナデ		№16　大型円筒	
43	円筒	CEHIJ	A	C	破片	縦ハケ	11	横ハケ・ナデ	9	№27　大型円筒	
44	円筒	CEHIJL	A	B	破片	縦ハケ・ナデ	10	横ハケ	10	周溝　大型円筒	
45	円筒	CEHIJ	A	B	破片	縦ハケ	10～11	横ハケ	11	№19　周溝　大型円筒	
46	円筒	CDEHIJ	A	C	破片	縦ハケ	12	ナデ		墳丘　大型円筒	
47	円筒	CEHIJ	A	D	破片	縦ハケ	11	ナデ		№11・13・21　大型円筒	
48	円筒	CEHIJL	A	C	破片	縦ハケ	9	斜ハケ	10	周溝　透孔一部残存　大型円筒	
49	円筒	DEHIK	A	B	30	縦ハケ	9	ナデ・斜ハケ		墳丘　基部幅3.6cm　基部R接合　内面掌紋圧痕	
50	円筒	CDEHI	B	D	25	縦ハケ	11	ナデ		周溝　基部幅4.2cm	
51	円筒	DEHI	A	B	30	縦ハケ	10	斜ハケ・ナデ	12	№132　基部幅4.3cm	
52	円筒	DEHI	A	D	破片	縦ハケ	12	ナデ		周溝　基部幅4.8cm	

第179表　第13号墳出土形象埴輪観察表（第493～496図）

番号	器種		胎土	焼成	色調	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考	図版
53	馬	頭部	DEHIK	A	C	ナデ・ハケメ	8	ナデ		№53　表採　試掘　3T南	192-1～4
54	馬	脚部	DEHI	B	C	縦ハケ	10	斜ハケ・ナデ	10	№124　切開再接合	192-5
55	馬	脚部	DEHI	B	C	縦ハケ	9	斜ハケ・ナデ	10	№143　墳丘　X60G　切開再接合	192-6
56	馬	脚部	DEHI	B	C	縦ハケ	11	斜ハケ・ナデ	11	№140　切開再接合	193-1
57	馬	脚部	DEHI	B	C	縦ハケ	14	斜ハケ・ナデ	9	№139・144　切開再接合　基部L接合	193-2
58	馬	顔部	DEHI	B	C	ナデ		ナデ		№152　X60G　面繋部分の破片	
59	馬	顔部	DEHI	B	C	ナデ		ナデ		墳丘　引手壺か	
60	馬	顔部	DEHI	B	C	ナデ		ナデ		面繋部分の破片	
61	馬	顔部	DEHIJ	B	C	ナデ		ナデ		周溝　面繋部分の破片	
62	馬	不明	EHIK	B	C	ナデ		ナデ		墳丘　胸繋か	
63	馬	脚部	DEHI	B	C	縦ハケ	9	ナデ		X60G　脚部付根付近の破片	
64	馬	胸部	CDEHI	B	C	ナデ		ナデ		№103　胸繋部分の破片	
65	馬	胸部	EHIK	B	C	縦ハケ	12	ナデ		周溝　胸繋に連続三角文の線刻	193-3
66	馬	立髪	DEHI	B	C	ナデ		—		周溝	193-6
67	馬	立髪	DEHI	B	C	ナデ		—		№125	193-7
68	馬	尻尾	DEHI	B	C	ハケメ・ナデ		—		№127　器面磨耗顕著　中実成形	
69	馬	尻尾	DEHIK	B	C	ナデ		ナデ		№120・129　中実成形	
70	馬	鞍	DEHI	B	C	ナデ		—		№142　墳丘　前輪部分の破片	193-8
71	馬	三鈴杏葉	DEHI	B	C	ナデ		ナデ		№137・138　中実の鈴を貼付	193-4
72	不明		DEHI	B	C	縦ハケ	10	横ハケ	12	周溝　人物被り物か	193-5
73	不明	板状品	DEHI	B	C	ナデ		ナデ		周溝　障泥の破片か	
74	不明		DEHI	B	C	ナデ		ナデ		人物の裾部か	
75	人物	右腕	DEHI	B	C	ナデ		—		№64　手の甲に板押圧痕顕著	193-9
76	人物	頭飾り	DHI	B	C	ナデ		—		周溝	

第14号墳（第497・498図）

第14号墳は調査区南端やや東寄りのW・X－59グリッドを中心に位置する。東側の第13号墳と西側の第15号墳によって挟まれた形で所在し、第15号墳とは約40cmまで接近している。微妙ではあるが、第15号墳の東側周溝外縁部が、本墳の周溝を避けるように直線的に延びていることから本墳が先行して築造されたものと推定される。

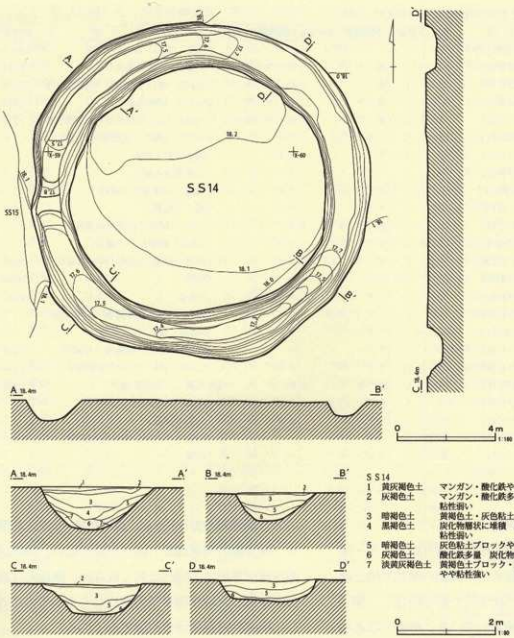
西に向くブリッジをもった小規模な円墳で、墳丘径10.36×9.97m、周溝径14.42×13.95mを測る。墳丘盛土は既に削平されており、内部主体等は検出されなかった。

墳丘部の平面形態は、比較的整った円形を呈する。周溝は全体に深く掘り込まれているが、概して北東側周溝は浅くなっている。また、周溝幅も第15号墳に面する南西側から西側にかけて幅を減じている箇所が見られるが、ほぼ均一に巡らしている。周溝幅1.65～2.33m、深さ0.28～0.88mを測り、南東側の周溝底面の標高が最も低い。周溝底面はほぼ平坦で、凹凸は見られない。断面形は逆台形を呈し、墳丘側が急角度に立ち上がるのに対し、周溝外縁部側はやや緩やかである。

ブリッジは西方向を向き、直線的に開口する。ブリッジの正面には第15号墳が所在し、第15号墳が後出することを傍証する。主軸方位はN－91°－Wを示す。

周溝覆土は大きく7層に区分される。最下層に灰褐色土（第6層）が堆積し、底面を被覆していた。その上には暗褐色、黒褐色、灰褐色、黄灰褐色等の土層が堆積する。このうち北西側周溝には中層の黒褐色土中に炭化物が層状に堆積しているのが確認された。

遺物は、全体に少なくブリッジ右側の南西側周溝、北東側及び東側周溝からややまとまって出土



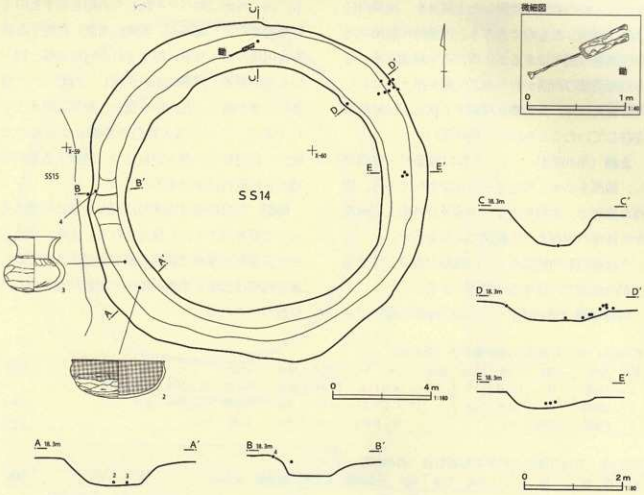
第497図　第14号墳（1）

した。ブリッジ右側の周溝底面には逆位の坏2と小型壺3が置かれていた。埴輪は円筒埴輪片が少量出土したにすぎない。おそらく、本来は埴輪を樹立していなかったものと考えられる。

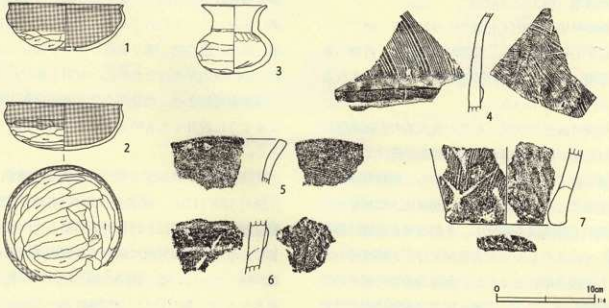
注目すべき遺物として、北側周溝の墳丘立ち上がり線際の底面に密着するような状態で一木鋤が出土した。残念ながら、木質の腐食が進行していたため取り上げることができず、実測図を図示することはできなかった。ここでは現地で記録された観察メモを中心にその概要を説明する。

出土遺物

木製品（第498図）　一木鋤は全長112㎝、柄長60㎝、刃部長52㎝、身幅17㎝、把手幅8㎝前後のほぼ完形品である。柄と身の長さがほぼ等しく、刃部は二又に深く抉り込まれていた。把手は一木でT字形の横木を作り出したものである。本例のような柄の短小化、刃部の長大化の特徴を示す類例として、深谷市城北遺跡河川跡出土例、美里町向居遺跡1号溝跡出土例等が知られる。出土状況の詳細については明確にし得ないが、周溝の掘削



第498図　第14号墳（2）



第499図　第14号墳出土遺物

など、古墳の造営に使用した土掘具を、周溝内に供献・埋納したものであろう。古墳時代前期の方形周溝墓の例ではあるが、坂戸市中耕遺跡第41号方形周溝墓の西溝から一木二又鋤が出土しており、埋葬儀礼に伴い長柄鋤を埋納する儀礼が伝統的に存在していたことを示し、興味深い。

土器（第499図）　1・2は口縁部が一度内湾し、端部を小さく外反させる比企型坏である。腰高な器形で、古相を示す。内面及び外面も口縁部から体部の中程まで広範囲に赤彩を施す。

3は扁円形の胴部から、口縁部が直立して立ち上がり端部で外反する小型壺である。

円筒埴輪（第499図）　4は口縁部の破片である。内・外面に斜ハケを施した古相を示すもので、特徴的なハケ工具から、本墳の南側に位置する前方後円墳の第4号墳に樹立された円筒埴輪と同一のものである。外面に赤彩を施し、内面にヘラ描きの一部が残る。乳白色を呈し、硬質な焼き上がりである。5～7は赤褐色を基調とするもので、胎土に白色粒子の混入が目立つ。隣接する第13号墳からの流れ込みであろう。

時期　第14号墳は周溝の状況から第15号墳に先行して営まれたものと推定される。また、出土した比企型坏が深身で腰高の器形を呈することから、築造時期は銭塚Ⅳ期新段階の6世紀初頭を中心に位置づけられる。

第180表　第14号墳出土遺物観察表（第499図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　考	図版
1	土師器	坏	(11.8)	4.7	—	EHIJK	30	良好	明赤褐	比企型坏　赤彩　周溝	
2	土師器	坏	11.8	4.8	—	CGHIJ	80	良好	明赤褐	比企型坏　赤彩　№12	178-4
3	土師器	小型壺	6.6	7.1	—	BCEHI	90	良好	灰黄	№11	178-5

第181表　第14号墳出土円筒埴輪観察表（第499図）

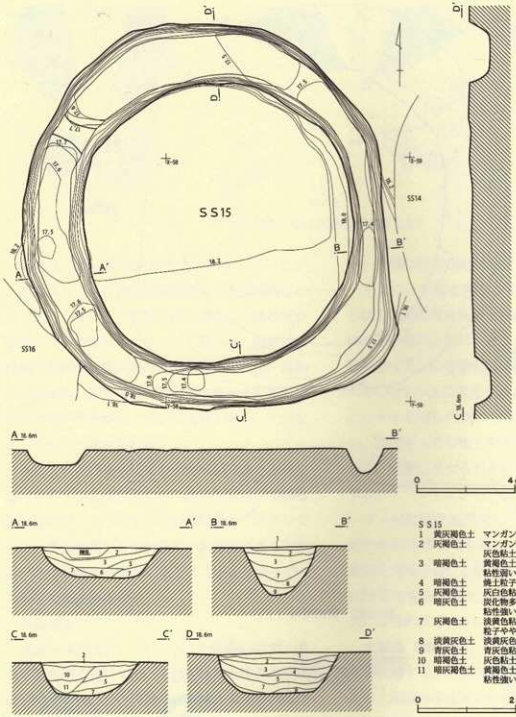
番号	器　種	胎　土	焼成	色調	残存	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備　考	図版
4	円筒	EHIJ	A'	D	破片	斜ハケ	11	斜ハケ	11	№15　内面ヘラ描き　外面赤彩痕	
5	円筒	DEHI	C	B	破片	縦ハケ	12	横ハケ	9	W60G	
6	円筒	DEHI	C	C	破片	縦ハケ	10	ナデ		周溝	
7	円筒	DEHIK	B	B	20	縦ハケ	10	ナデ		周溝　基部幅4.0cm	

第15号墳（第500・501図）

第15号墳は調査区南端中央のX－57・58グリッドを中心に位置する。東側の第14号墳、西側の第16号墳、さらに北側の第18号墳の3基に囲まれるように所在している。

周溝外縁部の状況から見た各古墳の先後関係は、第14号墳の西側周溝を本墳の周溝が避けて不自然に真っ直ぐに延びていることから、第14号墳が先行することは明らかである。同様に、第18号墳は本墳の北側周溝を避けて、南側周溝を直線的に掘削していることから、本墳が先行して築造されたことが読み取れる。ただ、西側の第16号墳との先後関係については、周溝外縁部の掘削状況だけでは判断することが難しい。つまり、第16号墳の東側周溝外縁部が外側に大きく張り出し、本墳の周溝に接近しているためである。おそらく、第14号墳と第16号墳の間に態々築造しなくてはならない何らかの理由があったために、双方を避けるように周溝を変形させ、墳丘部をできるだけ正円形になるように設計したものと想定するのが素直であろう。

北西に向くブリッジをもつ小規模の円墳で、墳丘径11.18×11.0m、周溝径17.04×14.80mを測る。墳丘部の平面形態は、比較的形の整った円形を呈しているが、第14号墳に接する東側周溝の幅が極端に狭くなっている。周溝の掘り込みは、総じて東半分を深く掘り込む。周溝幅1.24～3.10m、深さ0.60～1.00mを測る。周溝底面はほぼ平坦であ

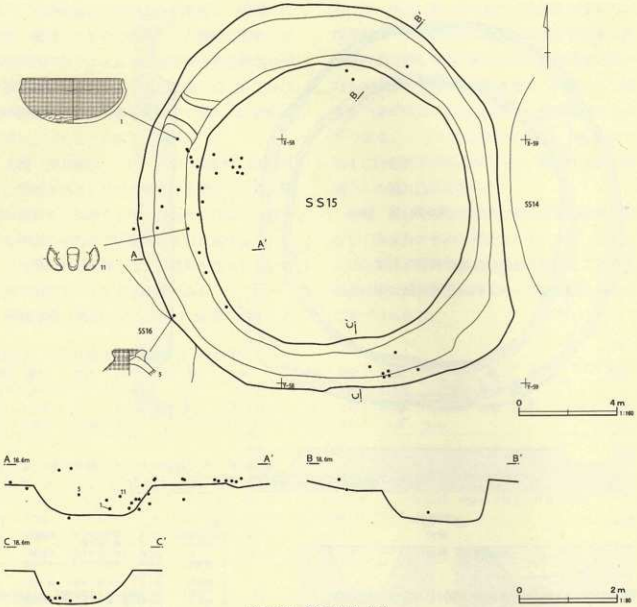


第500図　第15号墳（1）

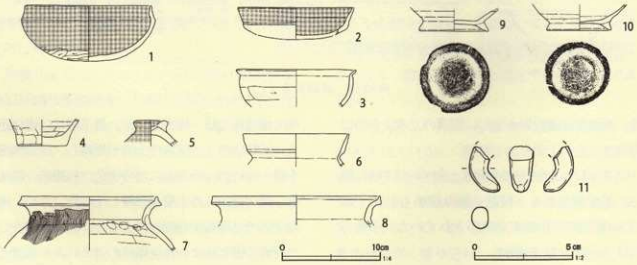
る。断面形は逆台形を呈し、周溝の立ち上がりは急角度に立ち上がる。

ブリッジは北西方向を向き、「ハ」の字状に開く。墳丘部よりも一段低く掘り窪められ、上幅0.75m前後の平坦面が造り出されていた。主軸方位はN－61°－Wを示す。

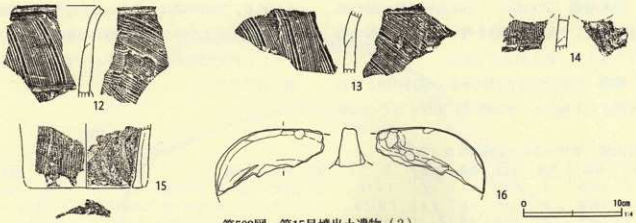
周溝覆土は大きく9層に区分される。周溝の各所で堆積状況は一様でないが、最下層には青灰色土、淡黄灰色土、灰褐色土等が堆積し、周溝底面を覆っていた。その上には暗灰色、灰褐色、暗褐色、黄灰褐色等の土層が堆積していた。なお、南側周溝の土層断面の観察によると、周溝が埋没した段階に掘り込まれた土壙状の落ち込みが確認されているが、その性格については明確にし得ない。



第501図　第15号墳（2）



第502図　第15号墳出土遺物（1）



第503図　第15号墳出土遺物（2）

遺物は、墳丘部分からも多少出土しているが、大半はブリッジ右側の西側周溝から南側周溝にかけて出土している。古墳に伴う遺物は土師器坏が主体で、その他のミニチュア・蓋・鉢・甕等は古墳時代前期の五領式期の所産と考えられる。埴輪は円筒埴輪、形象埴輪の破片が少量出土した。量的に少ないことから、本来は埴輪を樹立していなかったものと考えられる。

さらに、古墳築造以後の土地利用のあり方を知ることのできる資料として、酸化焔焼成の土師器高台付坏が、X－58グリッドの周溝から出土している。平安時代の9世紀後半の所産であることから、その段階まで周溝が完全には埋まり切っていなかったことが分かる。

出土遺物

土器（第502図）　1～3は土師器の坏で、それぞれ系譜を異にする。1は口縁部と体部の境に弱い稜を作り出し、口縁部が内傾する坏身模倣坏である。銭塚遺跡の報告書の中で「比企型模倣坏」と称された一群に該当する。在地産土師器の伝統を継承するように内外面に赤彩を施しているのが特徴である。銭塚Ⅳ期古段階に出現し、次期の新段階まで体部を扁平化させながら存続する。ブリッジ右脇の周溝底面から少し浮いた状態で出土した。おそらく、墳丘側から流れ込んだものであろう。2は赤彩を施した坏蓋模倣坏である。口縁部が外傾する。3は内面の放射状暗文は見られないが、内斜口縁坏の系譜を引くものであろう。

4はコップ形と推定されるミニチュアである。5は北陸系の蓋を在地で模倣したものである。ツマミが中窪みとなり、外面に赤彩を施す。6は北陸系の「5」の字甕の口縁部を模倣したと考えられる口径10.9㎝に復元される鉢である。7は胴部にハケメを施した甕で、口縁部が断面三角形を呈し、端部を上方に短く引き出した特徴的な破片である。法量は異なるが8も同様の口縁部形態を呈する。

9・10は酸化焔焼成の土師器高台付坏である。高台から体部下端を残す。底部回転糸切離し後、断面三角形の高台を貼付する。9は胎土に白色針状物質を含み、南比企産であることが分かるが、10には含まれていない。

土製品（第502図）　11は土製勾玉である。頭部を欠損する。西側周溝の覆土中層から出土しており、周辺の住居跡からの混入であろう。弥生時代後期の吉ヶ谷式期の所産と考えられる。

円筒埴輪（第503図）　12・13は、前述した特徴的なハケ工具から第4号墳に帰属する円筒埴輪と考えられるものである。内外面に斜ハケを施す古い特徴を示す。色調は12が淡褐色、13が乳白色で、12は外面に赤彩痕を残す。14は透孔の一部を残す。15は底部の破片である。幅5.5㎝の基部をR接合で成形する。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。第16号墳からの混入と考えられる。

形象埴輪（第503図）　16は馬形埴輪の鞍の破片である。立髪の剥落痕を残すことから前輪の破片であろう。粘土板成形である。

時期　第15号墳は占地状況から第14号墳と第16号墳よりも後出し、第18号墳に先行するものと考えられる。築造時期は、出土した比企型坏身模倣坏が銭塚Ⅳ期古段階から新段階の様相を示すことから、6世紀初頭から前葉を中心とする時期に位置づけておきたい。

第182表　第15号墳出土遺物観察表（第502図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.9)	4.7	—	EHIK	40	良好	にぶい橙	坏身模倣坏　赤彩　№27	178-6
2	土師器	坏	(11.8)	2.8	—	EHIJK	20	不良	にぶい褐	赤彩　W・X57G	
3	土師器	坏	(12.2)	3.8	—	CEHI	20	普通	明赤褐	W・X57G	
4	土師器	ミニチュア	—	2.8	5.0	CEGHI	80	普通	にぶい橙	X58G	
5	土師器	蓋	—	2.6	—	ACEHIJ	30	普通	橙	赤彩　№17	
6	土師器	鉢	(10.9)	3.4	—	CEHI	10	普通	橙	周溝　W・X57G	
7	土師器	甕	(13.8)	5.5	—	ACEHIJ	25	普通	橙	周溝　X58G	
8	土師器	甕	(17.2)	2.9	—	EHI	15	普通	橙	W・X57G	
9	土師器	高台付坏	—	2.3	7.0	EGHIJ	70	不良	橙	酸化焔焼成　南比企産 周溝　X58G	
10	土師器	高台付坏	—	2.7	6.6	EGHI	80	不良	橙	酸化焔焼成　南比企産か 周溝　X58G	
11	土製品	勾玉	残存長2.3　幅1.2			EHIJ	60	普通	褐	№20	

第183表　第15号墳出土円筒埴輪観察表（第503図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整　本/2cm	内面調整　本/2cm	備考	図版
12	円筒	CEHIJ	A'	D	破片	斜ハケ　11	斜ハケ　11	X58G　外面赤彩痕	
13	円筒	DEHIK	B	E	破片	縦ハケ　11	斜ハケ　11	X58G	
14	円筒	CDEHI	A	C	破片	縦ハケ　12	ナデ	W58G　透孔一部残存	
15	円筒	CEHIJ	B	B	20	縦ハケ　10	ナデ	X58G　基部R接合　基部幅5.5cm	

第184表　第15号墳出土形象埴輪観察表（第503図）

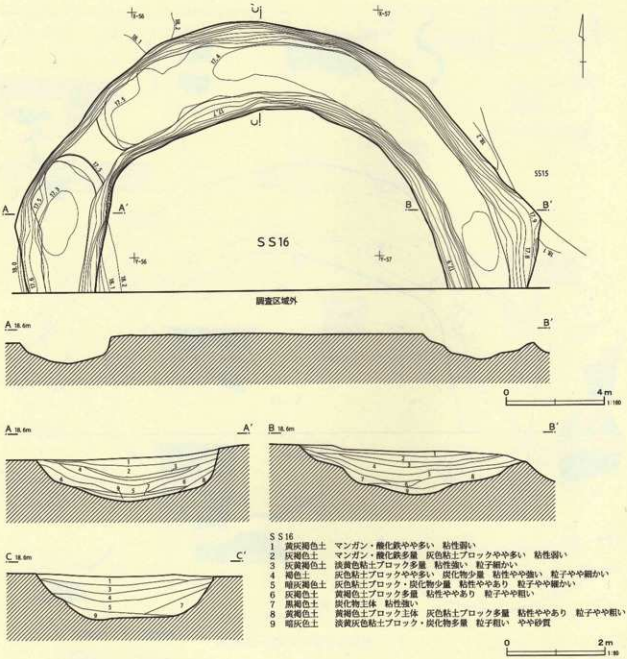
番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整　本/2cm	内面調整　本/2cm	備考	図版
16	馬　鞍	DEHI	B	C	ナデ	ナデ	X57G　前輪の破片で立髪の剥離痕を残す	

第16号墳（第504・505図）

第16号墳は調査区南端中央の壁沿い、X－56グリッドを中心に位置する。南側が調査区域外に延びているため、今回調査したのは全体の約2分の1である。東側には第15号墳が近接し、西側にはやや離れて第17号墳が所在する。なお、本墳の東側周溝外縁部が「く」の字に大きく張り出しているため、第15号墳の周溝とは一部切り合った状態になっている。両者の先後関係については明確にし得ないが、本墳を避けるように第15号墳が東側に片寄って築造された可能性が考えられる。また、第17号墳との間には約5mの空閑地がある。

北西に向くプリッジをもつ中規模の円墳で、墳丘径約13.80m、周溝径約21.20mに推定される。墳丘部の平面形態は、比較的形の整った円形を呈する。周溝はほぼ均一に巡らしているが、東側外縁部が外側に大きく屈曲している。周溝幅2.52～4.45m、深さ0.80～0.94mを測る。平均的な周溝幅は3mを超え、総じて掘り込みが深く、群中では周溝の掘削土量は最大と予想される。周溝底面は幅が広く、概ね平坦である。断面形は逆台形を呈し、墳丘側の立ち上がりはやや緩やかである。

プリッジは北西方向を向き、X字状に開口する。墳丘部よりも一段低く掘り窪め、上面に約1.1m



第504図　第16号墳（1）

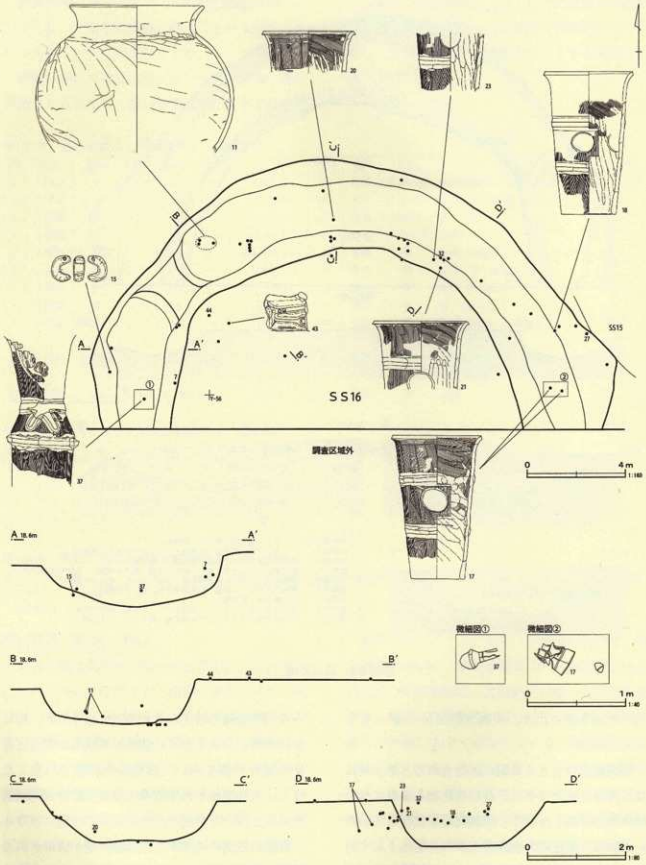
の平坦面を造り出す。主軸方位はN－44°－Wを示す。

周溝覆土は大きく9層に区分される。最下層には淡黄灰色粘土ブロック及び炭化物を多量に含む暗灰色土が薄く堆積し、周溝底面を被覆していた。

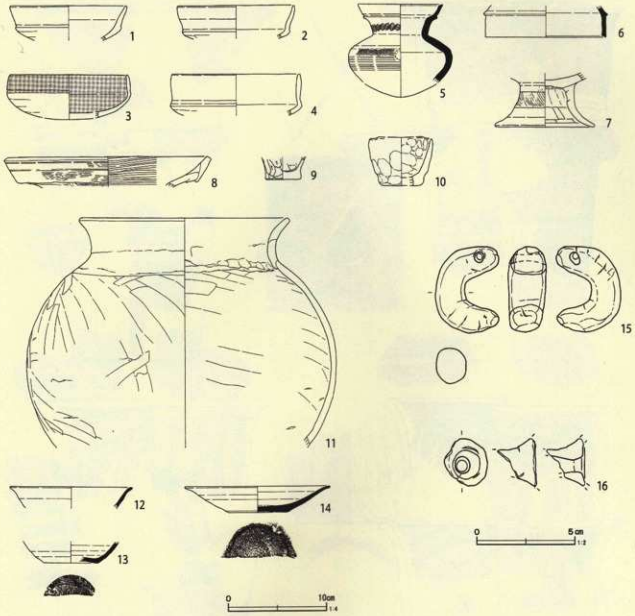
遺物は、墳丘部と周溝覆土から少量出土している。ブリッジ付近の墳丘部からは馬形埴輪の顔部と家形埴輪の破片が出土している。周溝からは比較的万遍なく出土しているが、北側周溝の墳丘側から円筒埴輪の破片がまとまって出土した。特に全体の形が分かるような個体が東周溝の調査区際から墳丘外側を向いて横倒しの状態で出土した。また、人物埴輪が西側周溝の調査区際で周溝底面から少し浮いた状態で出土した。この他にブリッジ左脇の周溝中央部から土師器の甕が破砕された状態で出土している。

出土遺物

土器（第506図）　1・2は口縁部が開いた坏



第505図　第16号墳（2）



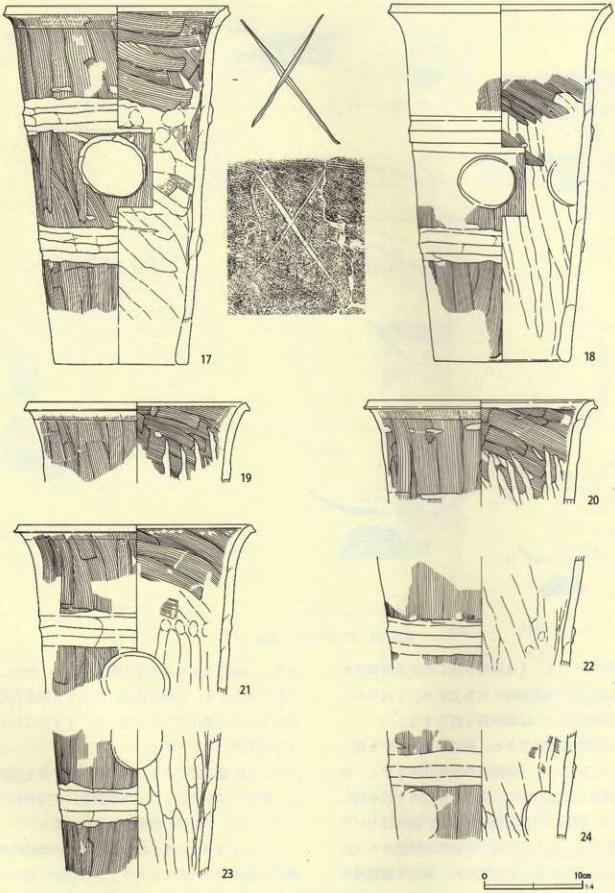
第506図　第16号墳出土遺物（1）

蓋模倣坏である。3は赤彩を施した比企型模倣坏で、口縁部が内傾気味に立ち上がる。4はやや大振りの模倣坏で口縁部が長く直立する。

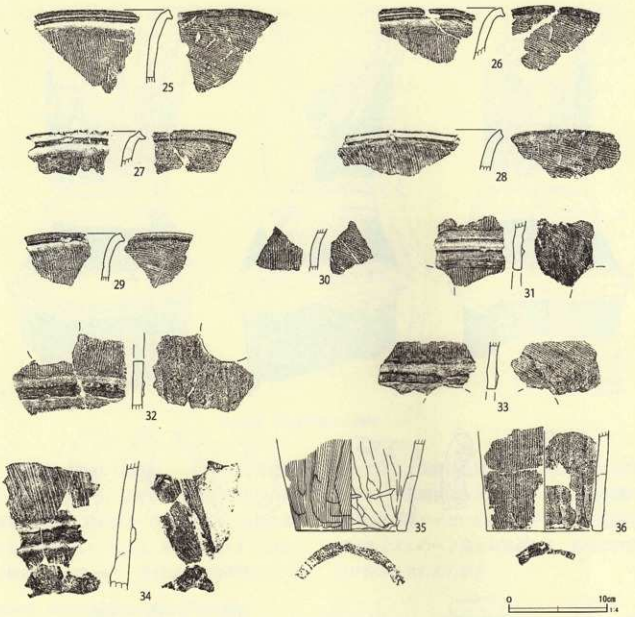
5は須恵器の甕である。周溝の覆土中から破片となって出土した。体部はやや扁球形を呈し、頸部と体部に櫛描波状文、体部下半にカキ目を施している。肩部には自然釉が付着し、断面はセピア色を呈する。胎土、焼成、色調等の特徴から大阪府陶邑窯跡群の製品と推定され、器形や櫛描波状文の特徴からＴＫ23型式に比定される。6は須恵器蓋坏の蓋である。口縁部の破片で天井部を欠損する。口縁部と天井部の境の段は明瞭で、断面三角形に突出する。口唇部内面には小さな段を作り出している。墳丘部から出土した。ＴＫ23ないしＴＫ47型式に比定される。

11は土師器の甕である。球形胴を呈する大型品で、胴部下半を欠損する。埋葬儀礼に使用されものが、ブリッジの脇に廃棄されたのであろう。

7～10は古墳には伴わない遺物で、古墳時代前期の五領式期の所産であろう。7は短脚の高坏である。脚部は径が太く、裾広がりになる。外面にハケメを施し、端部の内外面にヨコナデを施す。



第507図　第16号墳出土遺物（2）

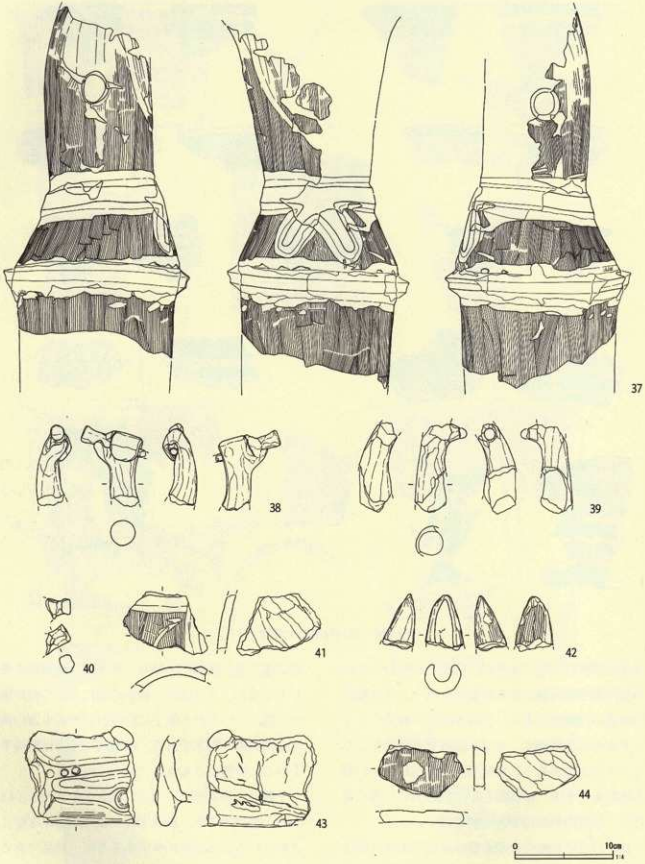


第508図　第16号墳出土遺物（3）

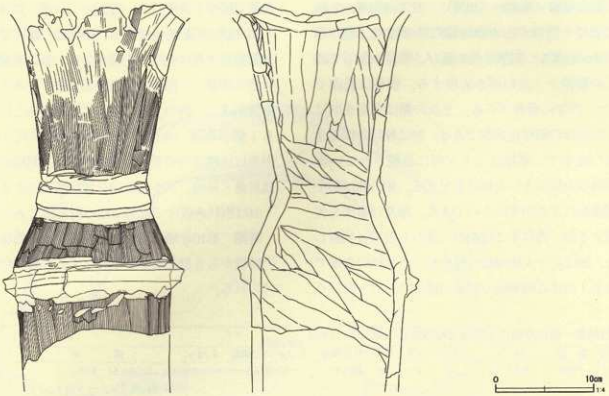
坏部の形状は不明であるが、内底面が凹むことから脚付埦や脚付鉢となる可能性も残す。8は複合口縁壺の口縁部である。口縁部内面に横位のヘラミガキを入念に施す。9は平底のコップ形をしたミニチュアであろう。10は平底の手捏ねで、小型の鉢形を呈する。口唇部を指で摘み出し、薄く波打つ。体部内外面に指頭圧痕を残す。

12～14は平安時代の須恵器坏と皿である。12は口径12.4cmに復元される坏で、体部は曲線的で口縁部は外に反る。13は底部回転糸切離し後無調整の坏である。ロクロ右回転。14の皿は、底部回転糸切離し後、底部に手持ちヘラケズリ再調整を施しているが、上げ底のため中心部に糸切り痕が微かに残る。いずれも胎土に白色針状物質を含む南比企窯跡群の製品である。時期的には9世紀後半を中心に位置づけられる。

土製品（第506図）　15は土製勾玉で、長さ4.3cmの大型品である。棒状工具により両面から穿孔されている。16は管状を呈する不明土製品である。端部がラッパ状に開き、器厚を増す。これらは直接古墳に伴う遺物ではないと考えられる。周辺の住居跡からの混入であろう。



第509図　第16号墳出土遺物（4）



第510図　第16号墳出土遺物（5）

円筒埴輪（第507・508図）　いずれも2条突帯3段構成品である。法量は口径23.0～24.9cm、器高36.5cm前後、底径11.3～13.9cmを測る。各段の長さは第1段長11.6～12.0cm、第2段長11.3～12.8cm、口縁長11.0～13.4cmで、各段がほぼ等間隔に区分されている。突帯は低M字形、透孔は円孔を基調とする。外面調整は一次縦ハケのみで、内面調整は口縁部に横ハケないし斜ハケを施す。口縁部内面には「×」のヘラ描きが見られる。胎土に白色針状物質を含むものが多い。

第185表　第16号墳出土遺物観察表（第506図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	坏	(11.8)	3.5	—	CEHI	20	良好	明赤褐	墳丘	
2	土師器	坏	(12.0)	3.4	—	CHI	20	不良	明褐	墳丘	
3	土師器	坏	(12.0)	4.3	—	EHIJ	25	不良	にぶい橙	赤彩	
4	土師器	坏	(13.1)	4.2	—	ACHI	20	普通	橙		
5	須恵器	甕	(8.6)	8.0	—	HIK	35	良好	暗灰	X56・57G　陶邑産　TK23型式	178-7
6	須恵器	蓋	(12.4)	3.2	—	GIK	5	良好	灰	墳丘　TK23・TK47型式	
7	土師器	高坏	—	5.5	10.0	CEHIJ	80	普通	橙	No.3	
8	土師器	壺	(20.4)	3.1	—	CEHIJ	25	普通	明赤褐	周溝	
9	土師器	ミニチュア	—	2.3	3.6	CEHI	80	普通	褐	X55・56G	
10	土師器	手づくね	(6.3)	4.9	(4.0)	CEHI	40	普通	橙	周溝	
11	土師器	甕	21.2	23.4	—	EGHIJ	40	良好	橙	No.6・7・46　X55・56G	178-8
12	須恵器	坏	(12.4)	2.2	—	DEGIJ	15	良好	灰	南比企産　周溝　X56・57G	
13	須恵器	坏	—	2.2	(5.6)	EIJ	30	良好	灰	南比企産　周溝　X56・57G	
14	須恵器	皿	(14.8)	2.6	6.0	EIJK	40	良好	灰白	南比企産　底部糸切り後手持ちヘラケズリ　周溝　X56・57G	
15	土製品	勾玉	長さ4.3	幅3.3	孔径0.7	EHIK	100	普通	赤褐	No.1　両面穿孔	178-9
16	土製品	管状品	—	—	—	EHIK	5	普通	にぶい橙	X55・56G	

形象埴輪（第509・510図）　37は円筒部から胸部までを残存する人物埴輪の半身像で、現存高35.8㎝を測る。胴部は長く延び、突帯によって幅広の腰帯と上衣の裾を表現する。腰帯は前面で「ハ」の字に垂れ下がる。上衣の裾は突帯を貼付しただけの簡略化表現である。38は棒状の採具をもつ左手で、掌部はミトン形に表現されている。採具は先端の太い丸棒状を呈する。39の腕は粘土塊成形による中実のものである。指及び掌部を欠損するが、残存する拇指の一部から右手と判断した。40は女子人物埴輪の髷を結った元結の先端である。41は人物埴輪の腰部の破片で、37と同じく、突帯で腰帯を表現している。

42・43は馬形埴輪である。42は耳の破片で、粘土板をU字形に丸め、先端が尖る。43は素環鏡板付轡を装着した飾馬の左側顔部の破片である。円筒側板式で、轡の立聞に接して3個の粘土粒（うち1個は剥落）を貼付した鋲留表現が見られる。引手には環状の引手壺の表現があり、同様の表現は岩鼻5号墳、下小見野稲荷塚古墳等がある。

44は板状の破片で家形埴輪の壁体部であろう。

時期　第16号墳は出土した円筒埴輪や馬形埴輪の特徴から6世紀前葉を中心とする時期に位置づけられる。

第186表　第16号墳出土円筒埴輪観察表（第507・508図）

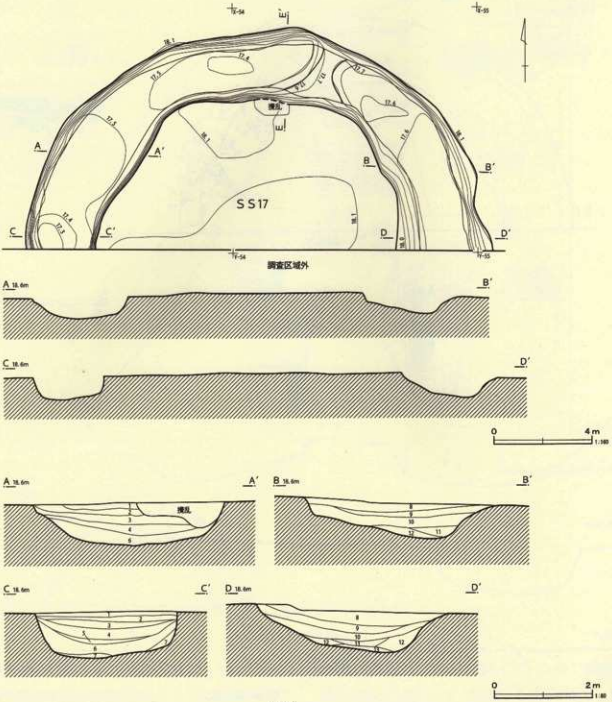
番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整 本/2㎝	内面調整 本/2㎝	備考	図版
17	円筒	DEHIJ	A	D	90	縦ハケ 11	横・斜ハケ・ナデ 10	№51　№50～51　X57G 口縁部内面「X」ヘラ描き	184-1・2
18	円筒	DEHIJ	A	D	30	縦ハケ 11	斜ハケ・ナデ 14	№12　X55・56・57G　基部幅5.4㎝	184-4
19	円筒	CDEHIJ	B	D	30	縦ハケ 9	斜ハケ・ナデ 12	周溝	185-1
20	円筒	DEHIJ	A	D	20	縦ハケ 11	斜ハケ・ナデ 12	№35	185-2
21	円筒	DEHIJ	A	D	30	縦ハケ 10	斜ハケ・ナデ 13	№23・27　X56・57G	185-3
22	円筒	DEHIJ	A	D	20	縦ハケ 9	ナデ	X55・56G	186-1
23	円筒	DEHIJ	A	D	25	縦ハケ 11	ナデ	№24	186-2
24	円筒	CDEHIJ	B	D	25	縦ハケ 10	ナデ・斜ハケ 12	№26　透孔一部残存	186-3
25	円筒	CEHIJ	A	D	破片	縦ハケ 11	斜ハケ 11	周溝　X56・57G	
26	円筒	CDEHIJ	A	D	破片	縦ハケ 12	斜ハケ 11	周溝　X56・57G	
27	円筒	CDEHIJ	A	B	破片	縦ハケ 11	斜ハケ・ナデ	№9	
28	円筒	DEHIJL	A	C	破片	縦ハケ 10	斜ハケ 10	X57G	
29	円筒	CDEHI	A	D	破片	縦ハケ 11	斜ハケ 12	X56・57G　内面ヘラ描き	
30	円筒	CEIJK	A	B	破片	縦ハケ 11	斜ハケ 12	X56・57G　内面ヘラ描き	
31	円筒	CDEHIJ	A	C	破片	縦ハケ 11	斜ハケ・ナデ 11	周溝　X56・57G　透孔一部残存	
32	円筒	CDEHIL	A	B	破片	縦ハケ 10	ナデ	№25　透孔一部残存	
33	円筒	CDEHIJ	A	C	破片	縦ハケ 12	斜ハケ・ナデ 12	周溝　X56・57G　透孔一部残存	
34	円筒	HIK	C	E	破片	縦ハケ 9	斜ハケ 9	軟質	
35	円筒	DEHI	A'	F	45	縦ハケ 10	ナデ	周溝一括　X56・57G　基部幅5.6㎝	184-3
36	円筒	DEHIJ	A'	D	20	縦ハケ 10	ナデ	X56・57G　基部幅5.7㎝	

第187表　第16号墳出土形象埴輪観察表（第509・510図）

番号	器種		胎土	焼成	色調	外面調整 本/2㎝	内面調整 本/2㎝	備考	図版
37	人物	胴部	DEHIJ	A	D	縦ハケ 11	ナデ	№49　突帯・板押圧痕あり	194-1
38	人物	左手	DEHIJ	A	D	ナデ	—	棒状物を握る　ミトン形　中実成形	194-2
39	人物	右手	DEHIJ	A	D	ナデ	—	掌部欠損　中実成形	194-3
40	人物	髷	CDHI	B	B	ナデ	—	周溝　髷の元結か	
41	人物	裾部	DEHIJ	A	D	ハケメ・ナデ 11	ナデ	腰帯の一部残存	
42	馬	耳	DEHI	A	D	ハケメ 10	ナデ	粘土板成形	194-4
43	馬	頭部	DEHIJ	A	D	ナデ	ナデ	№19　円筒側板式頭部　素環鏡板付轡	194-5
44	家	壁体部	DEHIJ	C	C	ハケメ 11	ナデ	板状の破片	

第17号墳（第511～514図）

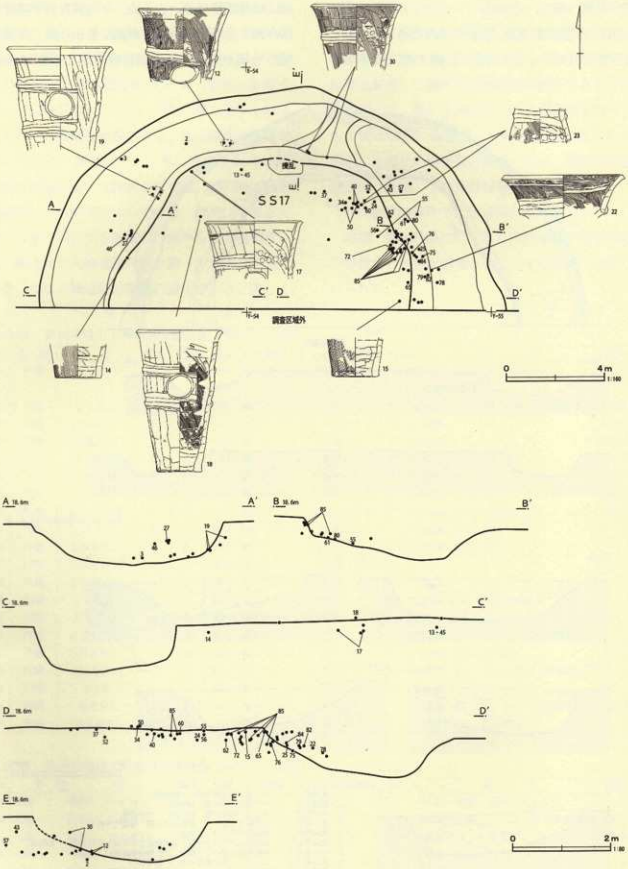
第17号墳は調査区南端やや西寄りの壁沿い、X－53・54グリッドを中心に位置する。南側は調査区域外に延びているため、今回調査したのは全体の約２分の１である。東側に第16号墳、西側に第27号墳が近接し、両墳に挟まれた恰好である。



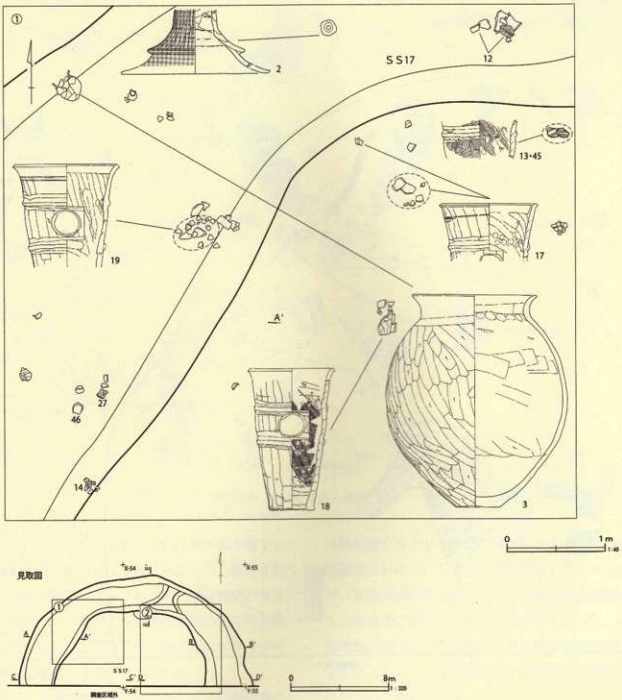
SS17

1	灰褐色土	マンガン粒子やや多い　粘性弱い
2	灰褐色土	マンガン粒子多量　粘性弱い
3	灰褐色土	マンガン粒子少量　粘性弱い　やや砂質
4	暗灰褐色土	灰色粘土ブロック・炭化粒子少量　粘性ややあり
5	黄灰色土	黄灰色粘土ブロック多量
6	暗灰色粘土	灰色粘土ブロック多量　黄灰色粘土小ブロックやや多い　粘性強い
7	暗灰色粘土	黄灰色粘土ブロック多量　炭化粒子やや多い　粘性強い
8	黄灰褐色土	マンガン・酸化鉄やや多い　粘性弱い
9	灰褐色土	灰色粘土ブロック少量　粘性弱い　やや砂質
10	暗灰褐色土	黄褐色土・灰色粘土ブロックやや含む　粘性弱い
11	灰褐色粘土	灰色粘土ブロック・炭化物やや多い　粘性強い
12	暗黄灰色粘土	黄褐色土ブロックやや多い　粘性強い
13	黄褐色粘土	灰色粘土・黄褐色土ブロック多量　粘性強い

第511図　第17号墳（１）



第512図　第17号墳（2）



第513図　第17号墳（3）

第16号墳とは約5ｍの間隔が空いている。また、第27号墳は本墳の周溝を避けるように周溝外縁部を大きく内側に屈曲させており、本墳が先行して築造されていたことが明確である。

北東に向くブリッジをもつ中規模の円墳で、墳丘径12.24ｍ、周溝径19.20ｍと推定される。墳丘部の平面形態は、墳丘立ち上がり線が各所で屈曲しており、やや歪んだ円形を呈するものと推定される。周溝はほぼ均一に巡らしているが、東側周溝外縁部に内側に大きく屈曲する箇所がある。周溝幅2.40～3.84ｍ、深さ0.68～0.96ｍを測り、掘り込みは全体に深い。周溝底面は一定しており、ほぼ平坦である。断面形は逆台形ないし箱形を呈し、概して墳丘側の立ち上がりが急角度である。

ブリッジは北東方向を向き、X字状に開口し、墳丘部よりも一段低く掘り窪めていた。主軸方位